

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(平成25年度～平成29年度)

「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(平成27年度～令和元年度)

「岐阜でステップ×岐阜にプラス地域志向産業リーダーの協働育成」

2024(令和6)年度



地(知)の拠点 継続事業

成果報告書



中部大学

はじめに

中部大学は、建学の精神「不言実行、あてになる人間」の下、地域社会について考え行動できる人材の育成を進めるため、2013年度～2017年度には、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（以下「COC事業」という）に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」を、2015年度～2019年度には、COC事業に加えて文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（以下「COC＋事業」という）に採択された「岐阜でステップ×岐阜にプラス地域志向産業リーダーの協働育成」を展開しました。COC事業が終了した2018年度からは、すでに役割を終えた一部の事業は整理統合しつつ、この事業を大学独自で取り組む事業として継続し、COC＋事業が2019年度をもって終了したことを受けて、2020年度からはその内容も整理しながら組み込みました。（以下「COC継続事業」という）

COC継続事業の目的は、中部大学が地域の知の拠点として、地域と連携した知の創造を通じて、地域に目を向け問題解決に取り組むことができる人材としての地域創成メディエーターを育成するとともに、地域再生、地域活性化に貢献することです。本年度もこの目的を達成するため、次の3つの活動 ①地域関連の正課教育「地域共生実践」と地域関連科目の授業の実施、②本学と地域（春日井市、春日井商工会議所、高蔵寺ニュータウン等）が連携しての生活・住環境を考えるまちづくり、③同じく本学と地域が連携しての世代間交流プログラムを実施しました。近年の地域創成メディエーターの育成においては、大学で認定した活動の枠を超えて、居住地の地域活性活動に自ら取り組み、資格を取得する学生も見られるようになりました。今年度も昨年度と同様にループリック評価を用いて、その達成要件を審査し、地域創成メディエーター認定学生を輩出することができました。

本成果報告書は、2024年度のCOC継続事業において実施した各種活動とその成果をまとめたものです。本報告書の内容を学内外に広く発信して、本学のCOC継続事業に関する理解を深めていただくとともに、次年度以降の地域連携教育・研究活動に活かしていきたいと考えています。今後とも、これまでのCOC並びにCOC＋事業の経験と成果を踏まえて、大学独自の「地（知）の拠点事業」をCOC継続事業として推進し、その人材育成目標及び地域貢献目標を確実に達成すべく努力を重ねていく所存です。学内外の多くの方々には引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2025年3月

中部大学 地域連携教育センター長
戸田 香

目次

はじめに

1. 概要

(1) 目的・目標・概要図	1
(2) 実施体制・メンバー表	7

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果	9
(2) ワーキンググループ等報告	
① 正課教育WG	27
② 生活・住環境を考えるまちづくりWG	29
③ 世代間交流プログラムWG	53
④ 全体	69
(3) その他プロジェクト活動報告	
① PBLゼミ	81
② C O C + 参加大学共通プログラム「サマースクールin各務原」	113

3. 新聞記事	121
---------	-----

1. 概 要

(1) 目的・目標・概要図

1. 概要

(1) -1 目的

中部大学（以下本学）が採択された文部科学省「地（知）の拠点整備事業」：『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業（以下本事業）』は2018年3月に5年計画の事業を終了したが、2018年度からは、当初設定された事業目的を継承しつつ、活動を整理統合しながら中部大学独自の事業として継続している。

本事業は初年度の報告書にも述べられているように本学が「地域課題の解決」および「地域に役立つ人材養成」を目的とする地域再生・発展のための地（知）の拠点となるための大学改革事業である。またその改革の成果を地域社会に還元し、地域社会に貢献していくことを目的としている。

本学はその基本理念として、『不言実行、あてになる人間』を信条とし、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を育成するとともに、優れた研究成果をあげ、保有する知的・物的資源を広く提供することにより、社会の発展に貢献する。」こととしており、その社会貢献上の使命として、「さまざまな社会活動に参画し、大学が保有する知的・物的資源を活用することによって、地域を中心とする社会の福利向上と発展に貢献する」ことを学内外に明確にしており、地域貢献・地域連携は本来、本学の使命でもある。

すなわち本学は建学の精神「あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として本事業を遂行しており、社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」としての学生育成を目指している。本学はこの事業を通してさらに一層地方大学の社会的使命を探究し、持続可能な未来社会の創造とその教育のあり方を力強く追求する。

I. 全体としての目的

本事業全体の目的をさらに具体的に述べれば、地域にも目を向けて地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指し、現代社会の主役である高齢者にとって安心・安全で豊かな社会づくり、まちづくりを地域に展開する。その成果を地域に還元し、都市づくりを進める。さらに、その成果と知識を広く日本社会全体に拡大することで日本の発展に貢献していく。こうした実践活動を学生自身が担っていくことで、学生自身が実践的知識を深め、支援技術を学び、前述の地域であてになる人材に育っていく。

II. 教育上の目的

地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指す。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として『地域共生実践』を設置し、学部・学科にも地域志向関連科目を設置した。こうして基礎教育と専門教育を交互に発展的

に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。

②「地域連携プログラム」

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育する報酬型インターンシップ型の就労システムを構築した。また、「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」といった地域貢献活動においても学生を社会貢献の実践的に参加させ、高齢者・地域住民と交流させることで、高齢化社会の地域課題を理解し、積極的に課題解決策を考える能力を涵養することも目的としている。

③「生活・住環境を考えるまちづくり事業」では学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成に資することも目的となっている。

④「世代間交流プログラム」では地域での高齢者問題を身近に感じることから、問題解決能力の育成を目指した。

⑤「中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC）」は地域に開かれた大学として社会人向けに学びの場を提供している。学生にとっては、授業をサポートすることで異なる世代との交流を通し様々な学びが得られることから、CAAC受講生と学生の双方にとっての「共育」の場となることを目指している。

Ⅲ. 研究上の目的

地域活性化の課題研究として以下の研究の推進を目的とする。

①「生活・住環境を考えるまちづくり事業」

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する開発研究を行う。

②その他社会貢献活動関連研究

「世代間交流プログラム」や「中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC）」の開設などの社会貢献に関連しながら、地域の課題をさまざまな観点から調査研究し、地域活性化と高齢者支援の手段を見いだしていくことを目的とした研究活動も並行して行う。

Ⅳ. 社会貢献上の目的

改革の成果を春日井を中心とした地域に還元し、地域の再生・活性化を支援するため、以下の地域社会貢献を目的とする。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

地域に役立つ人材を教育機関として養成し地域に送り出すことで社会に貢献する。地域の課題を現実的に理解し、解決のために行動を起こすことができる“あてになる人材”を養成する。そして地域のコミュニティ活動の中心人物であり、リーダーとなることのできる知識と問題解決能力を持ち、良好な対人関係を維持できる人材を地域に

送り出す。これは教育機関として重要な社会貢献活動である。さらに本事業では、地域の課題克服のための解決策を中部大学が軸となって展開し、現代社会の最重要課題である高齢化社会の課題解決に挑戦する。

② 「中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC）」

社会人の学び直しや健康づくりを目的とした教育を行う。

（１）-2 目標

COC (Center of Community) 及びCOC+については、それぞれ、2017 年度と 2019 年度に文部科学省補助金事業は終了し、2020 年度よりCOCの目的の継続並びにCOC+の理念の融合を鑑みて活動中である。また、活動テーマのうち、シニア大学が中部大学アクティブアゲインカレッジとして 2021 年度から独立、報酬型インターンシップは 2023 年度を以て終了した。今年度の目標はそれらを踏まえて以下のように設定した。

I. 全体

① ワーキンググループにおける活動の充実化

活動内容に応じて統合・再編されたグループによる活動の拡充など、ワーキンググループとして本事業全体の推進にあたる。（実施体制・メンバー表参照）

② 地域創成メディエーターの育成

2015 年度までの立ち上げ期間から、2016 年度以降、具体的アクションプランを本格的に実施して地域創成メディエーターの育成に取り組んでおり、今年度も引き続き地域創成メディエーターの輩出を図る。なお、COC+で輩出していた地域活性化リーダーについては、地域創成メディエーターへの統合を図り、2021 年度を以て資格認定を終了した。

③内部評価委員会の開催

学長を委員長とする学部長・研究科長会のメンバーに春日井市をオブザーバーに加えて内部評価委員会を開催し、事業活動の報告とそれに基づいて評価を受ける。

II. 教育

教育活動としては地域連携教育を推進する。

①地域連携教育の継続実施、教育システムの検証

- 1) 地域共生実践の春学期2講義・秋学期3講義、並列開講の運営。担当教員・協力者の勧誘と増員。
- 2) 地域創成メディエーターへの導き。
- 3) 地域創成メディエーター学生発表会（+エクспレッション）を開催し、地域創成メディエーターをルーブリック評価に基づき認定する。

②体験型学習の推進

- 1) PBLゼミの実施。
- 2) COC+参加大学共通プログラム「サマースクール」、および参加大学が企画・実施する体験型プロジェクトへの参画。

Ⅲ. 研究

研究活動として高蔵寺ニュータウンを中心としたまちづくり活動を展開し、生活・住環境を考えるまちづくりを推進する。

- ①春日井市等のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを主な目的として、社会基盤の整備、地域環境の改善に関する活動を行う。
 - 1) 「まちづくり」の意義と参加方法について学ぶ機会をつくる。
 - 2) まちづくり勉強会（学内）、タウンウォッチング（学外）、地域の自然環境調査（学外）等を実施する。
 - 3) 正課並びに自主活動を強化する。

Ⅳ. 社会貢献

高齢者・学生の交流活動を実施し、社会貢献活動として高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化および世代間交流プログラムを推進する。

- ①高齢者の健康寿命延伸や生活支援を目的に、若者による高齢者との交流を実践する。
 - 1) KCGサークル（地域発の健康教室）等の高齢者向けの健康に関する活動の実施。
 - 2) 様々な活動を通しての高齢者とのコミュニケーションの実施。

(1) -3 文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（2013（平成25）年度～2017（平成29）年度） 「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」概要図

春日井市の知の拠点＝**中部大学**

学部：7学部（29学科）、大学院：6研究科
学生数：約10000人、教員数：約500人

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

地域の方々や学生、地域と大学がキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現する。

中部大学は平成26年に開学50周年を迎える。中部大学ならやれる！中部大学が成功させる！

正課教育

正課教育との連携に基づいた課外教育

“らせん”構造
複合的学修システム

地域との関わり体験を通して他者を理解し、自身の価値観をみつめる

要請・課題・ニーズ

春日井市

自治体

市民

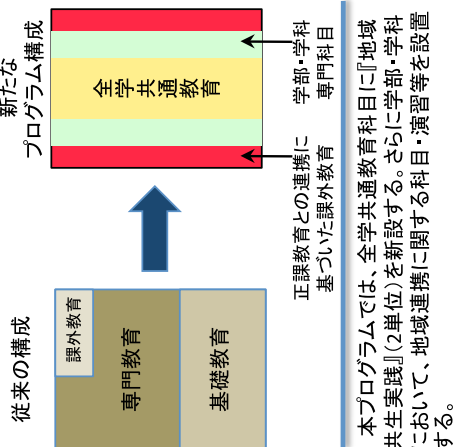
地域

企業

学校
(小・中・高)

その他

教育プログラム体系の新展開



本プログラム推定参加学生数：
25年度：約50名、26年度：約80名
27年度：約400名
28年度：約600名
29年度：約800名
(以降、順次増加する。)

学内の実施体制

学長主導の基、COC担当理事(兼)副学長を置き、本取組みを統括し、推進する。

中部大学のCOCとしての目標

- “地域”と言う名のシャワー（刺激）で学生を育てる。
- 地域だけで解決できない課題を、大学の持つシーズを活かして、地域と協働で取り組む。
- “まちづくり”の不可欠な資源が次代を担う若者である。この意識を高め、地域と共に育てる。
- 地域において優しい心配りができる、真のリーダー養成を目指す。
- 地域からあてにされる大学を目指す。
- 地域連携において、春日井モデルを明確にし、このモデルを全国に伝える。

＜教育改革＞

中部大学では、平成20年度以降大幅な教育改革を進めてきた。本事業では、更なる教育改革として、全学共通教育及び学部の正課の地域関連科目を導入した『新しい教育課程』を実施する。さらに、全学総合教育科を発展的改組し、『全学総合COC教育科』を新たにスタートさせる計画である。

- ・持続可能な日本社会を創造するために有用な新しい教育構造を提示できる
- ・情報共有システムに必要な技術を開発することができる
- ・調査した技術を開発することができる
- ・老若男女が同一の環境で学ぶ場を提供できる
- ・学生本人が人生プランを創造することができる

創造

地域創成メディアター
におけるアウトカムの例

自立

協働

自立

協働

自立

協働

自立

協働

自立

協働

自立

協働

自立

協働

協力・提案・シーズ

(注)2013年申請書類より抜粋

(1) -3 2020年度以降 COC継続事業概要図

中部大学における地域発展に貢献する人材の育成（2020年度以降）

【専門分野の学習】

～地域の課題を発見し、
解決の一步を踏み出す人材になろう～

COC（春日井市ほか）

学ぶ【10単位以上】+動く【1企画以上】年間100名程度
全学科対象

地域創成メデイエーター（学長名）認定

地域創成メデイエーター発表会・審査会

報酬型インターンシップ

生活・住環境を考えるまちづくり

コミュニティ情報ネットワーク

世代間交流プログラム

地域連携住居

シニア大学（CAAC）

その他
（ゼミ単位等のフィールド活動）

動く（課外）

1個以上の参加

学ぶ（正課）10単位以上

①見る ②聞く

④活躍する

③挑戦する

～『あてになる人間』具現化プロセス～

～地域（ふるさと）の良さを知り、
活躍できる人材として地域（ふるさと）に還ろう～

COC+（岐阜県）

学ぶ【3単位以上】+動く【5企画以上】年間15-20名程度 全学科対象

**COCと産業界ニーズへ振分け
地域活性化リーダーは地域創成メデイエーターと統合**

企業現場教育（岐阜県）は、産業界ニーズと統合

サマースクールは、COC「動く」へ移行

フィールド活動@ぎふは、専門分野の学習のため、
COC「動く」へ移行

PBLぎふゼミは、地域や周囲に関わっていくための
力を身に付けることができる体験型学習のため、
COC「学ぶ」へ移行

COC+でのリスク予防管理士指定科目は、
産業界ニーズと統合

【キャリア教育】

～リスク管理を修得して、
21世紀型企業人になろう～

産業界ニーズ

学ぶ【3単位+1企画】+動く【1企画】
年間150名程度 指定学科対象

リスク予防管理士（学長名）認定

3・4年

・下記全てについて必修
・下記総合評価にてA以上を認定

動く（課外）

1-3年

必

レポート

企業現場教育（愛知県等）
指定学科（※）各1回

企業現場教育（岐阜県）

学ぶ（正課 2単位以上・一部課外）

2-3年

リスク予防管理士指定科目
（バイオ産業リスク予防学ほか）2単位
（愛知企業等経営者クラス）特別講師招聘

単位認定基準に
従って

必 2

3年秋

リスク予防管理士特別セミナー
（愛知企業等経営者クラス）年2回

必

レポート

(2) 実施体制・メンバー表

(2) 実施体制・メンバー表

本事業を全学的に推進・実施するために以下のように学長を総括責任者とし、全学体制を構築。実際の事業は、全学部からの委員を含むCOC推進委員会を設置し推進にあたっている。またCOC推進委員会内に活動毎に3つのワーキンググループを設け各活動を展開し、事務部門は2019(令和1)年度から国際・地域推進部で事業全体の事務的管理にあたっている。(以下、中部大学COC継続事業体制図およびCOC・WGメンバー表参照)

2025年2月1日

中部大学COC継続事業体制図



2024年度 COC・WGメンバー

正課教育WG（活動番号①）

委員長	上野 薫	(応用生物学部 環境生物科学科)
副委員長	伊藤 守弘	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科)
委員	竹内 環	(生命健康科学部)
同	山羽 基	(工学部 建築学科)
同	伊藤 佳世	(経営情報学部 経営総合学科)
同	羽後 静子	(国際関係学部 国際学科)
オブザーバー	戸田 香	(地域連携教育センター長／生命健康科学部 理学療法学科)
(事務局)	出口 良太	(国際・地域推進部 地域連携課長)

生活・住環境を考えるまちづくりWG（活動番号②）

委員長	磯部 友彦	(工学部 都市建設工学科)
副委員長	松山 明	(工学部 建築学科)
委員	岡本 肇	(工学部 都市建設工学科)
同	横江 彩	(工学部 建築学科)
同	余川 弘至	(工学部 都市建設工学科)
同	上野 薫	(応用生物学部 環境生物科学科)
同	柴原 尚希	(工学部 都市建設工学科)
同	尾花まき子	(工学部 都市建設工学科)
同	山中 由実	(応用生物学部 食品栄養科学科)
同	山下紗也加	(応用生物学部 食品栄養科学科)
同	河村 陽介	(人文学部 メディア情報社会学科)
(事務局)	出口 良太	(国際・地域推進部 地域連携課長)

世代間交流プログラムWG（活動番号③）

委員長	堀 文子	(生命健康科学部 保健看護学科)
副委員長	戸田 香	(生命健康科学部 理学療法学科)
委員	野田 明子	(生命健康科学部 生命医科学科)
同	伊藤 守弘	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科)
同	横手 直美	(生命健康課学部 保健看護学科)
同	尾方 寿好	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科)
同	水上 健一	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科)
同	北辻 耕司	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科)
同	矢澤 浩成	(理学療法実習センター)
同	谷利 美希	(生命健康科学部 作業療法学科)
(事務局)	出口 良太	(国際・地域推進部 地域連携課長)

2. 活 動 報 告

(1) 全 体 の 活 動 成 果

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果

事業活動はCOC推進委員会ならびに活動毎のワーキンググループ（以下：WG）により行なわれてきたが、それらに共通する課題や統括する活動は地域連携教育センター長を中心にCOC推進委員会等COC全体で取り組んできた。それらの成果は以下のようなものである。

1) 中部大学COC継続事業の拡充

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」としての5年間が終了し、2018年度からは中部大学COC事業として再スタートをした。2020年度からは、2019年度を以て5年間の事業を終了した文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC+）の一部も加わり、2019年度まで6つあったWGを4つに統合し新たにCOC継続事業としてスタートした。2021年度には、シニア大学がシニアの枠を取り、広く社会人を対象とした中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC）として新たに独立事業として展開することとなったため、COC継続事業は3つのWGに整理統合された。以降、中部大学COC継続事業は正課外活動を春日井市及びその近郊地域へ拡げて活動することになった。

2) COCホームページ、Instagramによる情報発信の充実化

COCホームページおよびInstagramで各ワーキンググループの活動内容を中心に適宜更新し、地域連携活動のPRにつながるよう情報発信の充実を図った。

3) COC推進委員会の開催

各WGリーダーと各学部代表委員などからなるCOC推進委員会の構成員を見直した。委員は、委員長以下20名とし、COC推進委員会が各活動の報告と重要事項の審議にあたった。

4) 地域創成メディエーターの育成

2015年度までの立ち上げ期間を経て、2016年度はCOC事業における地域創成メディエーターの本格的育成実施年度となった。以降、2024年度も前年度同様に育成に努めた。

(1) COC継続事業における地域創成メディエーターの人物像

本学の建学の精神「不言実行、あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として、COC継続事業では「地域創成メディエーター」の育成を行っている。社会・産業界は、都市だけでなく「地域にも目を向けられる人材」を求めているため、「自ら行動できる人間」「考えられる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「がんばれる人間」「信頼できる人間」「地域にも目を向けられる人間」としての学生育成を図っている。学生が地域社会

に触れると「なぜ」「どうして」とこれまでの同学年の学生仲間関係とは違う驚き等を感じ、対処法や改善策を考えると自然と「考える力」が熟成される。

(2) 地域創成メディエーター育成のための具体的アクション

以上の認識の下に、COC推進委員会、事務局が一丸となって、他部門とも密接な協力の下に以下に示すような具体的なアクションプランを作り、着実に実施し、地域創成メディエーターの育成を図った。

- ① 正課外教育事業の体験を1つ以上とする。
- ② 地域創成メディエーター取得を促すチラシ（別紙①参照）を配布することにより周知を図った。
- ③ 推進委員は担当する正課科目の講義にて地域創成メディエーターの取得を学生に促した。
- ④ 教務支援課に依頼し、資格取得に必須となる正課科目を取得あるいは履修中の学生を学科ごとにリストアップした。
- ⑤ 各推進委員に学科毎（場合により学部）の上記リストを渡し、リストの学生に地域創成メディエーターを取得するように積極的に促した。
- ⑥ 推進委員および「動く」の活動担当者から68名の地域創成メディエーター候補の学生を選出いただき、「動く」の課外活動のフォローアップを行った。
- ⑦ 今年度の「動く」の活動は、31活動であった。（別紙②参照）
- ⑧ キャリア教育科目（自己開拓、社会人基礎知識）において、3年生以上のみ、大学側の受講人数制限により、本人の意思とは関係なく「学ぶ（正課教育）」を履修できない希望学生には、特別課題レポートを提出させて、地域創成メディエーター資格条件の「学ぶ」をクリアとする特別措置を認めた。特別課題教育科目では、2020年度まで必修科目としていた「地域共生実践」をその他5科目と同様に選択科目の1つとし、学生が資格取得に挑戦する可能性を拡げた。

従前COC+において開催していた「PBLぎふゼミ」は2020年度より「PBLゼミ」に改め、2024年度もキャリア教育科目の1単位として読み替え対象とした。また、COC+参加5大学合同プログラム「サマースクール」も条件付きでキャリア教育科目の1単位として読み替え可能とした。

- ⑨ 地域創成メディエーター育成のループリック評価で、育成する人材像を明確にした。（別紙③参照）

(3) 地域創成メディエーター取得学生の推移

立ち上げ期間の2014年度4名及び2015年度5名から、本格実施となった2016年度は144名、2017年度からはループリック評価に基づき「地域創成メディエーター」の資格を132名、2018年度は108名、2019年度は66名、2020年度は60名、2021年度は75名、2022年度は55人、2023年度は44名に授与した。2024年度は36名の学生に授与できる運びとなっている。

5) 地域創成メディエーター学生発表会「+エクスプレッション」開催（別紙④参照）

2月20日（木）本学不言実行館アクティブホールとスチューデント・コモンズにおいて、中部大学地域創成メディエーター学生発表会「+エクスプレッション」を開催した。

地域創成メディエーター資格認定の最終課題「+エクスプレッション」は、講義での規定単位取得に加え、キャンパスを地域に広げた課題体験に参加・実践した学生たちが、まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果を発表。口頭発表3名、ポスター発表33名の学生が地域創成メディエーター候補生となった。参加者は、一般市民13名、教職員50名、学生39人が来場した。

参加者にアンケートを依頼し、19名から回答を得た。（別紙⑤参照）

なお、当日、公の理由により発表が困難である学生は3月にポスター発表を行った。

6) 内部評価委員会の開催

3月6日（木）に学部長・研究科長会構成員からなる内部評価委員会が開催され、2024年度事業活動の内部評価が行われた。オブザーバーとして春日井市にも出席いただいた。

7) ぎふCOC+事業推進コンソーシアムへの参画

岐阜大学を中心とした事業協働機関としてCOC+事業に参加した5大学（岐阜大学、中部大学、中部学院大学、日本福祉大学、名古屋学院大学）で設立されている「ぎふCOC+事業推進コンソーシアム」に引き続き参加した。

8) 採択他大学との交流と活動

(1) COC+参加大学共通プログラム

・「サマースクール」

各務原市をフィールドに8月28日（水）、29日（木）、9月4日（水）の3日間にわたり、「サマースクール2024 in 各務原～航空宇宙のまち各務原市のイメージ戦略を考える～」が開催された。航空宇宙の街としての認知度を高め、市内外の人たちにとって住みやすい街、働きたい街となるためのイメージ戦略について、大学生の視点からアイデアや改善点を提案した。この活動には岐阜大学をはじめとするCOC+参加の5大学より20名の学生が参加した（本学4名）。優秀な提案をしたチームには市長賞が贈られた。

各務原市長賞・・・チームみっばらさん「宇宙航空のまちで推し活ツアー」

（人文学部コミュニケーション学科3年 森下真翔）

・「COC+多治見プロジェクト2024」

多治見市をフィールドとして名古屋学院大学主催「COC+多治見プロジェクト2024」が11月23日（土）に1DAYプログラムで開催された。「地元企業の事業展

開や官民協働まちづくりの取り組みから考える多治見市の活性化」をテーマに、多治見をもっと元気にする取り組みを大学生の視点から提案した。本学からは2名（計7名）が参加した。

(2) 「全国学生交流会」に参加

岐阜大学と金沢工業大学を幹事校として、COC事業・COC+事業関係大学をはじめ、地域をフィールドにした地域志向に取り組んでいる全国の大学・高等専門学校が互いに活動の様子や成果を発表する「全国学生交流会」が2月28日（金）に対面とオンラインでハイブリッド開催された。本学からは、人文学部の渋谷稀斗が「地元での挑戦 小牧市東部地域におけるまちづくりへの貢献」と題した発表を行った。

今から始める、が正解!
就活の準備

免許、資格欄を
充実させたい!!

勝ちに行く“ガクチカ”

中部大学 学長認定資格

地域創成メディエーター

Mediator

地域創成メディエーターって何?

地域の人々とともに
さまざまな地域の問題解決への取り組みを経て
「行動できる人」「自ら道を切り拓く人」「頑張れる人」
「信頼できる人」として
中部大学が自信を持って認定し、社会に推薦できる学生の証です。

地域がぜんぶ、 キミのキャンパス。

「地域創成メディエーター」資格とは、
在学中から社会経験を積み、社会で生きる力を身につける
中部大学式「人材育成体験プログラム」です。



在学中から
幅広い
価値観が学べる

自分の
職業適性が
わかる!

直接就職に
結びつく
可能性アリ!

コミュカや
思考力が高まる

就活時、
「ガクチカ」に
使える!

実際に現場を
体験できるから
見識が広がる

学部学科を超えた
仲間ができる

いつからでも
気軽にスタートできます!
気になったら
まずは、事務局へGO!!

事務局：地域連携教育センター キャンパスプラザ2階

「地域創成メディエーター」の資格取得は、
地域と社会に選ばれるために必要な **実践力・応用力・人間力** を養うために役立ちます。

Step.1

単位修得 & 課題設定

規定単位を修得し、審査基準をクリアした人に、学長認定の資格が授与されます。

学ぶ

授業で
知識を習得
正課

A の科目から 2 単位以上、B の科目から 1 単位以上
C 科目から各 2 単位以上、合計 10 単位以上 必須

自立した社会人として地域の人々に関わるために、
地域社会の多様な背景を知り、専門的な知識を身につけよう。

2023年度以降入学生対象

A 特別課題教育科目

「地域共生実践」
「持続学のすすめ」
「地域の防災と安全」
「地球を観る」 「人類と資源」
「グローバル環境論」

B リベラルアーツ教育科目

「自己開拓 A」
「自己開拓 B」
「リベラルアーツ課題演習 A」
「リベラルアーツ課題演習 B」
「リベラルアーツ課題演習 C」

C 地域関連科目

メディエーター資格取得の動機や
地域の理解に役立つ科目を自由選択
選択した科目で会得した知識が、地域課
題へどう繋がったか、「関連」や「動機」、
「成果」を表現できればOKです。

年 1 回 開催 PBL ゼミ

実社会に対応するリアルな問題に対峙する課題解決型学習 (Project Based Learning) で仕事に
必要な共同作業の能力を養い、実践的思考を鍛えます。

★「学ぶ」 B リベラルアーツ教育科目の 1 単位に読み替え可能

5大学共通プログラム

年 1 回 開催 サマースクール

地(知)の拠点事業に参画する他大学の学生と一緒に、地域の方々の話を聞き理解を深め、
実際の課題に対して提案を行うことにより、今後のキャリアの選択肢を広げることを目指します。
★本活動は「動く」の活動の一つですが、本活動のほかに別の「動く」の活動にも参加・実践した
場合に限り、「学ぶ」 B リベラルアーツ教育科目の 1 単位に読み替え可能

動く

課外体験に
参加・実践
課外

1 プロジェクト以上に参加 必須

キャンパスを地域に広げて、まちの再生や地域活性化など、
特有の課題に取り組む現場で解決策を考えて実践にあたります。

▼プロジェクト活動の一例 ※そのほかさまざまな活動が計画されています。プロジェクトの詳細は事務局まで

高齢者との交流

- CAACの講義を補助
- 世代間交流会への参加
- 高齢者施設での音楽ボランティア

イベントの運営を 通して地域貢献

- 障がい者スポーツのすすめ
- 学生主体の標準化教育
- おもしろ科学実験ネットワーク

地域のまちを知る まちづくりを考える

- 高蔵寺ニュータウン地域連携住居
への入居と地域交流イベント参加
- 新・森の健康診断
- サマースクール

技術を身につけながら 地域貢献

- イベントでの救護ボランティア活動
- 子育てセミナー
- こまきこども未来館
プロジェクトマップ制作

Step.2

資格申請

申請は手続きカンタン

申請書はパソコンでダウンロード! 必要
内容を書き込み、単位証明書を添付して
申し込むだけ。

いつでも教職員が全面サポート!

メディエーター資格取得は自主性・自発
性を大切にしていますが、困ったときや
分からないことは何でも相談を。ヒント
やアドバイスをします。

Step.3

成果発表

PLUS エクスプレッション

資格取得の最後の課題がこの発表会。キャンパス内外
を交えた審査員の前で、自身で設けた課題への取り組
みと、その成果をプレゼンテーションします。自分自身
の成長ぶりをしっかりアピールするのがポイントです。

課題への
取り組みと
成果

自分の変化
気づき
成長

会得した力を
今後どう
活かすか

審査

学長認定

地域創成 メディエーター 誕生

中部大学の建学の精神、「あてになる人
間」=地域創成メディエーターに見事、認
定された学生には、認定証が贈られます。
資格取得までの道のりが社会で生きる力
となり、その達成感は「自分はやれ
る」という自信につながるハズ!

この資格は一度認定されれば
終了ではありません。新たな
挑戦を続け、自分をどんどん
育てましょう!

いつでも
何度でも
チャレンジ
できます



中部大学

地域連携教育センター キャンパスプラザ 2階 TEL.0568-51-9872

e-mail:coc@office.chubu.ac.jp

https://www.chubu.ac.jp/community-extension/human-resources/mediator/

別紙② 2024年度 地域創成メディエーター「動く」の活動

2024年度 地域創成メディエーター「動く」の活動 (31 件)

No	活動名称	担当教職員	WG名	WGリーダー名	SDGsの17の目標
1	新・森の健康診断	環境生物科学科	上野薫	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	15, 12, 11
2	きみは未来の建築士	建築学科	松山明	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	11, 9
3	高蔵寺ニュータウンの定点観測	都市建設工学科	磯部友彦	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	11
4	健康救急フェスティバル ※2024年度 活動なし	食品栄養科学科	宮田茂 矢野智奈美	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	3, 4, 6
5	春日井市における産地直売所を介した地域活性化への取組み	食品栄養科学科	山中由実 小川宣子	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	3, 12
6	春日井まつり 水害に対する地域住民の防災意識向上プロジェクト	都市建設工学科	武田誠 尾花まき子	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	11, 13, 17, 4
7	学生主体の標準化教育	経営総合学科	伊藤佳世	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	1～17
8	星空ネットワーク	数理・物理サイエンス学科	大嶋晃敏	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	4
9	岐阜県東濃地区の食文化の伝承 ※2024年度 活動なし	食品栄養科学科	山下紗也加 小川宣子	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	3, 4, 11, 12
10	こまきこども未来館プロジェクションマッピング制作 @MIR	メディア情報社会学科	柳谷啓子 柊 和佑	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	4 (他、コンテンツに応じて 変化)
11	アスコンについて「考動、未来につなぐ・残す」	都市建設工学科	余川弘至	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	11, 12
12	ボランティア演奏隊	国際学科	伊藤正晃	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	3, 17
13	おもしろ科学実験ネットワーク	数理・物理サイエンス学科	大嶋晃敏	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	4
14	メディア表現を活用したサポテン芸デザインプロジェクト	メディア情報社会学科	河村陽介	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	4, 9, 12
15	多学科協同による乳児と母親に対する「子育てセミナー」	保健看護学科	横手直美	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4
16	パラ（障がい者）スポーツのすすめ	スポーツ保健医療学科	伊藤守弘	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4
17	健康寿命延伸のための快眠・運動教室	生命医科学科	野田明子	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4, 11
18	体力測定会	理学療法学科	戸田香	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3
19	福祉用具体験セミナー	保健看護学科	堀文子	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3
20	KCGサークルでの健康教室指導	理学療法実習センター	矢澤浩成	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4, 5, 11
21	地域イベントに対するボランティア活動（救護・消防団）	スポーツ保健医療学科	北辻耕司	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 17
22	地域におけるスポーツ・防災活動を通じた地域活性化への取組み	スポーツ保健医療学科	尾方寿好	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4
23	アクティビシアとの交流活動	作業療法学科	谷利美希	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4, 11
24	CAAC講義の補助（健康増進実習など）	スポーツ保健医療学科	水上健一	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4, 10, 11, 16
25	石尾台町内会夏祭りサポーター	作業療法学科	谷利美希	③世代間交流プログ ラム WG 生命健康科学部 保健看護学科 堀文子	3, 4, 11
26	臨床実践プログラム (医療系 報酬型インターンシップ)	臨床工学科	武田明	④全体 地域連携教育センター 副センター長 川本善之	4, 8
27	地域連携住居 KNT創生サポーターズ（CU+）※UR居住者のみ	学生支援課	佐久間好久 殿垣博之	④全体 地域連携教育センター 副センター長 川本善之	11
28	ボランティア・NPOセンター	学生支援課	唐木純也	④全体 地域連携教育センター 副センター長 川本善之	11, 14, 15
29	サマースクール	地域連携教育センター	川本善之	④全体 地域連携教育センター 副センター長 川本善之	9, 11
30	小牧市東部でつながりやってみようプロジェクト	地域連携課	出口良太	④全体 地域連携教育センター 副センター長 川本善之	11, 17, 9
31	稲作体験	食品栄養科学科	前野善孝 関川達志 呂鋭 矢野智奈美 宮田茂	②生活・住環境を考 えるまちづくりWG 工学部 都市建設工学科 磯部友彦	2, 4, 12, 15

別紙② SDGs の 17 の目標

SDGsの17の目標

目標1 (貧困)		あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。
目標2 (飢餓)		飢餓を終わらせ、食糧安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。
目標3 (保健)		あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。
目標4 (教育)		すべての人々への包括的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。
目標5 (ジェンダー)		ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女子のエンパワメントを行う。
目標6 (水・衛生)		すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。
目標7 (エネルギー)		すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な現代的エネルギーへのアクセスを確保する。
目標8 (経済成長と雇用)		包括的かつ持続可能な経済成長、およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用とディーセント・ワーク(適切な雇用)を促進する。
目標9 (インフラ、産業化、イノベーション)		レジリエントなインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進、およびイノベーションの拡大を図る。
目標10 (不平等)		各国内および各国間の不平等を是正する。
目標11 (持続可能な都市)		包括的で安全かつレジリエントで持続可能な都市および人間居住を実現する。
目標12 (持続可能な生産と消費)		持続可能な生産消費形態を確保する。
目標13 (気候変動)		気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。
目標14 (海洋資源)		持続可能な開発のために海洋資源を保全し、持続的に利用する。
目標15 (陸上資源)		陸域生態系の保護・回復・持続可能な利用の促進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の防止・防止及び生物多様性の損失の防止を促進する。
目標16 (平和)		持続可能な開発のための平和で包括的な社会の促進、すべての人々への司法へのアクセス提供、およびあらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度の構築を図る。
目標17 (実施手段)		持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。

※内閣府地方創生推進事務局「地方創生に向けた自治体SDGsの推進について」を抜粋

別紙③ ルーブリック評価〈A-2表〉

【ルーブリックは、学生に原せて、この項目で評価されることを伝えていただきますようお願いいたします。】

＜A-2表＞

申請者氏名		学情番号	所属	推薦者(教職員)	氏名	評価					点
認定活動名称		大項目		A(点)	B(点)	C(点)	D(点)	E(点)	F(点)	G(点)	点
項目	区分	区分	項目	点	点	点	点	点	点	点	点
1) 地域で生じている問題について理解し、解決のための地域的取り組みに自主的かつ継続的に仲間と協力し参加することができる。またその活動に意義を見出すことができる。	1	合計10単位の整合性がとれている	3	十分整合性がとれている	整合性がとれている	整合性がとれている	整合性がとれている	整合性がとれている	整合性がとれている	整合性がとれている	点
2) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	2	自由選択の「地域課題科目」の本来の意義や目的が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
3) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	3	自分にとっての「関連科目」の意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
4) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	4	他者との関わりを学び、実践できる	3	十分実践できる	実践できる	実践できる	実践できる	実践できる	実践できる	実践できる	点
5) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	5	「自分と社会の関わり」について、自分の考えを持ち、それを人に説明できる	3	十分説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	点
6) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	6	組織を活性化させる力が身に付いている	3	十分身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	点
7) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	7	「持続可能な社会」のために必要なものごとくを考へる力が身に付いている	3	十分考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	考へる力が身に付いている	点
8) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	8	考え方や価値観を異にする人々との対話に要するコミュニケーション能力が身に付いている	3	十分身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	点
9) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	9	合意形成のために重要な行動が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
10) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	10	参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
11) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	11	1) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
12) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	12	2) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
13) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	13	3) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
14) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	14	4) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
15) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	15	5) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
16) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	16	6) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
17) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	17	7) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	点
18) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	18	8) プロジェクトにおける自分の役割が説明できる	3	十分説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	説明できる	点
19) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	19	9) チーム活動における自分の特性を理解し、チームに貢献できる	3	十分貢献できる	貢献できる	貢献できる	貢献できる	貢献できる	貢献できる	貢献できる	点
20) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	20	10) 自分の専門性を活かし、新しい視点からの意見や提案をすることができる	3	十分意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	意見や提案をすることができる	点
21) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	21	11) PDAサイトを理解し、実行できる	3	十分理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	点
22) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	22	12) 報告・連絡・相談(ホウレンソウ)を理解し、実行できる	3	十分理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	理解し、実行できる	点
23) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	23	推薦理由									点
24) 取り組みに際しては、主体的・協力的な姿勢で取り組むことができる。またその活動に意義を見出すことができる。	24	推薦理由									点

別紙③ ルーブリック評価〈B表〉

中部大学地域創成メディアセンター資格申請 ルーブリック(B) 【発表指導責任者が申請後から発表会4日前までに記入し提出ください。】

被指導者氏名		学籍番号		所属		氏名		職				
認定活動名称		大項目		発表指導責任者		氏名		職				
実施番号	区分	小区分	実施項目	評価点	A(5点)	A(3点)	B(4点)	C(5点)	D(2点)	E(1点)	F(0点)	点差
1	内容・組織の理解	「動」	参加したプロジェクトの活動目的が理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
2			参加したプロジェクトの活動概要が理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
3			参加したプロジェクトの運営組織(フレームワーク)と関係者(対象者)について理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
4			参加したプロジェクトの成果について理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
5			参加したプロジェクトにおける今後の課題が理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
6	活動後の内容・成長		プロジェクトに参加したことによる自分の成長が説明できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
7			プロジェクトに参加した自分に対する課題が説明できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
8			チーム活動における自分の特性を理解し、今後の活動に活かすことができる	5	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の特性や今後の活動における自分の長所や短所、必要な改善点を明確に説明することができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
9			成果を生むために重要なチームや個人としての在り方や考え方について説明できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
10			「地域創成メディアセンター」資格の目的や意義について理解できる	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない
1	プレゼン準備		プレゼンに必要な資料収集ができる	3	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	十分な量かつ適切な資料を集められる	資料を集められない
2			プレゼン内容の方向性を考えることができる	3	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	自ら考えて工夫・改善が見られる	詳細な指導を重ねても、自らの工夫・改善が見られない
3			プレゼン内容を総合的に理解できる	3	十分に理解できる	十分に理解できる	十分に理解できる	十分に理解できる	十分に理解できる	十分に理解できる	十分に理解できる	理解できない
4			プレゼン内容を通して、大学での自らの成長や課題を客観的に整理できる	3	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	十分に成長がみられ、課題についても整理できる	指導を重ねても、整理できない
5			プレゼン内容を通して、将来自分が貢献したい「地域」における「活動」を語るることができる	3	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容を語るることができる	具体的な活動内容がない
合計点 (47点満点)												

別紙③ ルーブリック評価〈C表〉

〈C表〉

中部大学地域創成メディエーター資格申請 ルーブリック(C) 【発表会当日に評価員が記入】

被評価者氏名		学籍番号	
--------	--	------	--

評価委員	所属:	氏名:
------	-----	-----

区分	大項目	チェック	得点	小項目
プレゼン 当日	プレゼン内容が分かりやすい		A(3点)	内容が簡潔にまとめられていて理解しやすい
			B(2点)	内容は簡潔にまとめられているが、理解しづらい部分がある
			C(1点)	内容が簡潔にまとめられていないか、量が少なすぎるため、理解できない
			D(0点)	明らかに発表内容として不十分である
	プレゼン資料が見やすい		A(3点)	十分に工夫されていて分かりやすく、また効果的である
			B(2点)	工夫が少なく簡素ではあるが、理解できる
			C(1点)	資料不足あるいはまとめきれておらず、理解しづらい部分がある
			D(0点)	明らかに資料作成が不足していて、理解できない
	声の大きさが適切で、 身振りも使ってプレゼンができる		A(3点)	聞き取りやすい声で、身振りも使って発表ができる
			B(2点)	聞き取りやすい声ではあるが、身振りが少なく淡々と発表している
			C(1点)	声は大きい、早口で聞き取りづらい
			D(0点)	声が小さく、身振りも少なく、発表内容が分かりづらい
	プレゼンにふさわしい服装や姿勢、 視線、言葉遣いができる		A(3点)	いずれもふさわしいものである
			B(2点)	姿勢が悪く、下を向いているなど視線が定まっていない
			C(1点)	言葉遣いが悪く、言い直が多い
			D(0点)	いずれもプレゼンにふさわしいものではない
	プレゼン内容に対しての 質疑応答ができる		A(3点)	質問に対して適切に答えることができる
			B(2点)	質問に対して時間は必要だが、答えることができる
			C(1点)	質問に対して適切に答えられない
			D(0点)	質問に対して全く答えられない
	プレゼン内容を通して、 今後の自分のキャリア設計を 伝えることができる		A(3点)	具体的な内容を伝えることができる
			B(2点)	曖昧な部分もあるが、ある程度は伝えることができる
			C(1点)	キャリア設計と思われる内容はあがるが、伝えられない
			D(0点)	キャリア設計と思われる内容がない
				合計点 [18点満点]

別紙④ 地域創成メディエーター学生発表会



文部科学省

地(知)の拠点

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組 春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業



中部大学 第11回
「地域創成メディエーター」
学生発表会

PLUS エクスプレッション

2025 2/20 (木)

中部大学 不言実行館 1F アクティブホール ほか
14:00-16:00 (13:30受付開始)

<入場無料>

地域の皆さまも
ぜひご参加
ください



地域創成メディエーターを目指す

学生は講義での単位修得とともに、

地域での活動に参加し、特有の課題に

向きあい、解決策を考えて実践します。

活動から得られた学びと成長を自分の言葉で

伝えるプラス・エクスプレッション!

地域創成メディエーターに認定された学生には

学長から認定証が授与されます。



中部大学

主催／中部大学 後援／春日井市

中部大学 地域創成

検索





「地域創成メディエーター」資格は、資格そのものが大切なのではなく、
その道のりこそが学生自らにとって大事なことであり、「意義」と「価値」がある「行動」です。

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

第11回「地域創成メディエーター」学生発表会

PLUS エクスプレッション

地域創成メディエーター資格とは… 地域の人と人をつ結びつけるメディエーター (mediator:媒介者)となり、春日井市をはじめ地域のさまざまな問題に主体性をもって取り組み、中部大学の建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生に認定される資格です。

プログラム

- 14:00 開会挨拶：戸田 香（中部大学 地域連携教育センター長）
- 14:05 学生による口頭発表 不言実行館 1Fアクティブホール
- 15:00 学生によるポスター発表 不言実行館 2Fステージエリア
- 15:50 地域創成メディエーター認定証 授与式
- 15:55 閉会挨拶：川本善之（中部大学 地域連携教育センター副センター長）
- 16:00 閉会

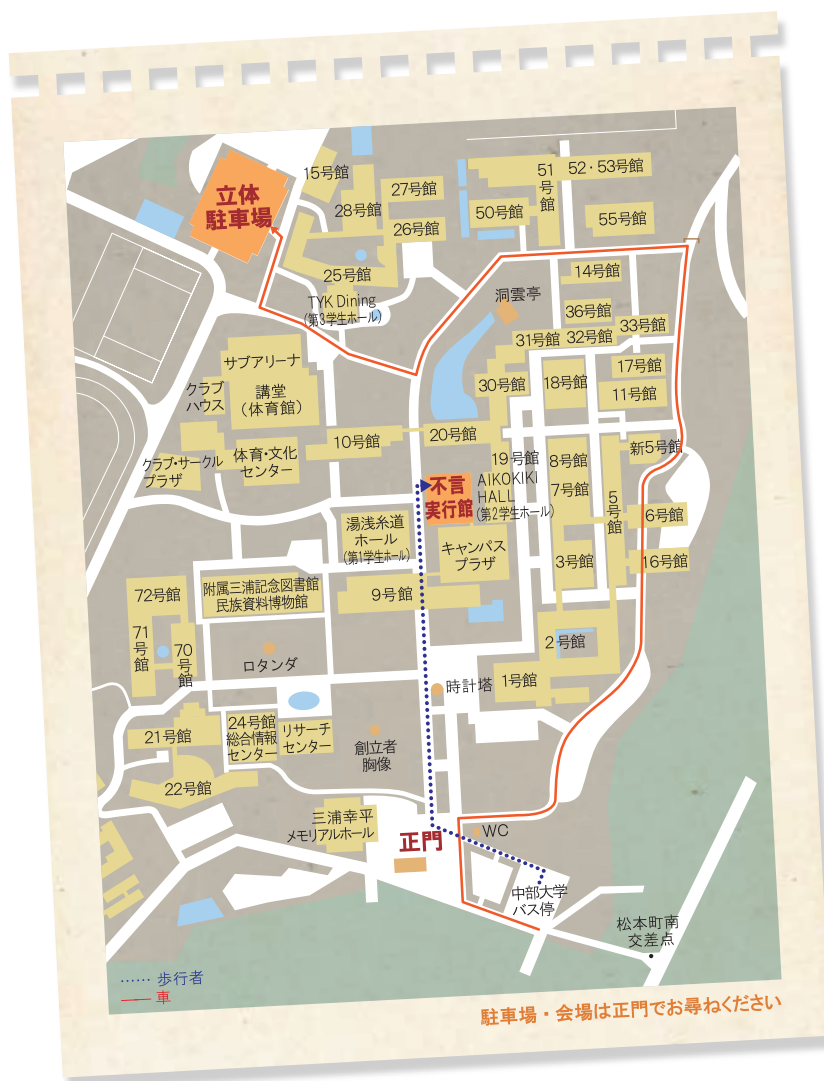
*プログラム内容は予告なく変更される場合がありますのでご了承ください

口頭発表

地域創成メディエーター資格に挑む学生が、これまでの知識修得と体験を振り返り、達成感や今後の課題、目標なども交え、自己成長について自らプレゼンテーションを行います。

ポスター発表

ポスターを用いて自己成長について視覚的に PR。参加者の皆さまには発表者と直接コミュニケーションをとっていただき、ご意見やアドバイスををお願いします。



中部大学へのアクセス

●JR神領駅から名鉄バス

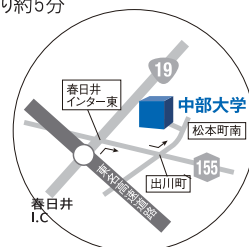
JR中央本線「神領」駅下車
北口「中部大学バスのりば」から
名鉄バスで約10分

●JR高蔵寺駅から名鉄バス

JR中央本線・愛知環状鉄道「高蔵寺」駅
下車、北口8番のりばより名鉄バス
「中部大学前」行に乗車 約10分

●お車ご利用の場合

東名高速道路
春日井ICより約5分



お申し込み締切
2/18 (火)



参加お申込みは
QRコードから→

お電話・メールでも受付しております
中部大学 地域連携教育センター
TEL. 0568-51-9872
E-mail: coc@office.chubu.ac.jp



中部大学

お問い合わせ 中部大学地域連携教育センター 愛知県春日井市松本町1200

中部大学地域連携・生涯学習

検索

Web <https://www.chubu.ac.jp/community-extension/>

E-mail coc@office.chubu.ac.jp

TEL 0568-51-9872

第11回地域創成メディエーター学生発表会 **PLUS** エクスプレッション

日時：2025年2月20日(木曜日) 14時00分～16時00分

会場：中部大学 不言実行館 1階 アクティブホール, 2階 スチューデント・コモンズ

主催：中部大学

後援：春日井市

14時00分～14時05分 (会場:1F アクティブホール)

開会挨拶 戸田 香 (中部大学 地域連携教育センター長)

14時05分～14時40分

地域創成メディエーター紹介 上野 薫 (中部大学 応用生物学部・准教授)

学生による自己プレゼンテーション

1 「地元での挑戦 小牧市東部地域におけるまちづくりへの貢献」

(人文学部 歴史地理学科 3年 渋谷 稀斗)

2 「空から考える次世代」

(理工学部 宇宙航空学科 2年 太田 祥成)

3 「ルールを作る人になる」

(経営情報学部 経営総合学科 3年 池田 武琉)

<休憩・移動>

14時50分～15時30分 (会場:2F スチューデント・コモンズ)

学生によるポスター発表 ※詳細は裏面をご覧ください。

14:50～15:10 Aグループ 16名

15:10～15:30 Bグループ 15名

<休憩・移動>

15時40分～15時50分 (会場:1F アクティブホール)

地域創成メディエーター認定証 授与式 竹内 芳美 (中部大学長)

15時50分～16時00分

閉会挨拶 川本 善之 (中部大学 地域連携教育センター 副センター長)

**** 中部大学 地域連携教育センター ****

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地

Tel: 0568-51-9872

〔第11回地域創成メディエーター学生発表会〕の様子 ～2025年2月20日(木)～



開会挨拶 戸田香
(中部大学教授 地域連携教育センター長)



学生によるプレゼンテーション 1



学生によるプレゼンテーション 2



質疑応答



ポスター発表



ポスター発表



資格認定証授与式 竹内芳美（中部大学長）



記念撮影

別紙⑤

第 11 回 中部大学 地域創成メディエーター学生発表会
PLUS エクスプレッション アンケート集計結果

開催日：2025年2月20日（木） 14:00～16:00

場所：中部大学 不言実行館 1F アクティブホール，2F スチューデント・commons

参加者数：一般13名 教職員50名

学生39名（口頭発表3名、ポスター発表28名、一般学生8名） 計102名

回収数：19名

1. 年齢
- | | | | |
|--------------|--------------|------------|------------|
| 1. 29歳以下（3名） | 2. 30代（0名） | 3. 40代（4名） | 4. 50代（4名） |
| 5. 60代（6名） | 6. 70歳以上（2名） | | |

2. 所属

- | | | | |
|-----------------|-----------------|-------------------------|-----------|
| 1. 一般市民（3名） | 2. 教育関係機関（0名） | 3. 地方自治体（2名） | 4. 企業（2名） |
| 5. NPO・市民団体（0名） | 6. 大学教員（3名） | 7. 大学職員（3名） | |
| 8. 学生（2名） | 9. C AAC受講生（2名） | 10. エクステンションカレッジ聴講生（0名） | |
| 11. その他（2名） | | | |

3. この「地域創成メディエーター学生発表会」を何でお知りになりましたか（複数回答）

- | | | |
|------------------|------------|--------------|
| 1. ホームページ（2名） | 2. チラシ（4名） | 3. 広報春日井（1名） |
| 4. 関係者からの案内（11名） | 5. その他（2名） | |

4. この「地域創成メディエーター学生発表会」全体のご感想をお聞かせください

- | | | |
|-----------------|-------------|-----------|
| 1. とてもよかった（11名） | 2. よかった（5名） | 3. 普通（1名） |
| 4. やや不満（0名） | 5. 不満（0名） | 無回答（2名） |

5. この「学生発表会」の会場や運営はいかがでしたか

- | | | | |
|----|-------------|-------------|-----------|
| 会場 | 1. 良い（14名） | 2. やや良い（3名） | 3. 普通（0名） |
| | 4. やや悪い（0名） | 5. 悪い（0名） | 無回答（2名） |
| 運営 | 1. 良い（15名） | 2. やや良い（2名） | 3. 普通（0名） |
| | 4. やや悪い（0名） | 5. 悪い（0名） | 無回答（2名） |

6. 学生の自己プレゼンテーションを踏まえ本学教育実践に対するご意見ご感想がございましたらお聞かせください

- ・実践的な学びが得られる多様なメニュー（活動）が素晴らしいと思いました。
- ・みなさんととてもがんばっていて良かったです。
- ・大変有意義な学びの場だと感じました。今後も一人でも多くの方が資格取得に向けて活動されることを期待しております。
- ・発表から地域創成として地域との係わりが分かりづらい。自己成長に役立つとは感じるが「資格」が取得できる活動成果が分かりづらい。これで良いのか、結果だけを聞く側としては物足りない。
- ・繰り返しのリハーサルを経てようやくまとまってきたので、この企画自体有益なものと思いました。
- ・学生が主体的に活躍できる場を設けられていたのでよかった。

- ・地域に足のついた実践は、各学部学科の理論を学ぶことと相まって、学生さん達により影響を与え、人間性の幅を広げることに役立っていると思います。更に継続、発展されることを期待します。
- ・学生の中に地域に出て色んな方と関わることは、学生の成長につながり、これからの社会に出た際に大切だと思いました。
- ・現在 48 歳になりますが、私も伝え方、コミュニケーション、毎日反省しております。ただ自分の為にではなく、人(相手)の為に行動できる人間でありたいと常に思っています。
- ・学生時代に地域に飛びこみ、動き、経験することはとても素晴らしいことだと思います。
- ・初めて参加しました。活動内容の発表ではなく活動を通して自己がどう成長したかを自省し、それを発表する場と理解しました。学生達も堂々と発表しており、しっかり練習しているなと感じました。

7. その他ご意見ご要望などございましたらお聞かせください

- ・もう少し具体的な活動内容がわかると良かった。
- ・いつも小牧市東部のまちづくりにご協力いただきありがとうございます。これからも引き続き学生の皆様のお力をお貸しいただければ幸いです。
- ・いつも小牧市との地域連携事業、まちづくりにご協力いただきありがとうございます。大学生の若い力はまちづくりにとても大切なものです。今後どうぞよろしくお願いいたします。
- ・貴重なお時間を頂きありがとうございます。自分(己)を改めるいい機会となりました。

2025 年 2 月 20 日実施

(2) ワーキンググループ報告

- ① 正課教育WG
- ② 生活・住環境を考えるまちづくりWG
- ③ 世代間交流プログラムWG
- ④ 全体

① 正課教育WG

1. 活動組織

委員長	上野薫
副委員長	伊藤守弘
委員	竹内環、山羽基、伊藤佳世、羽後静子 (戸田香)

2. 活動計画

4月-7月	「地域共生実践」春学期2クラス授業（対面授業）
4月-9月	地域創成メディエーター育成のルーブリック評価の見直し
4月-3月	地域創成メディエーターへの導き（広報活動）
4月-3月	次年度以降の開講数・講義手法の検討と情報収集
4月-8月	「地域共生実践」テキスト修正案の作成・評価基準の検討
8月-9月	春学期「地域共生実践」ふりかえり、評価基準の再検討、協力者勧誘
8月-9月	地域創成メディエーター申請様式検討
9月-1月	「地域共生実践」秋学期3クラス授業（対面授業）
10月	地域創成メディエーター申請開始
11月	地域創成メディエーター審査（プレゼンテーション候補者の選出）
11月-12月	地域創成メディエーター説明会開催
12月-2月	地域創成メディエーター学生発表会
2月-3月	秋学期「地域共生実践」ふりかえり、評価基準の再検討、協力者勧誘
2月-3月	「地域創成メディエーター」認定

3. 活動成果

・総括

1) 「地域共生実践」の運営

2024年度は春学期2クラス、秋学期3クラスにて全て対面で実施した。履修者の傾向としては、受講生の中にシラバスを見ずに履修登録をしたことで、第1、2講では取消や追加に伴う学生の入替が激しかったが、この入替によって受講に対する意識が良い方向に働き、途中から受講をやめてしまう学生が減って、グループワークが良い雰囲気でも継続できた。また、コロナ禍の代償として人間力を養う機会が減り、当初は協働力が明らかに低下していたが、グループワークを繰り返すことでグループ内での協力や、考えて工夫する姿勢が見られるようになり、受講初期に比べて成長が感じられた。履修当初のメディエーター資格への目的意識は例年より少し低いように見られるが、この講義を通して、様々な活動への積極的な参加を期待したい。

- 5月-7月 「地域共生実践」春学期2クラスの授業運営を実施した。
(履修者 65+57=122名、教員6名)
- 4月-3月 地域創成メディエーター育成のルーブリック評価の見直し：特に変更の必要性は認められなかったため、昨年通りで実施した。
- 4月-3月 地域創成メディエーターへの導き（広報活動）：オリエンテーションでのパンフレット配布・説明などを行った。
- 4月-3月 PBLゼミを9月17日（火）、18日（水）に実施した（参加者33名）。
- 4月-8月 「地域共生実践」テキスト修正案の作成・評価基準の検討：大きな修正の必要がなかったため、そのままとした。
- 8月-9月 春学期終了後、担当者間で春学期「地域共生実践」のふりかえり、評価基準の再検討を行うとともに、秋学期の協力者の勧誘を行った。
- 8月-9月 地域創成メディエーター申請様式検討：とくに大きな変更の必要はなかったため、前年度と同様の様式での実施となった。
- 9月-1月 「地域共生実践」秋学期3クラスの授業運営を実施した。
(履修者 80+80+80=240名、教員9名)

- 1 月-3 月 秋学期終了後、秋学期「地域共生実践」のふりかえり、評価基準の再検討を行うとともに、次年度の協力者を勧誘した。
- 10 月 地域創成メディエーター申請を予定通り開始した。
- 11 月 地域創成メディエーター審査（プレゼンテーション候補者の選出）を予定通り実施した。
- 11 月-2 月「地域共生実践」テキスト修正の作成：出版元よりテキスト販売価格の改訂連絡があり、テキストの修正と販売価格の見直しを行った。
- 12 月 「地域共生実践」受講生への「地域創成メディエーター」説明会を開催（2 回実施）した。「動く」指導担当教職員へのポスター作製における指導を昨年と同様に具体的に実施し、配布資料にも明記した。
- 1 月-2 月 口頭発表練習を実施し、プレゼンテーションの本質的な目的や具体的な方法について指導するとともに、学生同士での学びの機会を与えた。
（2025 年 1 月 29 日（水）に 1 回目を、2 月 18 日（火）に 2 回目を実施）
- 2 月 地域創成メディエーター学生発表会「+エクспRESSION」の実施。
（2025 年 2 月 20 日（木）および 3 月 11 日（火）の 2 回で実施）
- 2 月-3 月 「地域創成メディエーター」認定（36 名）。自主性の高い認定者の輩出が見込まれている。

4. 今年度の課題・次年度の目標

2024 年度における地域創成メディエーター資格へのエントリー数は、一昨年度より減少傾向が継続中である。新入生オリエンテーション時に全学生に配布していた紙媒体の「ちらし」の配布中止や、本科目に類似した「課題解決型」の講義や「議論重視型」の SDGs 関連科目が 2022 年頃から増えてきたことが要因の一つと考えられる。大学全体としての学生への教育機会は減少していないことから、本資格へのエントリー数が減少していることには大きな問題はないと思われる。一方で、コロナ禍 5 年目となり「with コロナ」の社会状況にある中、現実社会への潜在的な基礎適応力を身に付ける高校から大学での時期をコロナによる直接的会話や実際の体験を伴う学びが抑制されてきた世代には、他人との会話や議論が苦手であり、挨拶や連絡という社会で当たり前についていると思われるがちなコミュニケーション基礎力が一定レベルを下回っているような学生も少なくない。さらに、就職活動での選考ではグループワークが当たり前に行われるようになっている。メディエーター資格の取得を目的としない学生にとっては、本講義は社会で必要とされている資質を身に付ける重要な機会であるので、これまでの内容を見直し、改善の必要性があれば議論をすすめたい。

<「地域共生実践」授業風景>



<地域創成メディエーター学生発表会「プラス・エクспRESSION」2025 年 2 月 20 日>



② 生活・住環境を考えるまちづくりWG

1. 活動組織

委員長 磯部友彦

副委員長 松山明

委員 岡本肇 横江彩 余川弘至 上野薫 柴原尚希 尾花まき子 山中由実
山下紗也加 河村陽介

2. 活動計画

5月-3月 「岐阜県東濃地区の食文化の伝承」の活動実施

5月-12月 「新・森の健康診断」の活動準備と実施

6月-9月 「健康救急フェスティバル」の活動準備と実施

9月-12月 「アスコンについて～考動、未来につなぐ・残す～」の活動実施

6月-12月 タウンウォッチング(高蔵寺 NT タウンウォッチングなど)の実施

7月、8月ほか「水害に対する地域住民の防災意識向上プロジェクト」の学科学生との
活動と春日井まつりでの実施

5月-8月「春日井市における産地直売所を介した地域活性化への取組み」の活動実施

10月 「春日井まつり きみは未来の建築士」にボランティア参加

10月-12月 地域交通に関する調査の実施

通年 「学生主体の標準化教育」の活動実施

通年 「こまきこども未来館プロジェクトマッピング制作」の活動実施

通年 「星空ネットワーク」の活動実施

通年 演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。

通年 卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。

通年 地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。

通年 過年度の地域志向研究経費による活動のフォローアップをする。

通年 地域創成メディエーターの育成を計画的に実施する。

3. 活動成果

1) 正課としての活動

a. 都市建設工学科「部門創成 B(3年生科目)」において現地視察等を実施。

10月22日、11月12日 名古屋都心のまち歩きを
2回にわたって実施した。まち歩きでは、名古屋
の城下町としての歴史的な成り立ちからリニア
新幹線開通に向けた最新のプロジェクトまで、
現地で実際に見て、歩いて、体験した。(服部敦・
岡本肇担当) 【参加学生 18名】



名古屋市三の丸地区の都市計画現場を視察する

10月22日 名古屋高速道路公社(名古屋市北区)において、名古屋高速道路の建設工程、東山トンネルの構造の超精密模型に関する展示物の視察、交通管制室における実際の管理業務の見学、公社担当者による名古屋高速道路公社の業務内容の説明をうけ、さらに、公社担当者との質疑応答を実施した。(磯部友彦・柴原尚希担当)【参加学生15名】



名古屋高速道路公社において
職員から道路建設の説明を受ける

11月12日 春日井市役所において、まちづくり担当職員から、まちづくり政策と交通政策の話を聞くこと、市役所からJR春日井駅までのタウンウォッチング、JR春日井駅及びその周辺地区の見学を実施した。(磯部友彦・柴原尚希担当)【参加学生15名】

b. 建築学科「ゼミナールA(3年生科目)」、「地域住宅計画(3年生科目)」、「建築・都市計画演習(3年生科目)」において現地視察等を実施(松山明担当)

ゼミナールA 参加学生8名 計画的に開発された良好な戸建て住宅地現地見学

5月3日 春日井市十三塚町プログレスビレジ春日井中央

5月17日 小牧市光ヶ丘5丁目C'sタウン光ヶ丘、
城山5丁目グリーンテラス城山

5月24日 小牧市光ヶ丘5丁目グリーンテラス光ヶ丘



6月16日 可児市桜ヶ丘ハイツ、
みよし市みよしミライト、あざぶの丘



地域住宅計画 参加学生25名 防災まちづくり事業完了地区現地見学

5月22日 春日井市松新1丁目等JR勝川駅周辺地区



建築・都市計画演習 参加学生 27 名 課題の対象地の現地調査

11 月 19 日 名古屋市中区錦 2 丁目



錦二丁目（伏見繊維問屋街周辺地区）をチームに別れて現地踏査



まちづくり NP0 から錦二丁目のまちづくり活動のレクチャーを受ける

c. 都市建設工学科「特別講義（1 年生科目）」において現地視察を実施した。

11 月 29 日 愛知県豊田市において、矢作川総合第二期農地防災事業北部併設水路（下流）一期建設工事を見学（柴原尚希・岡本肇 担当）【参加学生 56 名】



矢作川総合第二期農地防災事業北部併設水路工事の見学

d. 都市建設工学科「卒業研究（4 年生科目）」において視察等を実施した。

7 月 3 日 名古屋都市センターにおいて、施設の案内を受け、まちづくりライブラリーを見学し、資料収集の体験をした。（磯部友彦担当）【参加学生 8 名】



名古屋都市センターの視察

e. 産業界ニーズ リスク予防管理士 企業現場教育活動

8 月 1 日 名古屋高速道路の名古屋市北区から愛知県西春日井郡豊山町の区間において、高速道路の維持管理現場を視察し、環境保全対策（騒音、振動、資源）、安全管理（工程、品質）に関するリスク等をどのように管理しているか、安全に配慮しているかを学習した。（余川弘至担当）【参加学生 10 名】

8 月 3 日 愛知県知多郡阿久比町において、高速道路の付帯施設であるパーキングエリアの盛土造成等の一般的な施工現場を見学し、その工事内でどのようにリスクを管理しているか、安全に配慮しているかを学習した。（余川弘至担当）【参加学生 8 名】



名古屋高速道路小牧線の橋梁補修
工事現場視察



知多半島道路のパーキングエリア
施工現場の視察

f. アスコンについて「考動、未来につなぐ・残す」

9月24日(火) 事前勉強会を実施した。現場実習に先立って、アスファルトについて学ぶ機会を設けた。(余川弘至担当)【参加学生7名】

11月9日(土)および12月7日(土) 現場実習を実施した。名古屋中央アスコン(愛知県名古屋市)を訪問し、現地実習・研修を実施した。アスファルト合材の製造過程やリサイクル状況を見学するとともに、アスファルト合材の供試体作成やマーシャル安定度試験を実施した。(余川弘至担当)【参加学生6名】

12月18日(水) 成果発表会を実施した。事前勉強会、現場実習を受けて、レンガおよびウッドチップのリサイクル材を混合したアスファルトの再利用の可能性について最終発表会を実施した。(余川弘至担当)【参加学生7名】



集合写真



現地実習(試験体製作および試験)

2) 各学科の卒業研究

a. 都市建設工学科での卒業研究において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生48名】

	研究室	課題
1	伊藤	載荷試験と数値解析による実橋梁の安全性評価
2	磯部	各務原市におけるPark-PFIの事業効果について -犬山市都市公園への適用を考慮して-
3	磯部	JR穂積駅周辺まちづくりの再整備の提案
4	磯部	インフラツーリズムにおけるインフラの役割 -中山道宿場町を事例に-
5	磯部	自転車活用推進計画に基づく施策展開状況の調査 -春日井市を事例に-
6	磯部	第4種踏切の解消に向けての取り組み
7	磯部	レクリエーション目的での河川敷の利活用方策-都市計画における機能のあり方を考慮して-
8	磯部	コンパクトシティ政策に関する考察 -公共交通政策との連携を考慮して-
9	岡本	神宮駅前商業施設の開発が神宮参拝者と近隣商業施設に与える影響に関する研究
10	岡本	現代アーティストの歌詞にみる都市のイメージに関する研究~2011年から2020年のヒット曲を対象として~
11	岡本	現代アーティストの歌詞にみる都市のイメージに関する研究~2001年から2010年の年間ヒット曲を対象として~
12	岡本	河川沿いに位置する公園整備のあり方に関する研究~庄内緑地を事例として~
13	岡本	河川沿いの市街化問題と対策方法に関する研究~一宮市北方町と木曽川町を事例として~
14	岡本	土地区画整理事業完了後の農地存続・消失条件に関する研究~旧法・新法区域の田畑を比較して~

15	岡本	豊田市における里山計画のあり方に関する研究～長久手市と美濃加茂市の事例を比較対象として～
16	岡本	サードプレイスとしての駅前広場の環境空間の可能性に関する研究
17	柴原	観光地域づくり法人を対象とした持続可能な観光に関する取り組みの地域間比較
18	柴原	名鉄バス中部大学線へのLRT導入効果とルートの検討
19	柴原	名鉄バス中部大学線への連節バス導入効果の分析
20	柴原	植栽されたアオギリの木質チップ燃料化によるカーボンニュートラル実現可能性の検討
21	柴原	建築物の評価における緑化事業の貢献
22	杉井	アーバン・グリーンダムにおける植栽効果に関する研究
23	杉井	アーバン・グリーンダムにおける透水特性に関する研究
24	尾花	豊川流域での河川治水対策に関する研究
25	尾花	気候や社会構造の変化が河川環境へ与える影響に関する研究
26	尾花	三重県一級河川流域での降雨特性と災害発生形態に関する研究
27	尾花	UC-win/Roadを用いた河川水辺空間のデザインに関する研究
28	尾花	流水型ダム堆砂に関する一考察
29	尾花	伝統的治水システムとしての霞堤の効果に関する研究
30	武田	スーパー伊勢湾台風における広域避難に関する検討
31	武田	水害時の警戒レベル（キキクル）の評価と都市氾濫解析の精度向上に関する研究
32	武田	樹木の配置を考慮した河川内水理に関する検討
33	武田	ダム湖内とその周辺河川の水理と水質に関する研究
34	武田	水害を対象としたBCPの普及に関する研究
35	武田	数値下水道モデルの構築に関する基礎的研究
36	武田	流域治水を考慮した庄内川の洪水流出・浸水解析
37	武田	地下街に関わる避難シミュレーションの構築に関する基礎的研究
38	服部	コンビニジムの立地状況と実態
39	服部	東海地方における廃校リノベーションの事例研究
40	服部	東山動物園の再生と周辺のまちづくり
41	服部	ニュータウンにおける住民のための交通システム
42	服部	高蔵寺ニュータウンの初期計画の実現状況
43	服部	ポップスの歌詞に見る都市のイメージ
44	服部	Bリーグのホームアリーナと地域貢献活動
45	服部	多治見市におけるタイルを用いた景観形成
46	余川	もやいドレーンを用いた液状化対策
47	余川	混和材として廃タイルを用いた地盤改良土についての研究
48	余川	GISを用いた能登半島地震の被害の整理と防災活用

b. 建築学科での卒業研究、卒業設計において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生 57 名】

	研究室	論文タイトル
1	金研	住宅主体の地域イベントが関係人口に与える影響に関する研究 -押沢台ブラブラまつりを事例に-
2	金研	大学校舎の混雑状況と特徴について
3	金研	学内禁煙における効果について -中部大学全面禁煙化に注目して-
4	金研	地域の中の音情報に関する研究
5	金研	小学校の公園利用実態に関する研究 -尾張旭市立渋川小学校地区において-
6	金研	中部大学におけるバリアフリーの現状と改善
7	金研	中部大学におけるバリアフリーの現状と改善
8	金研	学内禁煙における効果について -中部大学全面禁煙化に注目して-
9	金研	中部大学におけるバリアフリーの現状と改善
10	金研	大学校舎の混雑状況と特徴について
11	古川研	伝統的構法木造建築物の耐震性能評価に関する研究 -岡家住宅の耐震性能評価と限界耐力計算による耐震診断-
12	古川研	伝統的構法木造建築物の耐震性能評価に関する研究 -構造解析による本證寺庫裏の耐震性能に関する検討-
13	古川研	伝統的構法木造建築物の耐震性能評価に関する研究 -構造解析による本證寺庫裏の耐震性能に関する検討-
14	古川研	伝統的構法木造建築物の耐震性能評価に関する研究 -岡家住宅の耐震性能評価と限界耐力計算による耐震診断-
15	松山研	スーパー銭湯における地域コミュニティ形成についての研究 -名古屋市「みどり楽の湯」を事例に-
16	松山研	3大都市における震災事前復興の計画に関する研究
17	松山研	3大都市における震災事前復興の計画に関する研究
18	松山研	スーパー銭湯における地域コミュニティ形成についての研究 -名古屋市「みどり楽の湯」を事例に-
19	松山研	都市のオープンスペースにおける屋外イベントと滞留行動に関する研究 -名古屋都心部の公開空地等を対象にして-
20	松山研	スーパー銭湯における地域コミュニティ形成についての研究 -名古屋市「みどり楽の湯」を事例に-
21	松山研	団地居住者の世代間交流に関する研究 -豊明団地、鳴子団地に対象として-
22	松山研	団地居住者の世代間交流に関する研究 -豊明団地、鳴子団地に対象として-
23	松山研	団地居住者の世代間交流に関する研究 -豊明団地、鳴子団地に対象として-
24	松山研	3大都市における震災事前復興の計画に関する研究
25	松山研	都市のオープンスペースにおける屋外イベントと滞留行動に関する研究 -名古屋都心部の公開空地等を対象にして-

2 活動報告

	研究室	論文タイトル	設計タイトル
1	松山研	都市のオープンスペースにおける屋外イベントと滞留行動に関する研究-「SLOW ART MARKET」を対象にして-	ふるまいに融ける -立体閑所によるあふれ出し風景の再編-
2	金研	視覚障害者のニーズから検討したバリアフリーのあり方-長野県内の多目的トイレを事例に-	睦円 ～上田点字図書館の改修～
3	金研	人の待ち合わせ行動と場所に関する調査-中部大学の学生を事例として-	船が作る時間 -廃船を利用したマリニング計画-
4	中村研		石狩川と神楽の森をむすぶ旭川アイス博物館
5	中村研		知の回遊 国立国会図書館 名古屋館
6	中村研		まちと高速道路をつなぐ 岡崎ハイウェイオアシス
7	中村研		道の駅 郡上八幡 ～地域と一体化した複合公共施設～
8	中村研	シトー会派修道院の回廊についての研究	瀬戸市陶磁器文化複合施設
9	中村研		里湖へ -沖島の暮らしと琵琶湖をつなぐ漁港村の提案-
10	中村研		「通過する」場から「過ごす」場へ -四日市の駅まちの再構築-
11	中村研		「市」役所から「市民」の役所へ -居場所としての可児市役所新庁舎-
12	中村研	鋸屋根工場の一宮市の住民による認知に関する研究	鋸屋根が織りなす風景の再生 -産業遺構の活用による一宮市の活性化-
13	中村研		始原の建築へ -シームレスなアクティビティを可能にする新たなまちの姿-
14	中村研		ひとと自然をつなぐ森の幾何学 -荒神山の青少年文化複合施設-
15	中村研		多文化共生を実現する小学校
16	早川研		The Wind Changes
17	早川研		空港エリアにおける騒音対策図書館の提案 -入れ子構造による静と動の共存-
18	早川研		Chain Hub 豊橋公園・アリーナ整備計画
19	早川研	GISを活用した盛岡市の景観解析研究	緑と歴史を重んじる盛岡市の活性化
20	早川研		ながかわキャナルゲート -水辺から始まる地域のにぎわい-
21	早川研		暮らしとつながる小学校
22	山岸研		保護動物施設再考計画 -イヌ・ネコにおけるアニマルウェルフェアによる空間デザイン-
23	山岸研		定光寺を歩く 定光寺駅の再興計画
24	山岸研		水上の軌跡 -20年後の水上ビルと豊橋を考える-
25	山岸研		新たな共同体のかたち -ニュータウンの活性化のためのコレクティブハウス-
26	山岸研	古民家再生による地域再生の研究-NIPPONIA-の手法分析より-	つながる
27	山岸研		風と水の交差点 -新たな文化交流の拠点-
28	山岸研	愛知県内のショッピングモールの通路形態と休憩スペースに関する類型研究	ただ立ち寄るだけでいい ～買い物に依存しない、誰もが気軽に滞在できる公共空間～
29	山岸研	マギーズセンターの庭分析と庭による室内空間への影響	マギーズホスピス -支え合うコミュニティを育む場所-
30	山岸研		自然と建築の境目 -河川環境楽園の恵みを届ける-
31	山岸研	道・街路がもたらすコミュニティの発生条件-商店街がもたらすコミュニティ発生の条件となる中間領域の研究-	溜まり、憩い、巡る。 -下之一色町での地域コミュニティの再生-
32	山岸研		廃校プロジェクト ～旧大井小学校を活用した地域復興計画～

4. 今年度の課題・次年度の目標

- 1) 卒業研究、卒業設計のテーマ選定において、多様な地域の課題を考慮する。
- 2) 受講科目の指導を含めて地域創成メディエーターの育成を計画的に実施する。
- 3) 地域課題への取り組みを、教員だけでなく学生・院生を交えて活発化させる。
- 4) 地域との連携をさらに高め、「動く」の活動を充実化させる。
- 5) 春日井地域での活動経験をもとに、他地域での活動にも積極的に取り組む。

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 新・森の健康診断

氏名： 上野 薫

所属・職名： 応用生物学部環境生物科学科・准教授

2024 年 12 月 7 日・8 日の 1 泊 2 日で第 10 回新・森の健康診断を研修センターにて実施した。今年のテーマは「恵那の森を現代（いま）と未来に活かすには～新しい木質資源を活用した地域の在り方～」とし、グループワークにて提案を作成・発表してもらった。森林に関わる課題解決型のプログラムを経験することで、人工林の抱える問題を理解するだけでなく、地域の課題解決のために必要な自らの資質や行動への気づきを期待している。これまでの「土岐川・庄内川源流 森の健康診断」から「新・森の健康診断」に続く昨年までの 19 年間のプログラムに参加した卒業生の中には、実際に林業界で活躍している者が数名おり、彼らは卒業後の数年間で指導者側に立てるまでに成長してきた。一方で、間伐作業の意義や課題を理解するための教育効果が極めて高い「間伐体験」は、指導者不足のためにこの 4 年間は実施を断念してきた。本年度は機が熟し、卒業生による実技指導のもと、念願の間伐体験の実施となった。しかも、初めての研修センター内での間伐作業となった。参加学生は、環境生物科学科 4 年生 4 名、3 年生 4 名、2 年生 5 名、1 年生 1 名、修士 1 年生 1 名の計 15 名であった。スタッフは卒業生 9 名（うち林業界 4 名）、教員 2 名（上野薫、小島晶子）、土岐川庄内川源流の森 委員会事務局 村上誠治 氏（療養中にて遠隔サポート）の 12 名であった。本年度は座学の時間を極限まで短くし、間伐体験とグループワークに時間を充てた。また、体験は初日の午前中で実施し、体験後の新鮮な感覚が消えない状態で午後からのグループワークに臨んでもらった。2 日目午後の発表会には、これまでに協力いただいている地域市民の 2 名（川添祐子、村上千枝子の両氏）にも来場いただき、コメントを頂いた。

完全自主参加の 2 年生が多かったためか、中途半端な行動をする学生は一人もいなかった。1 日目の間伐体験は 2 班に分け、間伐強度による違いが感じられるようにした。小雨が降り気温も低い厳しい条件であったが、卒業生指導者による丁寧なデモンストレーションと説明、その後のチェーンソー作業や伐倒、玉切り、材の持ち運びなど、学生は男女を問わず積極的かつ協力的に作業に参加していた。卒業生には、学生がグループワークに移った後の材の処理や運搬にも協力してもらった。午後からのグループワークは 4 班構成で、4 年生と院生がリーダーになり班員 4 名をよく纏めていた。本プログラムの主旨や現状を理解している卒業生（TA）がグループワークに適宜指導に入ることによって、より議論が深まったようであった。いずれの班も、最終提案は実施できそうな夢のある内容で、かつ分かり易いプレゼンテーションであった。会場からの質疑応答も活発に行われ、それぞれの提案の問題点の議論もなされた。学生たちは、やれること・やりたいことを考える愉しみを大いに感じ、自主

性・協調性・批判的思考力が高まったようであった。参加者には、事後レポートを1月中に提出してもらう。本年度の地域創成メディエーターには、この中から3名がチャレンジする。本年度は、本プログラムに参加した若者たちが、確実に卒業後もメディエーターとして育っていることを実感する象徴的な回であった。次の10年に向け、内容を進化させたい。

<スケジュール> 【1日目】

1000 開会式
1005～1030 座学1 スケジュール確認、森林導入
1040～1200 フィールドワーク（間伐体験）
1250～1310 座学2 グループワークの課題と方法
1310～1700, 1900～2100 グループワーク、2300 就寝

【2日目】

0800～1200 グループワーク
1300～1400 グループワーク（最終調整）
1400～1500 発表会・意見交換会
1500～1600 まとめ 閉会式 集合写真撮影
1630 まで 全活動終了、現地解散



図 活動の様子（間伐体験からグループワーク、発表会まで）

謝辞：本プログラムの実施にあたり、ご理解とご協力をいただきました本学関係者、市民、行政の皆様には厚く御礼申し上げます。最後に、本報告書作成中の12月末に、これまで20年間にわたり「森の健康診断」を共に運営してきてくださった村上誠治氏が永眠されました。これまでの数々のご提案や事務局運営、学生たちへの温かいご指導と森林保全への熱い想いと揺るぎない実践に対し、改めて敬意を表し感謝するとともに、この場をお借りして謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： きみは未来の建築士

氏名： 松山 明

所属・職名： 工学部建築学科・准教授

春日井まつり（2024 年 10 月 19 日（土）、20 日（日））中央公園会場において建築士会春日井支部主催のイベント「きみは未来の建築士」に参加し、主に小学生児童に対してクッキー等のお菓子を材料として住宅模型を組み立て、溶かしたチョコペンで壁や屋根を固定するとともに窓や玄関扉などを描くことのお手伝いをする中で、学生自身も建築・デザインのあり方を再考察した。（参加学生 5 名）

<2022 年度の活動の様子>



<2023 年度の活動の様子>



生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 高蔵寺ニュータウンの定点観測

氏名： 磯部友彦

所属・職名： 工学部都市建設工学科・教授

1. プロジェクトの概要

今後大きく変化していくニュータウンの状況を経年的に記録し、まちづくりの基礎資料としてまとめることを目的とする。具体的には、風景の変化、交通量の変化、賑わいの変化などについて記録する活動を、藤山台地区の旧小学校周辺、中央台の商業施設周辺、高蔵寺駅周辺を対象に実施する。学生にとっては、ニュータウン内に設置されている施設などの多様性を観察し、さらにそれらの変化を感じ取ることを学ぶ。

2. 今年度の実施状況

今年度は都市建設工学科 3 年生の 1 名と 2 年生 2 名が参加した。活動日は 2024 年 11 月 17 日と 11 月 30 日と 12 月 7 日の 3 日間である。

活動内容を、以下の通り紹介する。

【11 月 17 日】 高蔵寺駅南口駅前広場と北口バス乗り場の視察に加えて、駅周辺の施設(自転車駐車場、総合病院など)を視察した。

【11 月 30 日】 ニュータウンの中央台から高森台にかけて視察した。サンマルシェ、東部市民センター、高森台に開店したホームセンターなどを視察し、さらに、高森台テラスの戸建て住居の新築状況をみた。

【12 月 7 日】 ニュータウンの中央台から藤山台までの通路状況の視察、グルッポふじとうの見学、西藤山台小学校跡地にできたノキシタプレイスを視察した。

3. 成果

活動内容を撮影した写真は、Google Classroom を活用して、昨年までの写真とともに参加メンバーに閲覧可能としている。これにより、過去の状況との比較ができる。

今年度は、ニュータウン再整備により、高森テラスの戸建て住居の新築状況を確認できたことと、西藤山台小学校跡地を視察できたことが成果として特筆できる。



高蔵寺駅南口自転車駐車場



高森台地区の
リニューアル現場



ノキシタプレイス

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 春日井市の産地直売所「ぐうぴいひろば」を介した地域活性化への取組み

氏名： 山中由実、小川宣子 所属・職名： 応用生物学部食品栄養科学科
助教、客員教授

【参加学生 2 名】

品種が異なる 5 種類のじゃがいも（男爵、キタアカリ、アンデス赤、メイクイン、インカのめざめ）の調理特性を糖度、水分量、澱粉量、調理（煮る）による硬さの変化、調理（揚げる）による吸油率から分析し、その結果と最適な料理の提案をちらしにまとめ、産地直売所（ぐうぴいひろば）でお客様にちらしを用いて説明した。説明後は、アンケートを実施し、お客様に活動内容についての意見を伺った。

お客様は一般的な品種である男爵やメイクイン以外の品種を食べてみたいとアンケートで回答し、日常的に使用しているじゃがいも以外にも興味をもっていただき、じゃがいもの品種についての認知が高まった。学生は、お客様に直接じゃがいもの調理特性とそれに適した料理を提案したことで、自分の意見を伝える能力を養うことができた。また、繰り返し説明をしたことでじゃがいもの調理特性の知識も深まった。

6 月 4 日：じゃがいもの生産者の畑へ行き、学生が直接生産者へ生産時の苦労やこだわり、生産課題について伺った。

6 月 18 日：JA 尾張中央の職員から学生に対し、現状（取り組み）と課題ならびに思いの説明と産地直売所（ぐうぴいひろば）の紹介をしていただいた。

6 月-7 月：品種の異なるじゃがいもをぐうぴいひろばで入手し、実験により各種じゃがいもの調理特性を明らかにし、品種に適した料理を検討した。

7 月：品種の異なるじゃがいもの調理特性と特性に適した料理を提案するための資料とアンケートを作成した。

7 月 13・14 日：ぐうぴいひろばでちらしを用いてじゃがいもの調理特性と料理について、直接、お客様に紹介し、アンケートを実施した。



生産者への聞き取り調査の様子



ぐうぴいひろばの見学の様子



じゃがいもの調理特性について
説明している様子

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 春日井まつり 水害に対する地域住民の防災意識向上プロジェクト

氏名： 武田誠／尾花まき子 所属・職名： 工学部都市建設工学科・教授／准教授

近年、地球温暖化に伴う気候変動による大規模な豪雨・洪水災害の発生が懸念されることから、流域治水の重要性が指摘され、その活動が進められている。流域治水は流域で浸水を許容して、特に下流域における大規模な浸水を防ぐことや、浸水災害に対して多くの組織が協力して対策を講じ、復興・復旧に対して取り組むことを目指している。

春日井市は一級河川の庄内川の右岸流域に位置し、仮に破堤が生じれば甚大な水害となる危険性を有する。また、2011年9月には春日井市で豪雨による内水氾濫が生じ、地藏川流域や高蔵寺駅などでは浸水被害が発生している。河川堤防などの治水対策は特定の豪雨や洪水を基準としている。しかし、その基準以上の雨や洪水が生じれば、浸水被害が生じることから、人的被害を無くするための避難対策は重要である。避難情報が発令されたときに、多くの住民が避難しない状況があり、住民の危機意識の涵養や地域防災力の向上の必要性が指摘されている。

本プロジェクトでは、春日井祭りに参加し、都市浸水模型を活用して、参加住民に対して水害の危険性や浸水発生メカニズム、対策などを紹介し、危険な場合には避難することが重要であることを説明した。この取り組みに学生が参加し、住民に対して水害に関わる事象を説明し、質疑応答に対応することで、自らのコミュニケーション力、プレゼンテーション能力、防災力を高めている。

10月17日 水害が多発している現状と人の防災意識に関わる課題、防災意識向上の必要性を教授し、プロジェクトの意義および内容に関わる打ち合わせを行った。動くに関わる活動として、春日井まつりにおいて、参加住民に都市浸水のメカニズムと防災対策を説明し、住民の防災意識向上を目指す。

10月19、20日 「春日井まつり」にて都市浸水模型を活用した説明を実施した。参加住民は小学生とそのご父兄、お年寄りなど多様であり、説明する学生も相手に理解してもらうために様々な工夫を行っていた。また、他者に説明することで、自分の理解も深まっている様子であった。

11月25日、1月14日 活動の振り返りを行い、次年度に向けての課題を抽出した。



春日井まつりにおけるブースの様子



説明（活動）の様子

生活・住環境を考えるまちづくり WG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 学生主体の標準化活動

氏名： 伊藤佳世 所属・職名： 経営情報学部経営総合学科・准教授

1. 学生主体の標準化教室

● 中大連携・高大連携

中大連携として春日丘中学との連携を行った。事前講義、本学における3日間の授業、春日丘中学における5日間の支援を行い、35名の中学生が10日間約20時間の学習を経て学園祭で学びを活かした研究発表を行った。野球部を中心に18名の学生が支援した。実施内容と本学からの学生の参加はいかのとおりである。1日目SDGSとスマート技術3名、2日目生物多様性2名、3日目まとめ3名、4日目野球部から学ぶチームワーク4名、5日目野球部から学ぶコミュニケーション3名、6日目グループワーク3名 7日目グループワーク3名 8日目グループワーク3名 9日目装飾1名 10日目発表会当日2名が参加した。学園祭当日は合計で503名が体験した。高大連携として11月18日名古屋経済大学市邨高校で3年生の倫理の授業で30人に生物多様性の環境倫理を行った。1名の学生が担当した。

● イベントでの標準化教室

名古屋市や愛知県と連携し、環境及びSDGsのイベントで標準化教室を実施した。9月15日久屋大通公園で開催された環境デーなごやに6名で出展し、合計で591名が体験した。10月12日オアシス21で行われた名古屋市消費生活フェア（エシカルフェア☆なごや2024）に10名で出展し、合計で735名が体験した。11月2日鶴舞公園で行われたLets エコアクション in AICHIに5名で出展し、合計で311名が体験した。12月4・5・6日東京ビッグサイトで行われたエコプロ2024に5名が出展し3日間で合計13259名が体験した。

2. 学生主体のSDGs推進

7月6日に開催された全国環境マネジメント学生大会に1名の学生が参加し、発表を行った。この大会に30名の学生が参加した。11月13日第15回中部大学ESD・SDGs研究・活動研究発表会で1名の学生が発表を行った。

3. 産学官民連携

● 専門家連携

教材開発にあたり専門家と連携し教材の妥当性を検証した。8月28日経済産業省、環境省、日本規格協会、INOCA 9月3日にNACSとWEB会議を行った。3名の学生が担当した。9月13日は対面でNACS中部9名を対象に専門家連携を行った。3名の学生が担当した。

● 愛知県職員対象の研修会

8月22日と9月30日 愛知県の依頼を受け、環境マネジメント研修会で600名の職員を対象に標準化教室を実施した。2日目は3名の学生が担当した。

4. 青少年支援

愛知県青少年育成アドバイザーと連携し、スマートフォンの適正利用に関する紙芝居の実演を行っている。自分たちが実演するだけではなく子供に紙芝居の読み方の支援も行った。5月12日春日井市主催の落合公園で開催されたわいわいカーニバルに8名が出展した。10月12日に鶴舞公園で開催された青少年育成アドバイザーフェスティバルに5名が出展した。

			場所	学生数	来場者数
学生主体の標準化教室	中高大連携	中大連携	中部大学 春日丘中学	18	503
		高大連携	市邨高校	1	30
	イベント出展	環境デーなごや	久屋大通公園	13	591
		消費生活フェア	オアシス 21	13	735
		レッツエコアクションあいち	鶴舞公園	5	311
		エコプロ	東京ビッグサイト	5	13259
学生主体のSDGS推進	全国学生大会		WEB	2	30
	ESD SDGS 発表会		中部大学	1	20
産学官民連携	愛知県職員研修		自治研修所	3	600
青少年支援	わいわいカーニバル		落合公園		1088
	青少年育成アドバイザー		鶴舞公園		100



中大連携



専門家連携 NACS 中部

標準化教材の開発を経て、SDGs の達成のための解決策を学びチームとして働く力、実演を通して標準化の大切さ、若者と共に社会課題解決に向けての教育とコミュニティづくり、持続可能な開発を担うための育成で前に踏み出す力と考え抜く力を身に着け、さらに、青少年の育成の支援を行い次世代のリーダーの育成と情報リテラシーを学んだ。

文章原案 池田琉武

監修 伊藤佳世

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 星空ネットワーク

氏名： 大嶋晃敏

所属・職名： 天文台・副台長

中部大学天文台は「星空ネットワーク」として参加させていただいています。今年度も多くの学内外イベントへの参加を行ない、また、新たな地域連携も生まれました。以下に現時点までに実施・参加したイベントの一部をご紹介します。

学内イベントとして、今年度は、初夏（6/2）・夏（8/2, 3, 4）のオープンキャンパスで施設開放を行ない、大学祭（11/2, 3, 4）でも3日間の施設開放を行ないました。初夏のオープンキャンパスでは73名、夏のオープンキャンパスでは3日間で149名が来場されました。また、大学祭では3日間で400名を超える来場者がありました。



プラネタリウムの解説をするサポーター



望遠鏡の説明をするサポーター

今年度から、岐阜県かかみがはら航空宇宙博物館との協力が始まりました。11月には2回（11/16, 30）に分け、子供向けの惑星をテーマとした講演会と、天文工作教室と観察会を実施しました。また学生サポーター指導の下、天体望遠鏡の操作体験も行いました。



岐阜県かかみがはら航空宇宙博物館で行なった天文工作教室と天体観測の様子

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： こまきこども未来館プロジェクトマッピング制作 ©MIR

氏名： 柳谷啓子・柊和佑 所属・職名： 人文学部メディア情報社会学科
教授・准教授

活動内容

- 小牧市連携事業として、小牧市中央児童館である「こまきこども未来館」4階未就学児エリアの20m×3mの大型壁面と床・天井の演出、年4回コンテンツを納品。
- 四季の風物詩、ひらがなの練習、あいさつ表現等の映像作品を制作・投射、入場無料のここに来れば、どんな家庭環境の子どもも上質な情操教育の場に身を置くことができる環境を提供することが目的（SDGs4）。これまで40作品以上を制作。
- 参加メンバーらは、企画・イラストデザイン・モーション・音楽の部門に分かれてコミュニケーションをとりながら、協働して毎回2、3の作品を制作、納品前には現場で試写を行って、動体のサイズや速度、色、音量などを調整。
- 年間を通して原則的に週1回の「学生会」で進捗状況を互いにチェックし合い、議論を重ねて、チーム全体としての作品を制作。スケジュールも自己管理。
- 年間を通して、原則的に隔週で「全体会」を開催、教員も交えてのアドバイス。
- 学生らは、この他にも自主的に勉強会を開いて、上級生や外部講師がAdobe Illustrator, After Effects, Blender, Unityなどの操作方法を教授。
- この他、2025年に小牧市が市政70周年を迎えることから、その記念コンテンツの制作を依頼され、小牧市こども未来部多世代交流プラザ事業推進係スタッフらと学生らとを交えて何度も打ち合わせを重ね、12月20日に最終的に納品。記念コンテンツは2025年1月5日より上映開始。
- 2024年度は8人の学生が中心メンバーとして活動。

活動成果

【定例学生会】お盆と年末年始を除く2024年4月～2025年3月の毎週火曜日 17:00-19:30
合計50回（2514講義室／282A講義室＋zoom）

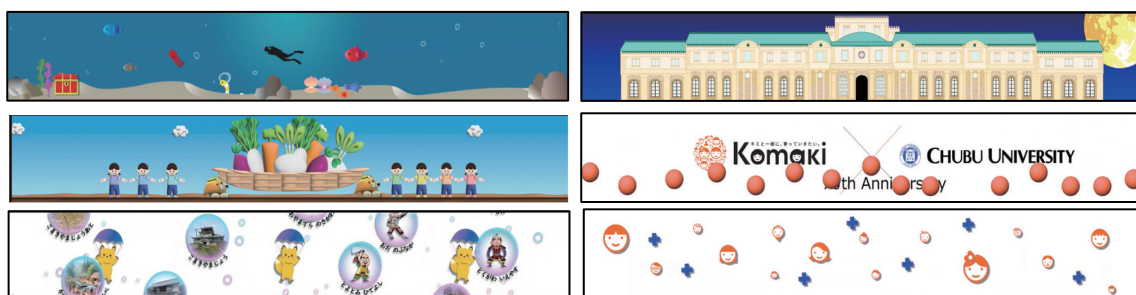
【定例全体会】お盆と年末年始を除く2024年4月～2025年3月の隔週木曜日 17:00-19:30
合計26回（271Cスタジオ＋zoom）

【小牧市市政70周年記念コンテンツ制作】①市役所との打ち合わせ：5月30日（木）（国際・地域交流プラザ），8月5日（月），9月13日（金）（こまきこども未来館3階会議室），②市役所との打ち合わせ、試写・調整：8月20日（火），10月15日（火），11月19日（火），12月17日（火），1月7日（火）10:00-11:30（こまきこども未来館）

【こまき産業フェスタ 2024】メディア情報社会学科柳谷ゼミと合同で中部大学ブース「人文学部のSDGs達成を目指した地域貢献活動」出展：5月25日（土）、26日（日）9:00-16:30（パークアリーナ小牧）

【高蔵寺 NT サンマルシェイベント】高蔵寺ニュータウンセンター開発株式会社とのコラボ企画「夏の終わりのさわって遊べるデジタル花火祭」への作品提供：8月24日（土）、25日（日）10:00-17:00（高蔵寺ニュータウンサンマルシェ南館3階）

【中部大学祭】①研究発表展（作品上映とVR体験会）：11月2日～、4日 9:30-17:00（2514講義室）、②Symphony Parade フィナーレへのインタラクティブ・プロジェクト・コンテンツ提供：11月3日（日）17:00-18:00（人文学部棟前広場）



2024 年度制作 常設展示用メインコンテンツ例と 70 周年記念コンテンツ例



外部講師による勉強会



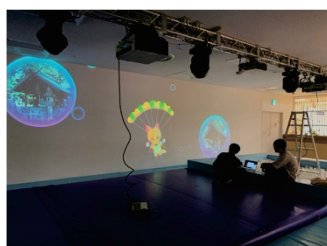
こまき産業フェスタ 2024



全体会の様子



高蔵寺 NT 触って遊べる花火大会



小牧市 70 周年記念コンテンツ試写・作品中の小牧市未来図（右）



大学祭：研究発表展



大学祭：Symphonic Parade とのコラボ（左はリハ風景）



生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： アスコンについて「考動、未来につなぐ・残す」

氏名： 余川 弘至

所属・職名： 工学部都市建設工学科・准教授

テーマ：「サステイナブルなアスファルト」について

目的： 現場実習による学びと、グループワークによる課題解決能力の向上を目的とする。

内容

○現場実習および見学を通じて、道路工学の現状と課題をより深く学ぶこと

・「目で見て、耳で聞いて、手で触り、匂いを嗅ぐ」を体感する。

○アスコン施設内にて

- ・産業廃棄物であるアスファルトの受入を見学する
- ・産業廃棄物である再生資源としての役割、及び再生資源としての再利用の確認する
- ・再生アスファルト、新アスファルトの製造見学、及び資材（材料）の確認する
- ・アスファルトの実習体験する

○実習後のグループディスカッション

試験配合したアスファルトに対して、密度試験やマーシャル試験などを実施し、その成果をまとめるとともに、サステイナブルなアスファルトについて検討する。

【事前勉強会】 9月24日(火) 都市建設工学科3年生 7名

現場実習に先立って、アスファルトについて学ぶ機会を設けた。

【現場実習】 11月9日(土)および 12月7日(土) 都市建設工学科3年生 6名

名古屋中央アスコン(愛知県名古屋市)を訪問し、現地実習・研修を実施した。アスファルト合材の製造過程やリサイクル状況を見学するとともに、アスファルト合材の供試体作成やマーシャル安定度試験を実施した。

【成果発表会】12月18日(水) 都市建設工学科3年生 7名

事前勉強会、現場実習を受けて、レンガおよびウッドチップのリサイクル材を混合したアスファルトの再利用の可能性について最終発表会を実施した。

実施時の様子を写真1～8に示す。



写真1 現場実習の様子(座学)



写真2 アスファルト工場の見学



写真3 配合・練り混ぜ



写真4 供試体密度の計測



写真5 強度試験



写真6 発表会(1)



写真7 発表会(2)



写真8 集合写真

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： ボランティア演奏隊

氏名： 伊藤 正晃

所属・職名： 国際関係学部国際学科・講師

「ボランティア演奏隊」は中部大学生だけで構成されるのではなく、筆者が主宰のオカリナグループ「 Δ Ocarina (デルタ・オカリナ)」がおこなっているボランティア活動に、学生が参加する形をとっている。オカリナグループは、オカリナをメインに、伴奏としてピアノ、打楽器などを用いている。参加する学生には、演奏できる楽器で参加をしてもらうことになるが、吹奏楽の経験がある者は、その楽器を含めた編曲を手掛けている。以前までの参加学生は楽器が苦手ということもあり、打楽器に回ってもらっていた。

新型コロナ感染拡大の影響を受け、2022 年までは老人ホームや幼稚園などからのボランティア演奏の依頼は激減した。その反動ともいうべきであろうか、2023 年度に入り、規制が緩和され、それを待っていたかのように、施設からの依頼が飛び込んできた。

上記のように、本年度は複数回のボランティア演奏ができるようになり、地域創成メディアーター資格取得のための「動く」が開催できた。本年度は、国際学科の3年生2名が参加した。二人は楽器経験がなかったため、打楽器を担当してもらった。

本年度の活動は以下のとおりである。（＊は学生が参加したもの）

2024 年 8 月 25 日：子育てサロン（石尾公園）

2024 年 9 月 15 日：ちいき食堂

2024 年 10 月 8 日：グループホーム「こころ」

2024 年 11 月 6 日：デイサービス「ミルクホール」

2024 年 12 月 15 日：「ほっこりまつり」於・ノキシタプレイス ＊

2024 年 12 月 24 日：グループホーム「こころ」

2025 年 2 月 9 日：くまカフェ大音楽祭

2025 年 2 月 14 日：関西詩吟文化協会

2025 年 3 月 15 日：かすがい市民文化財団主催 アトリウム音楽祭



「ほっこりまつり」での演奏

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： おもしろ科学実験ネットワーク

氏名： 大嶋晃敏 所属・職名： 理工学部数理・物理サイエンス学科・教授

「おもしろ科学実験ネットワーク」として参加させている科学物理実験会は、今年度も多くの自治体・団体から声をかけていただきました。旧工学部工学基礎教室の岡島茂樹先生が立ち上げられ、十数年を経過した科学物理実験会ですが、初心を忘れることなく工夫を凝らしたおもしろ科学実験を日々開発していきます。以下に今年度、現時点までに実施した地域イベントへの参加をご紹介します。

地元春日井市男女共同参画課からのお誘いで、5月中旬に落合公園で開催される「わいわいカーニバル」に参加してきました。また今年度は、高蔵寺まちづくり株式会社グルッポふじとうからの依頼で、夏休みの子供理科教室を開催しました。



わいわいカーニバルの様子（落合公園にて）



グルッポふじとうでの理科教室の様子

今年度は岐阜県瑞浪にあるサイエンスワールドからのお誘いで、2月に大学生サイエンスフェスティバル2024と6月に「体と健康科学フェスタ2024」に参加してきました。また、3月には地元不二ガ丘地区においてもサイエンスショーを開催しました。



瑞浪サイエンスワールドにて



不二ガ丘子供会でのサイエンスショー

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： メディア表現を活用したサボテン工芸デザインプロジェクト

氏名： 河村陽介 所属・職名： 人文学部メディア情報社会学科・講師

1. 活動内容

春日井市ではサボテンを特産品として推進しており、特に食品に活用されているが、この取り組みではサボテンを工芸品やデザインに活用できないかを模索し、地域のリサーチ、制作を通じて地域資源の再考と工芸、デザインの制作を行う。この制作物の提案により地域資源の利活用として新しい価値観を産み出すことを目的とする。

2. 活動成果

素材のリサーチを行い、アイデア出し、試作のプロセスを経てサボテンを素材としたものや、サボテンをモチーフにした作品の制作を行った。サボテンを使用した和紙で制作したバッジ作りのワークショップや、サボテンをモチーフにした 3D プリント製のボードゲーム、PC 用ゲームなど伝統的な素材の使用方法だけでなく、3D プリンターやプログラミングなどのメディア表現を駆使して作品の制作を行った。制作物はオープンキャンパスや大学祭などで展示を行い、高校生や地元の来場者の方に見ていただきフィードバックを得ることができた。

【制作】2024 年 4 月～7 月 サボテンを活用した工芸、デザインの制作を行った。

コミュニケーション学科 3 年生 10 名

【展示】2024 年 8 月 24 日、25 日 サンマルシェ（高蔵寺）にて夏祭りイベントとしてサボテン作品の展示とサボテン和紙のバッジづくりワークショップを実施した。

コミュニケーション学科 3 年生 6 名、4 年生 1 名 来場者約 1000 名

【展示】2024 年 10 月 19 日、20 日 春日井まつり（春日井市役所）にてサボテン作品の展示とサボテン和紙のバッジづくりワークショップを実施した。

コミュニケーション学科 4 年生 1 名 来場者約 200 名

【展示】2024 年 11 月 2 日、3 日 中部大学大学祭にてサボテン作品を展示した。

コミュニケーション学科 3 年生 8 名、4 年生 10 名 来場者約 80 名



図1 高蔵寺ワークショップ



図2 高蔵寺展示



図3 春日井まつりワークショップ



図4 春日井まつり展示



図5 大学祭展示



図6 大学祭展示

3. 今年度の課題・次年度の目標

本活動は春日井まつりや高蔵寺での発表を通して多くの方にサボテン工芸の魅力を発信することができた。次年度は市民などが作り手として参加するような仕組みを設け、サボテン工芸の普及を目指したい。

生活・住環境を考えるまちづくりWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 稲作体験

氏名： 前野善孝・関川達志
呂 鋭・矢野 智奈美
宮田 茂

所属・職名： 応用生物学部 食品栄養科学科
教授・助手
准教授・助手
准教授

食糧生産から消費に至るまでの食に関する体験活動を行うとともに、自らの食育の推進に関する活動を実践することで、正課教育では身に付きにくい食に対する理解を深めることを目的とした。地域の農家の方と協力しながら稲作を体験することにより、協調性の向上をはかるとともに農業を通じたコミュニティの醸成に貢献する人材を育成することを目指した。振り返り学習を通じて、都市部近郊の農業による緑地空間や水辺空間が、地域住民の暮らしにやすらぎや潤いを提供していることや、雨水の保水や生物の保護、災害時の防災空間の確保、食料自給率の向上などに貢献していることを学ぶことができた。加えて、実際に精米したお米になるまでの苦労を体験することで、日々何気なく用いているお米を大切に扱うようになり、特に3年生は、自ら収穫した愛着のあるお米を給食実習で使うことで、給食の提供にやりがいを感じたようである。

- ＜参加者＞・地域創成メディエーター候補学生 6 名
・管理栄養科学専攻学生、有志教員とその家族、地域農家、
応用生物学部農場サポーターズクラブの学生

＜活動実績＞

- 5 月中旬 事前学習、田起こし¹⁾、代掻き¹⁾
6 月上旬 田植え²⁾
7 月～9 月 管理と除草¹⁾
10 月 12 日 稲刈り、26 日 脱穀
11 月 9 日 粃摺り 収穫量は玄米として約 300 kg、
25 日以降 必要に応じて精米

¹⁾ 応用生物学部農場サポーターズクラブ学生と地域農家のみ参加

²⁾ 2 年生は 2023 年度、3 年生は 2022 年度に参加



田植え（2022 年度）



田植え（2023 年度）



稲刈り

③ 世代間交流プログラム WG

1. 活動組織

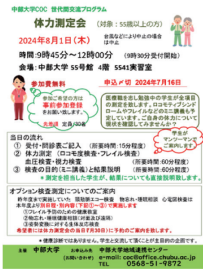
委員長 堀文子
副委員長 戸田香
委員 野田明子 伊藤守弘 横手直美 尾方寿好 水上健一 北辻耕司
矢澤浩成 谷利美希

2. 活動計画

- 4月～3月 KCG サークルでの健康教室指導（2回/月）
- 4月～3月 地域イベントに対するボランティア活動（救護・消防団）
- 4月9日(火)～ C AAC大学講義の補助（健康増進実習など）
- 4月～ 健康寿命延伸のための快眠・運動教室
- 5月～ 多学科協同による乳児と母親に対する「子育てセミナー」
- 5月5日、6月2日(日)：地域におけるスポーツ・防災活動を通じた地域活性化への取り組み
- 5月～ パラ（障がい者）スポーツのすすめ
- 5月～ アクティブシニアとの交流活動
- 6月～ 福祉用具体験セミナー
- 6月中旬～ 体力測定会
- 6月～ 石尾台町内会夏祭りサポーター

3. 活動成果

- ・総括（WGリーダー）
世代間交流プログラム WG では、「動く」の活動として 11 件が登録されており、これらの活動に参加している学生は、担当教員の指導の下「地域創成メディエーター」取得に向けて活動を行っている。今年度は参加者のうち 7 名が資格申請をしている。
「地（知）の拠点整備事業」開始当初から、徐々に活動の種類を増やし、現在では 11 件もの活動が実施されている。「子育てセミナー」や「アクティブシニアとの交流活動」などでは、参加したシニアや乳児の母親から、学生との交流への感想や今後の継続への期待がアンケートを通して寄せられている。
詳細は、各「動く」活動報告をご参照いただきたい。



4. 今年度の課題・次年度の目標

本 WG は、「地（知）の拠点継続事業」として継続している。参加者は増減するものの、シニアからも学生からも継続を希望する声を得られている。コロナ禍の活動縮小や遠隔による方法の工夫を経て、本年度は当初の形式による活動が可能となってきた。

活動のテーマである「世代間交流」としては、シニア・障がい者・子育て支援などが計画され、学内でも生命健康科学部のみならず、現代教育学部の学生や CAAC 受講生など裾野も広がりを見せている。地域創成メディエーターの取得を目指す「動く」の活動の一環としても、その位置づけの中で学生の学びにつながる成果が得られている。

他にも学生からは、他学科の学生との交流への期待も聞かれているが、異なる学科では予定の調整が難しいなど、今後の課題と考える。参加方法についても、主体的な立場での参加と見学や体験としての参加の希望などもあり、学生のニーズに合わせた活動についても検討していきたいと考えている。

(WG リーダー 堀)

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

ママもベビーも Happy になれる

活動名称： ベビーとママのエクササイズ&子育てミニレッスン♪

氏名： 横手直美

所属・職名： 生命健康科学部保健看護学科 准教授

今年度も感染対策を徹底しながら、2回シリーズで対面開催した。地域連携教育センター主催で開催し、広報活動では春日井市子ども政策課のご協力を得た。今年度はチラシを刷新し、近隣の産科クリニックにも配付して広報を依頼した。

活動当日は、保健看護学科（以下 LK）、幼児教育学科（以下 PY）、スポーツ保健医療学科の救急救命コース（以下 LE）の学生、計 25 名がアシスタントとして運営に参加した。LK 学生はとくに母子の体調や乳児の成長具合の確認、PY 学生は子育てミニレッスン①での講師の補助、LE 学生は子育てミニレッスン②の実技指導の補助を行った。

学生は子育てセミナーについて事前指導を受けてから参加したことや、1組の母児を担当し、事前に担当する児の月齢に合わせた学習を行ったことによって、体験からの学びを深めることができていた。

学生の事後レポートには、今回のセミナーでは実習では体験できなかった内容も多くあり、様々な月齢の母児と直接的に関わられた経験は、今後、看護師・養護教諭・救命救急士となった際の実践力につながる事が記されていた。また、他学科の学生と協力しながら運営したことで、それぞれの専門性によって母児への関わり方や観察ポイントが違うことに気づき、互いに良い刺激を受けていることも多くの学生が述べていた。今後も学生間で交流を深め、多学科協同で開催する意義が果たせるように運営していきたいと考える。

参加した母親の実施後の Web アンケートでは、ベビーのマッサージとエクササイズ、ママの疲労改善エクササイズ、子育てミニレッスンのどのコーナーも満足度が高く、学生スタッフのサポートや声かけについても、お褒めの言葉をいただいた。

（本年度の活動の様子については以下のホームページをご覧ください）

<https://pfs.chubu.ac.jp/faculty/yokote-naomi/parenting-seminar/2024kosodate/>

【第1回】 2024年5月23日（木）10時30分～12時00分

内 容： ベビーマッサージとママのエクササイズ

保健看護学科 准教授 横手直美（助産師）

子育てミニレッスン①「赤ちゃんの発育発達とおもちゃの選び方」

幼児教育学科 講師 千田隆弘

参加者：母親9名、乳児9名、保健看護学科学生4名、幼児教育学科学生8名

場 所：中部大学 51 号館 4 階 514A（母性・小児看護実習室）

【第2回】 2024年7月12日（金）10時30分～12時00分

内 容： ベビーマッサージとママのエクササイズ

保健看護学科 准教授 横手直美（助産師）

子育てミニレッスン②「赤ちゃんのもしものときの備え」

スポーツ保健医療学科 講師 北辻耕司（救急救命士）

参加者：母親8名、乳児9名（双子1組あり）、保健看護学科学生8名、スポーツ保健医療学科 救急救命コース学生5名

場 所：中部大学51号館4階514A（母性・小児看護実習室）

2 活動報告



写真 1 : 集合写真

(LK 学生はピンクの色の T シャツ着用、
PY 学生は紺色の T シャツ着用)



写真 2 : ベビーマッサージ中の乳児



写真 3 : ママのストレッチ



写真 4 : 子育てミニレッスン

(おもちゃの選び方の説明)



写真 5 : 子育てミニレッスン

(誤飲時の対応のレクチャー)



写真 6 : 学生によるレクチャー

(LE 学生は水色のユニフォーム着用)

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： パラ（障がい者）スポーツのすすめ

氏名： 伊藤守弘 所属・職名： 生命健康科学部スポーツ保健医療学科・教授

2024 年 11 月 30 日（土）に障害者スポーツの体験－ふれあい交流 2024－をメインアリーナで開催した。スタッフを除く一般参加者は、50 人であった。このイベントは、愛知県と愛知県社会福祉協議会、中部大学が共同主催し、中部大学の学生が 8 名参加した。

2 部構成とし、1 部に講演会、2 部は障害者向け陸上競技の体験会を行い、参加者が障害者スポーツに触れる機会となった。参加者が学生のサポートを受けながら、競技や身体の使い方を学んだ。

2 年連続して参加した学生がいる。この活動が、学生の学びにつながっていると感じた。さらに、この活動を通して、中部大学の教育研究成果等を積極的に社会に還元する機会となり、広く社会の人々の健康の増進及びスポーツ文化の向上に貢献できたと思う。



世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 健康寿命延伸のための快眠・運動教室

氏名： 野田明子

所属・職名： 生命健康科学部生命医科学科・教授

【概要】

将来医療関連従事者を目指す学生が地域住民の健康増進・疾病予防を目的とし、学内で月2回程度の快眠・運動教室において世代間の交流を行うとともに、睡眠・運動・食事指導を行った。また、地域のラジオ体操に参加による血圧・動脈硬化評価、在宅訪問による24時間心電図検査、簡易睡眠検査および身体活動測定を実施し、健康管理について討論した。生命健康科学部全体で行った2024年8月1日の体力測定会では、活動の目的、実施内容を参加者に説明し、学生はその後の活動で地域の参加者と交流を深め、疾病予防に対する知識・技術を高め、コミュニケーション能力を向上した。これらの成果を生命医科学科4年生の山崎球人君と深町郁葉さんがESD・SDGS研究活動・発表会で報告し、2名ともに学長賞として表彰された。これは、学生の今後の発展に大いに役立つ意義の高い成果であった。

【活動内容】

地域在宅訪問と快眠・運動教室では、血圧、運動耐容能、動脈硬化、睡眠障害および物忘れ評価、尿中Na・K比の測定を実施し、睡眠・運動・食事指導を実施した（図1, 2）。

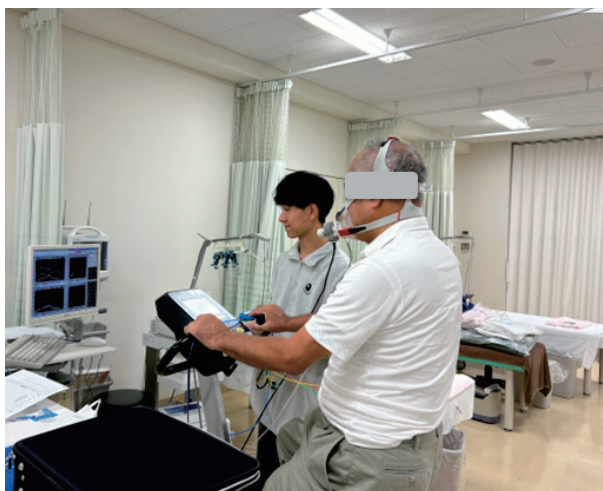


図1 心肺運動負荷試験

本試験の実施による適切な身体活動指導



図2 頸動脈超音波検査

携帯型超音波診断装置を用い動脈硬化評価

今後も世代間交流による「動く」活動を継続し、地域活性化・学生育成を目指す。

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 体力測定会

氏名： 戸田 香

所属・職名： 生命健康科学部理学療法学科・教授

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1) ミニ講義準備 | 7月4日(木) 開始 |
| 2) 直前オリエンテーション | 7月17日(水)、18日(木) |
| 3) 前日準備と当日体力測定会開催 | 7月31日(水)、8月1日(木) |

当日参加者

教員：戸田香、矢澤浩成、野田明子、堀文子

学生：42名(LP・LB・LC・LK)、地域住民(シニア参加者)：24名

体力測定会は学生と地域住民との世代間交流を目的としている。地域住民を対象とし、ロコモ度チェックや体力テストを中心に実施している。2024年は初の試みとして健康増進に関するミニ講義を学生が実施し好評であった。高齢参加者の健康管理の一助となっている点から、過年度から継続的に参加を希望して下さる方が多い現状である。本活動は平成25年から継続しており、今年度が11回目の開催であった。今回も春日井市健康増進課の協力を得て、中部大学の近隣地域への広報活動を行い、新たな参加者の開拓につながった。

学生は理学療法学科・生命医科学科・臨床工学科・保健看護学科の学生が参加した。本企画は学生にとって、準医療人として日ごろの学びの成果を発揮できる場としての一面を持っている。次年度以降も継続的に実施を予定している。



中部大学COC 世代間交流プログラム

体力測定会 (対象：55歳以上の方)

2024年7月31日(水) 台風などにより中止の場合は8月1日(木)に順延

時間：9時45分～12時00分 (9時30分受付開始)

会場：中部大学 55号館 4階 5541実習室

参加費無料

申込〆切 2024年6月30日



参加ご希望の方は
事前参加登録
をお願い致します。
先着順 定員：30名

医療職を志し勉強中の学生が全項目の測定を致します。ロコモティブシンドロームやフレイルなどのミニ講義も予定しています。ご自身の体力について現状を確認してみませんか？

当日の流れ

- ① 受付・問診表ご記入 (所要時間：15分程度)
 - ② 体力測定 (ロコモ度検査・フレイル検査)
血圧検査・視力検査 (所要時間：60分程度)
 - ③ 検査の目的(ミニ講義)と結果説明 (所要時間：60分程度)
- *測定を担当した学生が、結果についても直接説明致します。

学生が
マンツーマンで
ご案内します。

オプション検査測定についてのご案内

昨年度まで実施していた 頸動脈エコー検査 物忘れ・睡眠相談
心電図検査・血管反応性検査 など
上記については、希望者のみ別日程で実施します。
体力測定会の当日(7月30日)に予約のご案内を致します。

*健康診断ではありません。学生と交流して頂くことが主目的の企画です。

主催 中部大学 お申込み先 中部大学地域連携センター
(お問い合わせ) e-mail: coc@office.chubu.ac.jp
TEL 0568-51-9872

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 福祉用具体験セミナー

氏名： 堀 文子 所属・職名： 生命健康科学部保健看護学科・准教授

【概要】

日 時：2024 年 8 月 5 日（月）13 時～16 時 30 分

場 所：中部大学 50 号館 4 階 基礎看護学実習室

参加者：中部大学 作業療法学科学生 5 名、教員 3 名

地域在住高齢者 延べ 11 名

活動内容：福祉用具体験セミナーとして、実際の福祉用具を体験してもらった。

シニアには、福祉用具の体験が、学生にはシニアの特徴を知る機会となった。

【アンケート結果】

シニアからは、体験できたことへのお礼があり、スライディングシートやボードの使い方などに興味を示していただけた。それに加え、実際の道具の使用方法だけでなく、今回体験したシートやボードなどの購入価格やレンタル価格を知りたいとの希望もうかがうことができた。アンケートには「道具だけでなく支援する人の動き方や安全な使い方も重要だと思う」「その人の持っている能力を活かした自立（自律）支援が大切だ」などのご意見を記載いただけた。また、「今回は介護する側からの体験だったが、介護される側の考え方や方法も行ってほしい」などの希望もうかがうことができた。

学生からは、「地域の方とふれあい、一緒に福祉用具（リフトなど）について学ぶことができて非常に良い経験となった」「機会があればまた参加したい」との意見が得られた。

【まとめ】

今年度も、昨年と同様に、大学の保健看護学科の基礎看護実習室において体験セミナーを実施した。学生の求人が遅くなり、マナーや道具の使用方法など事前学習を十分行うことができなかったため、参加希望に合わせた事前学習も検討していきたいと考えている。

【活動の様子】



以上

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： KCGサークルでの健康教室指導

氏名： 矢澤 浩成

所属・職名： 理学療法実習センター・講師

KCG (Kouzouji Chubudaigaku Genki) サークルは、地域在住高齢者・理学療法学科学生・教員で構成された健康増進サークルであり在籍数は約 40 名である。毎回、地域在住高齢者 20 名程度、5～10 名の学生が参加している。具体的な活動内容は、健康増進またはフレイル予防のための体操指導・レクリエーション・ディスカッション等である。月 2 回の頻度で年 24 回開催している。

この活動により、地域在住高齢者の健康増進効果およびフレイル予防効果が得られ、参加学生においては理学療法士を志す学生の準医療人としての自覚と臨床力が向上し、世代間の相乗効果が得られた。さらに高齢者と学生がお互いに尊重し支えあう関係が構築されることで地域活性化の期待感が高まり、特に学生はこの学外活動を通して地域貢献に対する意欲が向上した。

参加者からの具体的な感想として、学生からは、「はじめは異世代とのコミュニケーションに不安があったが、活動に参加することでコミュニケーション能力が向上したことを実感した」などの前向きな感想があり、一方の地域在住高齢者からは「学生が成長していく姿を目の当たりにし、若者に対する印象がとても良くなった」との世代間交流に対する肯定的な意見が多く挙がった。



世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 地域イベントに対するボランティア活動（救護・消防団）

氏名： 北辻耕司 所属・職名： 生命健康科学部スポーツ保健医療学科・講師

2024 年度における中部大学機能別分団員の活動は、中部大学内や春日井市内において年間 12 回の活動を行った。

4 月 10 日に第 1 回目の研修を皮切りに、5 月 15 日には 4 年生の退団及び 1 年生の入団を迎える入退団式をアクティブホールにて春日井市消防本部消防長、団長を招き行った。また、式終了後は 1 年生を対象に「春日井市機能別分団に関する要綱」に基づき、任務等を確認した。5 月 29 日、南海トラフ地震について地震のメカニズムや市の被害予測状況について防災研修実施するとともに、避難所について被災地の避難所運営の問題点及び必要性を把握した。6 月 19 日、26 日に 1 年生を対象に普通救命講習を実施した。その際、応急手当普及員または応急手当の資格を有している 2、3 年生を講師として行った。7 月 17 日に防災研修として、春日井市避難所運営マニュアルに基づき中部大学体育館及びサブアリーナを避難所と想定した研修を実施した。9 月 17 日に応急手当普及員講習は 3 日間、応急手当指導員養成講習は 2 日間の講習を実施した。講習後、応急手当普及員は校内で「救急入門コース」「普通救命講習 I」の指導に従事した。9 月 25 日、避難所運営の初期活動について防災研修を実施した。10 月 9 日、中部大学防災訓練では避難所受付訓練、消火器・消火栓取り扱い要領の指導を行った。10 月 4 日、5 日で宿泊訓練を実施し、中部大学体育館、サブアリーナで避難所の備蓄物資の使用方法を確認した。11 月 20 日、消防署を見学し、消防施設と消防車両の見学を通じて、常備消防の体制を把握する。12 月 4 日・11 日、出初式の説明、行動要領を確認した。

消防団活動を通じた春日井市の市民や消防職員との交流は、コミュニケーション能力、防災意識の向上につながっていると考える。このように消防団活動は学生にとって大変有意義な活動と思われ、今後も春日井市消防本部とのつながりを持ち続け、消防団活動を継続していきたい。

また、名古屋グランパスとの救護ボランティア活動については、J リーグの公式試合において、豊田スタジアムでの 19 試合すべての試合で参加した。救護活動を通じ様々な事案を経験し、学内での実習や講義で学んだことを生かすことができる有意義な活動であった。



世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 地域におけるスポーツ・防災活動を通じた地域活性化への取り組み

氏名： 尾方 寿好 所属・職名： 生命健康科学部スポーツ保健医療学科・教授

本活動では、地域に貢献し地域活性化に資する人材を育成するために、大学生にスポーツ・防災を通じた取り組みを実施させている。スポーツ・防災に着目した理由は、超高齢社会の日本において多くの高齢者が防災面を重視していることや、健康や病気へ不安を抱えていることから、現代社会では“防災”そして健康の維持増進を図ることができる“スポーツ”が相対的に高い重要性を持つと考えられたためである（尾方ら，中部大学教育研究，2016）。

2024 年度については、高蔵寺ニュータウン藤山台にある「グルッポふじとう（高蔵寺まなびと交流センター）」の6周年祭（2024 年 5 月 5 日）において、地域住民を対象としたニュースポーツイベントのボランティア活動を実施した（写真参照）。大学生6名の他に、救急救命士国家資格を有する大学院生1名が緊急時に対応するためのボランティアとして参加した。また、スポーツ保健医療学科の教員3名が引率した（岡村雪子，長谷川弓珠，尾方寿好）。このイベントに先立ち、ルール等の確認のための予行練習を大学内で行った。



グルッポふじとう6周年祭の様子

スポーツイベント実施後の感想として、「子供達全員に気を配ることができた」「子供達が喜ぶような声かけができた」「子供たちが笑顔でやってくれること，感謝されることがとても嬉しかった」などの手ごたえについて言及があった一方で、「スムーズに案内できたらよかった」「小さい子に伝わるような言葉遣いやジェスチャーなどを使うこと」「小さい子が危ない状況のときに，肩や手をさわっていいのか迷い上手く対処出来なかった」などの参加者とのコミュニケーションに対する反省があった。さらに，「子供は楽しみすぎて水を飲むことを忘れてたので，水分補給タイムなどをしっかり設ける方が良かった」「ボランティアが水分を取れるような休憩時間も必要」という熱中症対策の必要性も言及された。

スポーツイベントへの参加を通して，地域住民へのコミュニケーションの取り方を学びつつ，緊急時対応について体験的に考えることは，地域活性化を促進する人材の育成に有用であると考えられた。

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： アクティブシニアとの交流活動

氏名： 谷利 美希

所属・職名： 生命健康科学部作業療法学科・講師

【概要】

日 時：2024 年 9 月 14 日（土）13 時～15 時 30 分

10 月 3 日（木）、10 月 17 日（木）11 月 14 日（木）、11 月 28 日（木）

いずれも 9 時 30 分～12 時 00 分

場 所：緑が丘老人憩の家（春日井市石尾台）or グルッポふじとう（春日井市藤山台）

参加者：中部大学 作業療法学科学生 30 名、教員 1 名

地域在住高齢者 延べ 48 名

活動内容：大学生によるスマホ相談会（スライドを用いた説明、個別相談など）

【学生の学び・感想】＊事後アンケートの抜粋

①地域高齢者との交流による感想と学び

- ・ 実家帰りをした時のような柔らかい雰囲気がとても楽しかったです。
- ・ 高齢者の方々が楽しそうで元気で、参加したこちらが元気をもらった。
- ・ スマホの使い方を教えるだけでなく、その人の生活や趣味から使える機能やアプリを考えるのが楽しかった。
- ・ スマホの使い方を教えたらずとも喜んでもらえて嬉しかった。
- ・ 高齢者の方が分からなくて困っていることを一緒に解決していくことにやりがいを感じた。
- ・ 人と人との繋がり大切さ、積極的に交流の場を作る姿勢の大切さ、どのようなことに困っているのか、人と話をする楽しさを知った。
- ・ 高齢者の方はご自身の話を話している時が一番うきうきしているように思えました。また、僕の話も親身に聞いてくれて嬉しかった。
- ・ 若い世代とおしゃべりすることを楽しみに思ってくださっていることがわかった。
- ・ 年上の方に怖いイメージがあり苦手だったけど今回話してみて少しイメージが良い方向に変わりました。
- ・ スマホだけでなく、高齢者と触れる機会が大切だなと感じました。
- ・ ネット社会が進んでいて、全員がスマホを使えることが前提のようになってきていて苦労していることがわかった。
- ・ このような交流の場があることが、元気の秘訣なのかなと思いました。

②交流時に気を付けたことや課題について

- ・ 自分では大きい声で話していたつもりだったが、聞き返されることが何度あった。伝わりやすいようにどうやって説明したら良いか考えながら、説明する必要がある。
- ・ 年上の方との話し方を学べた。
- ・ 敬語を忘れないこと、相手の話を遮らないこと、相手の個人的な話を自分から聞き出そうとしないことなどに気を付けた。

- ・ スマホの相談を受ける際はたくさんお話しすることができたが、それ以外の時間で自分から話しかけに行くことができなかった。
- ・ 初めは緊張しましたが、高齢者の方がたくさん質問をしてくださったり、声をかけてくださったので、会話が弾んだ。
- ・ あまりニュースに詳しくないのである程度把握しとくべきだと思いました。
- ・ 順序だてて会話をすることに課題を感じた。
- ・ 話しすぎてしまうことがあった。
- ・ 今回は高齢者の方がはじめに声をかけてくださったおかげで会話が弾んだので、今後は自分から会話の話題を提供し、積極的に声をかけられるようにになりたいです。

③今後の活動への参加について

- ・ 今回の体験はとても楽しく、自分の為になることが多くあったため続けていきたい。
- ・ 今回の活動により、高齢者に対する生活支援の大事さを感じたため、今後も参加したい。
- ・ 同年代だけでなく違う世代と関わることは将来、大切な力になると思う。
- ・ 色々なことを知るきっかけになるから、今後も参加したい。
- ・ 今回楽しく参加できた上、自分の課題も発見することができたため、今後も参加したい。
- ・ もっと地域に関わりたい。
- ・ 臨床の場に出る前にたくさん経験を積みたい。

【活動の様子】



【まとめ】

今年度も、昨年と同様に、石尾台地区社会福祉協議会および、社会福祉法人まちスウィングより依頼をいただき、シニア向けスマホ相談会を実施した。参加学生は、地域在住高齢者の興味関心に触れ、生活状況や、必要としている支援を学んだ。また、高齢者の困りごとを解決するためのコミュニケーションを経験できた。個々の課題と向き合う機会となり、臨床実習や就職後に出会う高齢者との関わりにおいて、この経験が活かされると考えられた。高齢者の参加にはキャンセル待ちが出るようになっており、継続ニーズの高さがうかがえる。今後も、教育的効果の検証や大学生と高齢者双方にとっての世代間交流の意義を検討しながら、活動を継続していく予定である。

世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： CAAC 講義の補助（健康増進実習など）

氏名： 水上 健一 所属・職名： 生命健康科学部スポーツ保健医療学科
准教授

CAAC (Chubu University Active Again College) の授業科目である健康増進実習（通年 32 コマ）にて、シニアを対象とした健康運動教室を実施した。スポーツ保健医療学科の学生 7 名（4 年生 1 名，3 年生 1 名，2 年生 3 名）が運動指導を実施するものである。また，春・秋学期の始めと終わりに計 4 回，体組成測定や血圧脈波測定，体力測定を実施した。各項目の 1 年間の変動を個々に対してフィードバックするとともに，集団データは統計を行った上で学生が履修者に対してプレゼンテーションを行った。健康運動教室の企画・運営，運動プログラムの作成・提供，測定フィードバック等，さらには世代間交流を通じて，多くのスキルを身につけるとともにそれらを向上させることから学生のキャリア開発につながる。またデータを扱うことで研究活動の種にもなっている。今後も少しずつ活動の幅を広げ，高いレベルでのリカレント教育と学生教育のハイブリッドを目指していきたい。



世代間交流プログラムWG

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 石尾台町内会夏祭りサポーター

氏名： 谷利 美希

所属・職名： 生命健康科学部作業療法学科・講師

【概要】

日 時：2024 年 7 月 27 日 9 時～11 時、7 月 28 日 16 時～21 時、7 月 29 日 9 時～11 時

場 所：石尾台小学校

参加者：中部大学 作業療法学科学生 27 日 2 名、28 日 6 名、29 日 1 名、教員 1 名

主 催：石尾台町内会自治会協議会

活動内容：27 日 準備（テント設営など）

28 日 作業療法（革細工）×福祉ネイルブース

29 日 片付け（片付け、ごみ仕分けなど）

夏祭り当日入場者数：2,652 名

【作業療法×福祉ネイルブース体験者数】

- ・ 革細工体験：68 名（男女、年代さまざま）
- ・ 福祉ネイル体験：49 名（女の子 46、男の子 1、女性 2）

【学生の感想】

①ブース運営や準備片付けについて

- ・ 事前準備や夏祭り本番、後片付けまで普段関わることが少ない様々な年代の人と関わることができた貴重な経験でした。
- ・ ブースの運営は忙しかったが、多くのお子さん達に革細工を体験してもらい楽しんで貰えたことが良かった。
- ・ 子供達と触れ合う機会が多くてとても楽しかったです。お祭りの雰囲気も感じられてとても有意義な時間になりました。
- ・ 自分はこれまでボランティア活動にあまり参加したことがなかったので、ボランティア活動での人との繋がりや地域の人と触れ合うことができた。
- ・ 参加者はお子さんが多かったのですが、普段の生活（アルバイト等）であまり関わることがないので世代によって関わり方を工夫する必要があると感じ、学びになりました。
- ・ 内気な子や人見知りしない子などいろんな子供がいて革細工体験でも教え方に気を遣ったり視線を合わせに行ったり様々な配慮を考えながら実施することができ、自分のためになりました。

②今後の課題、反省点

- ・ 完成した革細工の作品に対して積極的に感想を言ったりすることが出来たらもっと良かったと思います。

- ・ 対応に困り、間が空いてしまうことがあったので柔軟な対応で会話を途切れさせないことが必要だと感じた。
- ・ 自分の説明が相手に伝わらない所があった。
- ・ 革細工の作業場所が狭かった。でも学生の動員数からすると、あまり広くしても対応しきれないかもしれない。
- ・ 作業療法の啓蒙になったのかな・・・という印象です。また、福祉ネイルの方々と、何かコラボできたら良かったと思いました。

③今後の地域活動への参加について

- ・ 知らない人との交流で、自分が関わってきたことがなかった人とも会話ができるためコミュニケーションを取る上で勉強になるので、これからも参加したいと思います。
- ・ 人と触れ合うのが好きだけど、いままでボランティアにあまり参加して来なかったので、今回のボランティアで良さをたくさん知れました。これからも機会があれば参加したいです。

【活動写真】



【まとめ】

今年度は、春日井市で活動する福祉ネイリストとのコラボ企画として参加した。参加学生は、様々な年代の方と積極的に交流することができた。地域主催の夏祭りに参加することによって、多世代が協力して地域に根差した行事を創り上げるという、持続可能な社会の創成に必要な実践を体験した。参加学生は、地域貢献への意欲が向上したと考えられる。今後も、このような地域活動への参加を取り入れながら、社会で役に立つ人材の育成につなげていきたい。

④ 全体

④全体は、従来からあった本学の地域活動等を「動く」の活動として承認したものや自治体主催の活動を「動く」の活動として承認したものなど、各ワーキンググループ（①正課教育WG、②生活・住環境を考えるまちづくりWG、③世代間交流プログラムWG）に属さない活動を取りまとめている。

1. 活動内容および計画

・「動く」

- | | |
|---------------------------------------|------------------------|
| ① 地域連携住居KNT創生サポーターズ（CU ⁺ ） | 通年 |
| ② ボランティア・NPOセンター | 通年 |
| ③ 小牧市東部でつながりやってみようプロジェクト | 通年 |
| ④ 臨床実践プログラム | 通年 |
| ⑤ サマースクール 2024（各務原市） | 8月28日（水）、29日（木）9月4日（水） |

※報酬型インターンシップは2023年度を以て終了。総括はP77～80。

①②は2013年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生教育事業」において活動が開始され、現在まで継続している。これらは 学生支援課の職員が指導している。③は小牧市主催の活動で、地域住民と共に学生が協働して地域の活性化に取り組んだ。④は臨床工学科・理学療法学科の学生が地域の医療・介護施設において日頃の学びの成果を活かして、入所者や施設職員との交流を行うものである。⑤はCOC+参加大学（岐阜大学・中部大学・中部学院大学・名古屋学院大学・日本福祉大学）共通プログラムであり、2020年度から「動く」として認定された。

・「学ぶ」

PBLゼミ 2024 [9/17（火）、18（水）9：30-17：30 2日間プログラム 5134 講義室]

「PBLゼミ」は、学生自身が自分の持ち味を発揮して地域や周囲に関わっていくための力を身につけることを目指した体験型学習として年1回実施しており、地域創成メディアーター「学ぶ」Aキャリア教育科目あるいはリベラルアーツ教育科目の1単位に読み替え可能としている。

修了者数（人）：33（男15、女18）（1年生8、2年生15、3年生8、4年生2）

修了者所属学部（人）：経営情報7、人文2、応用生物11、生命健康科8、工1、国際1、現代教育3
詳細は83ページ以降参照

・その他の活動

- | | |
|------------------------|-----------|
| ・COC事業採択校「全国学生交流会」への参加 | 2月28日（金） |
| ・2024年度 活動報告書（冊子）の配付 | 3月 初旬 |
| ・COC推進委員会の開催（年間4回） | 通年 |
| ・COC+多治見プロジェクトへの参加 | 11月23日（土） |

2. 活動成果

「動く」の活動については、各活動において地域のニーズに沿った提案、活動を地域住民の方々や他大学の学生と共に考え、提案や活動を行うことができた。そのような地域をキャンパスとした課外活動を通して、地域創成メディエーターを目指し課題解決できる人間としての力を養う機会を参加学生それぞれが得ることができたのではないかと思います。また、学生の地域活動への積極的な参加は、地域活性化や地域貢献に繋がったと自治体からも評価を受けている。

「PBL ゼミ」では、学生自らが学部や学年、学習スタイルが異なるようにメンバーを決めていくチームづくりから始まり、自己紹介やグループワークを経て、それぞれのチームがまとまっていった。プログラム終盤の「イメージ交換」では、メンバーの持ち味やその活かし方についてのアドバイスなどをプレゼントカードとして贈り合い、他者から見た自分を知ることによって自分自身に対して新しい発見を感じられたようだった。終了後のアンケート集計から、参加者の87%が「とても満足した」と回答しており、学生にとって大変有意義なプログラムであると思われる。

3. 今年度の課題・次年度の目標

コロナ禍を経て地域における活動が活性化している状況の中、自治体、地域等と連携を図りながら、新たな「動く」の活動についても検討し、より多くの学生が地域で活動できる機会の創出を目指したい。

「PBL ゼミ」については、地域創成メディエーター資格取得希望者の減少に伴い参加者は減少傾向にあるが、今年度は資格取得希望者以外も意識して募集活動を行った結果、申込人数が増加した。報酬型インターンシップ終了に伴い、正課外における学生の育成の場として「PBL ゼミ」の担う役割を踏まえ、引き続き受講者を増やすよう努める。

(地域連携教育センター事務局記)

全体

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 臨床実践プログラム（医療系 報酬型インターンシップ）

氏名： 武田 明

所属・職名： 生命健康科学部臨床工学科・教授

【概要（目的・内容・学生の学び）】

大学の講義・実習では、学ぶことが少ない職種の業務や、病院で働くことの魅力および病院のシステムなどを学び、「気づき」を体験することで自分を知る機会になった。また、病院で働く人たちの「志」に触れることで、働くことに対するモチベーションを向上させ、社会へと飛び立っていけるような精神的な礎を築く機会にし、就業前の就職先の選択肢を広げる機会になった。

【活動報告】

生命健康科学部や生命健康科学研究科の学生に、病院やクリニックおよび医療機器メーカーや薬局などで就労する機会を提供する為、学生にオリエンテーションの実施にて、就業先を斡旋した。又、施設拡充を実施した（活動場所：春日井市民病院・医療法人光寿会光寿会春日井病院）。今年度はクリニック 1 名、病院 2 名の活動となった。

以上

全体

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 地域連携住居

氏名： 佐久間好久・殿垣博之 所属・職名： 学生教育部 学生支援課

【概 要】

地域連携住居は春日井市と UR 都市機構、中部大学が連携した取り組みで 2015 年度から本格的に活動が始動し、本年で 10 年目を迎える。2024 年 12 月時点で本制度を利用し、高蔵寺ニュータウン（以下、高蔵寺 NT）内の UR 都市機構が管理する指定物件に入居している学生は 26 名。

本制度で入居できる指定物件は、エアコン・網戸付きで通常家賃より 20%オフで借りることができるが、高蔵寺 NT 内での地域住民との交流イベントの企画立案やその補助、自治会から依頼を受ける地域イベント（運動会や防災イベントなど）または交流イベント等の地域貢献活動に継続的に取り組む必要がある。

2024 年度より、活動条件や支援内容が異なる、アドバンスドコース、スタンダードコースの 2 コース制となり、アドバンスドコースの学生は、学生自らイベントの企画を立案し、地域での活動を積極的に行った。

【活動実績】（2024 年 12 月末時点）

入居学生が依頼を受けて参加した活動または、主催した学生企画は次の通り。

- ・自治会等外部から依頼を受けた活動
→ 計 14 回参加 参加学生：のべ 39 名
- ・入居学生が行なった学生企画
→ 計 5 回 参加学生：のべ 31 名

【活動紹介】一部抜粋

入居学生による「スライム実験教室」

2024 年 12 月 15 日（日）に高蔵寺 NT 内のグループふじとうで「スライム実験教室」を開催した。

本活動は、アドバンスドコースの学生 6 名主導で企画立案、周知、当日の運営までを行った。

当日は親子 40 名にスライムの作り方を楽しく学んでいただき、参加者の満足度の高いイベントとなり、学生は地域貢献を果たした。



全体

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 中部大学ボランティア・NPO センター

氏名： 唐木純也・下嶋悠介 所属・職名： 学生教育部 学生支援課

【概要】

中部大学ボランティア・NPO センター（以下、当センター）は学生自身によるボランティア活動団体として 2004 年にスタートし、今年度で 21 周年を迎える。

当センターでは、活動を社会教育・社会福祉・環境対策・地域貢献・災害対策の 5 つに分類し、学内外で行う活動を通じて、建学の精神である「不言実行、あてになる人間」の育成を目指している。

【活動実績】 2024 年 12 月末時点

プロジェクト名	学外から依頼を受けた活動	企画・立案した活動
社会教育	6 回	1 回
社会福祉	50 回	1 回
環境対策	11 回	0 回
災害対策	2 回	5 回
地域貢献	15 回	1 回

【活動紹介】 一部抜粋

・ 児童センターまつり（社会教育プロジェクト）

春日井市児童センターから依頼を受け、7 月 7 日（日）に春日井市総合福祉センターで開催された「児童センターまつり」に参加した。当センターは「ペットボトルキャップカスタネット」と「ペットボトルキャップカー」を作成するブースを運営し 300 名ほどの子どもが参加した。

子どもたちは学生スタッフとコミュニケーションを取りながら楽しくおもちゃを作ることができた。本活動は毎年、児童センターから依頼を受けるほど好評の活動となっている。



おもちゃを子どもたちと作っている様子

・ 児童発達支援・放課後デイ施設でのサポート（社会福祉プロジェクト）

春日井市内で児童発達支援・放課後デイを展開する施設から依頼を受け、利用者の見守り

や、勉強を教えることを行った。合計 12 名の学生スタッフがシフトを組み継続的に活動を実施した。(2024 年 12 月末時点で計 42 回) 参加学生は現場で利用者と交流することで福祉への関心を持つきっかけとなった。※利用者のプライバシー保護のため写真なし

・藤前干潟クリーン大作戦（環境対策プロジェクト）

環境問題への理解を深めるため 2012 年度より藤前干潟実行委員会が主催している「藤前干潟クリーン大作戦」に参加した。今年度は 5 月 25 日（土）に行われた「春の干潟クリーン大作戦」、10 月 19 日（土）に行われた「秋の干潟クリーン大作戦」に合計 61 名の学生が参加。清掃活動や運営補助を行い、干潟の現状を知り、環境問題について考えることができた。清掃活動後には干潟観察会も開催され干潟に生息する生き物についても学んだ。



ごみの分別の様子



干潟観察会の様子

・東日本大震災の被災地支援に係る活動（災害対策プロジェクト）

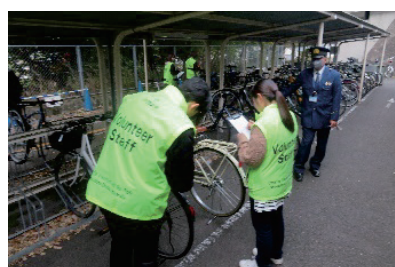
今後起こりうる南海トラフ地震に備え、学生スタッフが災害について危機感を持ち、防災・減災について考えること、東日本大震災の記憶を風化させないため 2024 年 2 月 19 日（月）、20 日（火）と 9 月 3 日（火）、4 日（水）、5 日（木）に宮城県気仙沼市を訪問し、伝承施設の見学と現地遺族会から依頼を受け、慰霊碑周辺の環境整備を行った。また、今年度は 10 年以上にわたり気仙沼市で行ってきた活動が認められ、2024 年 2 月 20 日（火）に、防災減災および地域活性化などを目的とした相互の協力について、当センターと気仙沼市で協定を締結し、9 月には協定に基づき気仙沼市お伊勢浜の海岸清掃を行った。

・自転車盗難防止活動（地域貢献プロジェクト）

学生の防犯意識向上を目的とし、学内の駐輪場に停めてある未施錠の自転車に対してツーロックを呼びかけるタグ付けを春日井警察署生活安全課の署員と行った。タグ付けの効果もあり学内での自転車盗難が減少している。その他、大学正門付近で闇バイトに対する意識啓発を行なった。



海岸清掃の様子



タグ付けの様子

全体

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： サマースクール

氏名： 川本善之

所属・職名： 地域連携教育センター 副センター長

2016（平成 28）年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC+）からスタートした「サマースクール」は、現在、ぎふCOC+事業推進コンソーシアムに参画している 5 大学の共通プログラムとして年 1 回実施しており、地域や地元企業の課題を設定し、他大学の学生と共に実際の課題に対して提案を行うことにより、自身の能力を磨くと同時に将来のキャリアの選択肢を広げることを目的としている。

地域創成メディアーター「動く」の活動の一つではあるが、「サマースクール」とは別に「動く」の活動に参加すれば、「学ぶ」キャリア教育科目およびリベラルアーツ教育科目の 1 単位に読み替え可能としている。

【サマースクール 2024 in 各務原 ～航空宇宙のまち各務原市のイメージ戦略を考える～】

◆日程： 8 月 28 日（水）、29 日（木）、9 月 4 日（水）

◆プログラム

・8/28 現地見学（各務原市）

共通見学先：岐阜かかみがはら航空宇宙博物館、川崎重工業株式会社岐阜工場

A コース：榎本ビーエー株式会社、B コース：ウイングフィールド株式会社

・8/29 マーケティングに関するレクチャー、企業インタビュー、グループワーク

・9/4 成果発表会（各務原市産業文化センター）

◆参加人数（5 大学合計）： 20 人（本学 4 人※）

※本学の内訳：生命健康科学部 1 人、人文学部 1 人、理工学部 1 人、経営情報学部 1 人

男子 3 人・女子 1 人、2 年生 2 人・3 年生 2 人

◆受賞チーム

・各務原市長賞：チーム” みっばらさん”「航空宇宙のまちで推し活ツアー」

アンケート結果より、各務原市や航空宇宙産業についてのレクチャーや他大学の学生とのグループワークなど、プログラム全体について満足度の高い結果であった。



企業見学



グループワーク



成果発表

全体

2024 年度「動く」活動報告

活動名称： 小牧市 東部地域でつながり、やってみようプロジェクト

氏名： 出口 良太

所属・職名： 国際・地域推進部 地域連携課長

<プロジェクト概要>

「東部地域でつながり、やってみようプロジェクト」は、小牧市東部地域の将来像“人がつながり、支え合い、チャレンジし続けるまち”～豊かな自然、快適な住環境と多様な産業が共存するまちづくり～の実現をめざした取組で、2022 年より実施されている。

今年度は、歴史地理学科の学生 1 名がプロジェクトに参加した。ワークショップやイベント等において、自身の知見を活かすとともに、他の参加者をはじめ自治体や地域住民の方々との交流を通じて様々な学びを得る貴重な機会となった。

<活動実績>

◆5 月 12 日：第 2 回ワークショップ（東部市民センター／参加者 8 名）

東部地域を取り巻く現状および課題の把握、また参加者が東部地域で取り組みたいアイデアの共有を行った。

◆6 月 22 日：キックオフミーティング

『子どもマルシェ』×『みんなの居場所』×『空き家活用』を仮テーマとしたグループによるキックオフミーティングを行った。

◆8 月 24 日：グループミーティング

活動方針を『アート・歴史・文化』をテーマに居場所や交流づくりを行うことに決まり、小牧市大草についての歴史を学ぶフィールドワークを担当することとなった。

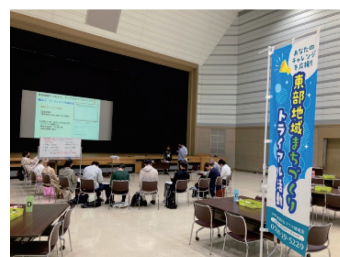
◆10 月 14 日：プレイベント

小牧市大草の歴史を学ぶフィールドワークの事前準備を行い、11 月 23 日のイベントに向けたルート設定を行った。

◆11 月 23 日：『リユースバスケット』（おおくさの家／約 150 名）

小牧市大草のまち探検をしながら、歴史について学ぶフィールドワークを実施した。参加者の状況に合わせて、ルートを変更するなど臨機応変に対応しながら、大草の竹やぶや祠などを巡り、祠に祀られている人の紹介などを参加者へ説明した。

◆1 月 26 日：東部地域トライアル活動実施報告会



報酬型インターンシップ事業（2013 年度～2023 年度）についての報告

学生部

1. はじめに

報酬型インターンシップ事業は、アルバイトと学修を両立させる環境を整備することを目的として、春日井商工会議所と連携をし、制度を構築した。2013 年度に開始し、延べ 598 名の学生が参加したが、参加者数は、2019 年度以降、減少し続け、2023 年度は 21 名に留まった。こうした状況に加え、「インターンシップ」と称して実施する場合の基準が改正されたこと、事業開始から 10 年以上が経過し、事業開始当初の目的の達成をし、一定の成果を得たことなどから、春日井商工会議所と協議を重ね、本事業を 2023 年度にて終了することになった。

本報告書では、2013 年度から 2023 年度までの本事業の活動状況を報告する。

2. 報酬型インターンシップ事業の成り立ち

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に社会の現場で学生を教育するインターンシップ型の就労システムの構築を目的とした。

○歴史

2012 年 10 月 山下学長（当時）が学生支援戦略室会議にてアルバイトと学修を両立させる環境を整備・充実させることが必要であると問題提起をした。その後春日井商工会議所松尾会頭（当時）、山田専務理事（当時）と面会し、春日井商工会議所の仲介により春日井市内に学生アルバイト先を用意する取り組みを検討していくことを決定した。

学生支援戦略室の具体的な活動の 1 つとして中部大学と春日井商工会議所合同専門部会（仮称）を立ち上げ、次の①～⑥の通り方針を整理した。

- ① 全ての提案と判断は学生支援の立場から行い、経済と学修の両立を追求すること
- ② このアルバイトは単なる労働ではなくインターンシップの意味も持ち、雇い主には学外教授としての教育指導を依頼するためにその内容を詰めること。
- ③ 春日井商工会議所と意思疎通を図り、多くのアルバイト先を開拓すること。
- ④ 学生の要望や期待を正しく聞くと共に必要な社会的な責任感を果たすよう指導すること。
- ⑤ アルバイトの内容や指導等について具体的に検討し、その結果を雇い主や商工会議所に要望し、実施を促すこと。
- ⑥ 事業の点検評価項目も検討し、学生と雇い主に周知し、仕事を通しての人間形成を促すこと。

これらの方針を踏まえて協議を重ね、2013 年 3 月 25 日 『春日井商工会議所と中部大学との連携による「地育地活による人材育成プログラム」』という協定の締結式を開催し、協定を締結した。

3. 制度について

授業期間中は、長期型コース、多業種型コース、長期休業中は、長期休業中特別コースを設けた。学生は各コースの募集開始前に開催する説明会に参加し、制度を理解した上で、自身の希望に基づき応募した。

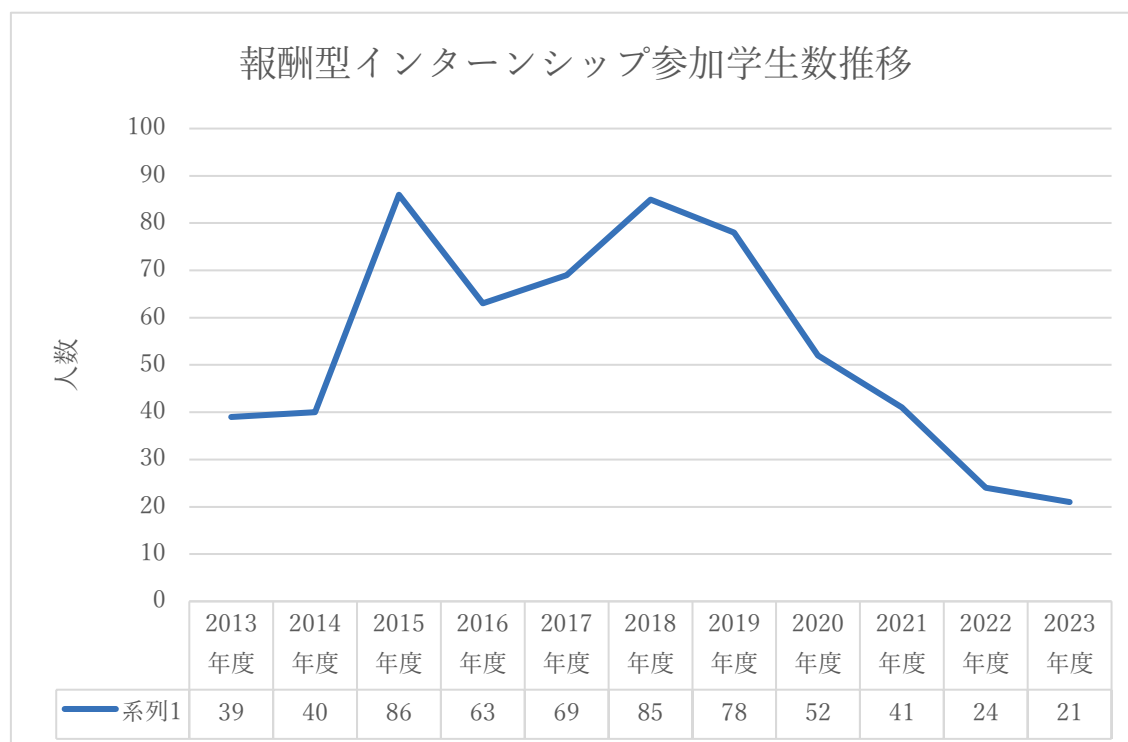


活動終了後には、長期型コース・多業種型コースは1ポイント、長期休業中特別コースは0.7ポイントが付与され、2ポイント以上の取得で修了証書が授与された。

4. 参加学生数、登録企業数等の推移

参加学生数、登録企業数等の推移は以下の通り。

参加学生数は、ピーク時には、年度で最大延べ80名以上の参加があった。2020年度以降は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、参加者は減少したが、春日井商工会議所や受入企業の協力により、事業は継続した。しかし、2023年に新型コロナの感染症法上の位置付けが5類に引き下げられてからも、参加者は増加しなかった。



参加学生数、登録企業数等の推移

年度	参加学生数	説明会 出席学生数	登録企業数	修了証書 授与学生数
2013 年度	39	221	15	2
2014 年度	40	226	32	1
2015 年度	86	282	48	6
2016 年度	63	152	67	3
2017 年度	69	225	78	6
2018 年度	85	286	78	8
2019 年度	78	268	79	2
2020 年度	52	325	78	4
2021 年度	41	325	85	3
2022 年度	24	306	82	0
2023 年度	21	209	75	1
合計	598	2,825		36

登録企業数は、2017 年度以降は、80 社程で推移した。また、「修了証書」の授与学生数は、合計 36 名となった。



2021 年度修了生



2022 年度修了生

5. 事業の終了について

2023 年度より、参加学生数の減少などに伴い、春日井商工会議所と事業の見直しや終了について、協議を重ねたが、以下の点を鑑み、双方が合意の上、事業を終了することとなった。

○終了の背景

- ・文部科学省が推進する「地（知）の拠点整備事業」（COC 事業）として 2013 年度に開始したが、COC 事業としては 2017 年度で終了しており、以後は予算がついていない。
- ・2023 年度より、大学生等のインターンシップの取扱い（文部科学省・厚生労働省・経済産業省）が変更となり、「インターンシップ」と称して実施する場合の基準が改正された。（実施時期要件「卒業・修了前年度以降の長期休暇期間中」等）

2 活動報告

- ・説明会に出席しても実際には応募しない学生が多い。その理由の大半は、勤務する会社の立地の問題であり、車がないと通勤が難しい。
- ・金銭面や人員確保などの点で企業側の負担が大きく、実施するメリットが少ない企業もある。
- ・アルバイト先の開拓という当初の目的は達成している。現在は、学内インターンシップや学内アルバイトも多くある。

春日井商工会議所では、事業終了について、2024 年 1 月 11 日開催の正副会頭会議、2 月 19 日開催の雇用促進人材育成委員会において承認された。

また、本学では、事業終了について、2 月 27 日開催の中部大学学外特命教授の会、3 月 7 日開催の学生委員会、3 月 19 日開催の大学協議会において承認された。

春日井商工会議所、本学において終了に関する各手続きが完了し、事業終了について、双方が申し入れを行い、2023 年度末での報酬型インターンシップ事業の終了（春日井商工会議所と中部大学との連携による「知育地活による人材育成プログラム～報酬型インターンシップ～」に関する協定書の廃止）が決定した。

事業終了後の対応として、春日井商工会議所より、報酬型インターンシップ受入企業に「正課科目インターンシップ」の案内を行った。受入を希望する企業にはキャリア支援課にて正課科目インターンシップの説明が行われた。

6. おわりに

本事業は、春日井商工会議所や受入企業など、多くの方々のご協力によって行われ、延べ 598 名の学生が参加し、多くの学生の自己成長につながった。ご協力いただいた方々に、改めて厚く御礼を申し上げる。

2018 年 3 月には日本商工会議所の総会において、本事業は他の模範となる事業として表彰を受け高く評価されている。地域の関係機関が連携した誇らしい教育システムと言える。制度は終了となるが、各機関とはこれまでの成果を活かし、今後もさまざまな場面で連携していきたいと考える。

以上

(3) その他プロジェクト活動報告

- ① PBLゼミ
- ② COC+参加大学共通プログラム
「サマースクール」

① PBLゼミ



自分**新**発見の2日間

Project Based Learning

PBL
ゼミ

2024

グループワークを通して
『自分らしさ』が
見えてくる!!



＼ こんな人におすすめ /



自分の
持ち味を
知りたい!



コミュニケー
ションが
不安...



リーダー
シップを
発揮したい!



人見知りで
グループワーク
が苦手...



色々な事に
チャレンジ
したい!

★2日間連続プログラム

9/17日(火) 18日(水)

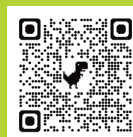
9:30~17:30 (両日とも) 全学部生対象

5134講義室(51号館3階) 定員50名(定員になり次第終了)

参加
無料

※PBLゼミは
地域創成メディアター「学ぶ」の
キャリア教育 / リベラル
アーツ教育科目に
読み替え可能 (単位認定無し)

締切:
9月5日(木)
お申込みは
webから↓



中部大学

中部大学 地域連携教育センター (キャンパスプラザ2階)

E-mail: chiiki@office.chubu.ac.jp 担当: 出口・羽山・上甲 (TEL. 0568-51-9872)

学習テーマ

自分が何かを
学ぶときのス
タイルを探求
する

コミュニケー
ションについ
て体験的に
学ぶ

他の価値観に
ついて探求
する

課題解決のプ
ロセスを体験
する

<参考> 2023年度プログラム

1日目
①オリエンテーション
あいさつ
本ゼミの狙い
②個人ワーク
・実習「あなたの学習スタイル」
解説
③グループワーク
・グルーピング
・実習「記者会見」
・ふりかえり
昼食
④グループワーク
・実習「総当たりインタビュー」
・ふりかえり
⑤グループワーク
・実習「コンセンサスを求めて」
・実習のふりかえり
⑥本日のまとめ

2日目
⑦個人ワーク・グループワーク
・実習「価値観について」
・ふりかえり
⑧個人ワーク・グループワーク
・実習「ライフポジションについて」
・相互検討&解説
⑨グループワーク
・実習「対人コミュニケーションについて」
・グループ検討
・解説
昼食
⑩グループワーク
・実習「課題解決実習」
・ふりかえり
⑪個人ワーク・グループワーク
・実習「イメージ交換」
⑫PBLゼミ2023のまとめ
・PBLゼミ2023のまとめ



中部大学

中部大学地域連携教育センター(キャンパスプラザ2階)
<https://www.chubu.ac.jp/community-extension/>
 E-Mail: chiiki@office.chubu.ac.jp

PBLゼミ

「PBLゼミ」は、学生自身が自分の持ち味を発揮して地域や周囲に関わっていくための力を身につけることを目指した体験型学習として年1回実施しており、地域創成メディエーター「学ぶ」のキャリア教育科目あるいはリベラルアーツ教育科目の1単位に読み替え可能としている。

今年度は以下の通り実施した。

日程：9月17日（火）、18日（水） 9：30-17：30 2日間プログラム 5134 講義室

修了者数：33人（申込人数40人）

修了者内訳：経営情報学部7人、工学部1人、応用生物学部11人、人文学部2人、

生命健康科学部8人、国際関係学部1人、現代教育学部3人

男子15人、女子18人、1年生8人、2年生15人、3年生8人、4年生2人

学生自らが学部や学年、学習スタイルが異なるようにメンバーを決めていくチームづくりから始まり、自己紹介やグループワークを経て、それぞれのチームがまとまっていった。プログラム終盤の「イメージ交換」では、メンバーの持ち味やその活かし方についてのアドバイスなどをプレゼントカードとして贈り合い、他者から見た自分を知ることによって自分自身に対して新しい発見を感じられたようだった。終了後のアンケート集計から、参加者の87%が「とても満足した」と回答しており、学生にとって大変有意義なプログラムであると言える。

今年度は、地域創成メディエーター資格取得希望者以外にも意識して募集活動をした結果、昨年度より申込人数が14人増えた。今後も全学的に周知し、PBLゼミの参加者を増やしていきたい。



グループワーク



インタビュー



イメージ交換



閉会あいさつ（戸田センター長）

中部大学 御中

PBL ゼミ 2024
アンケート集計結果
報告書

Learning Value 株式会社 ラーニングバリュー

2024 年 9 月
株式会社ラーニングバリュー

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計



目次

プログラム概要	3
---------------	---

今回のプログラムに関するアンケート

【受講前アンケート】	4
------------------	---

Q1.あなたはこのプログラムに期待していますか？	5
--------------------------------	---

Q2.PBL ゼミに参加を決めた理由をお聞かせください	7
-----------------------------------	---

Q3.それぞれの力や姿勢について、現在の自分にどの程度身についていると思いますか？	8
--	---

【受講後アンケート】	9
------------------	---

Q1.このプログラムに満足しましたか？	10
---------------------------	----

Q2.このプログラムを受け、自分自身に対して、新たな発見がありましたか？	13
--	----

Q3.このプログラムを受け、「相手のことを知る」ことに変化がありましたか？	15
---	----

Q4.このプログラムで、グループのメンバーに、自分のことをわかってもらえましたか？	17
---	----

Q5.このプログラムを受け、授業への取り組み姿勢に変化がおきそうですか？	19
--	----

Q6.このプログラムを受け、今後の学生生活に変化がおきそうですか？	21
---	----

Q7.それぞれの力や姿勢について、現在の自分にどの程度身についていると思いますか？	23
--	----

Q8.今回のようなプログラムはどんなタイミングで受講するのが良いと思いますか？	24
---	----

Q9.このプログラムの講師について感じたことを自由にお書きください	25
---	----

Q10.この授業について感じたこと、気づいた点などを自由にお書きください	26
--	----

【受講前・後比較】	27
-----------------	----

Q.それぞれの力や姿勢について、現在の自分にどの程度身についていると思いますか？	28
---	----

* アンケートのフリーコメントについては、入力されたままを再現しています

プログラム概要

■受講対象者 受講希望者 33 名

■実施日時 2024 年 9 月 17 日－18 日（両日 9:30～17:30）

■アンケート回答者数

受講前／30 名（2 名回答無し、1 名は午後から参加にて）

受講後／31 名（2 名回答無し）

■プログラム内容

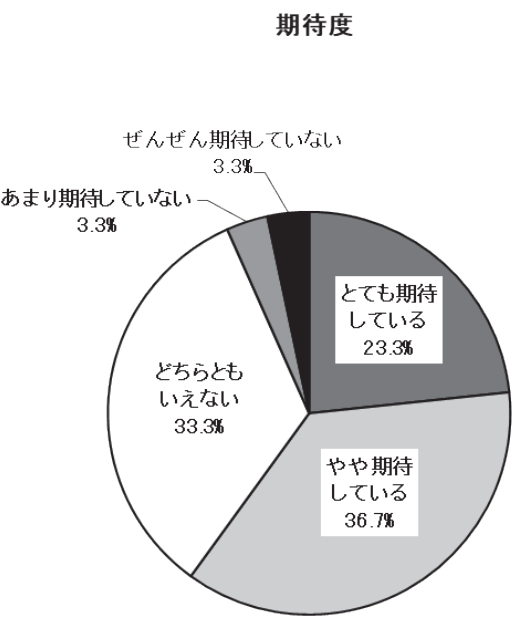
	1日目		2日目
	①オリエンテーション あいさつ 本ゼミの狙い ②個人ワーク ・実習「あなたの学習スタイル」 解説 ③グループワーク ・グループビンゴ ・実習「記者会見」 ・ふりかえり		⑦個人ワーク・グループワーク ・実習「価値観について」 ・ふりかえり ⑧個人ワーク・グループワーク ・実習「ライフポジションについて」 ・相互検討＆解説 ⑨グループワーク ・実習「対人コミュニケーションについて」 ・グループ検討 ・解説
	昼食		昼食
	④グループワーク ・実習「総当たりインタビュー」 ・ふりかえり ⑤グループワーク ・実習「コンセンサスを求めて」 ・実習のふりかえり ⑥本日のまとめ		⑩グループワーク ・実習「課題解決実習」 ・ふりかえり ⑪個人ワーク・グループワーク ・実習「イメージ交換」 ⑫PBLゼミ2023のまとめ ・PBLゼミ2023のまとめ

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計



受講前アンケート

Q1.あなたはこのプログラムに期待していますか？



期待度		とても期待している	やや期待している	どちらともいえない	あまり期待していない	ぜんぜん期待していない	無回答
全体	30	7	11	10	1	1	0
		23.3	36.7	33.3	3.3	3.3	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／その理由

【とても期待している】

コミュニケーション力を高めたい
去年参加した人がよかったと言っていたから
自分の可能性が広がるのが楽しみだから。
自分への理解を深めれる
自分を知るいいきっかけになると思ったから
色々な人と交流できるのは楽しいから
多くの人が参加していて交流ができそうだから

【やや期待している】

いろんな学部の人たちと関わっているような価値観を手に入れられると思ったから。
学科の先生からの勧め
採用試験の面接の準備になると考えているため。
資格が取れるため
資格を取れると思うから
自己理解を深めるため
自分について深く知ることができるので、これから大学生活を過ごす上でとても役に立つと思ったから。
初めてゼミに参加するため
色々な人と関わるから
新しい自分を発見できそうだったから
内容に少し興味がわいたから

【どちらともいえない】

あまり何をやるか分かっていないため
グループで話し合うのが苦手
まだわからないから
よくわからないから
一年生でこのゼミのことについてそんな知らないから
何をするかをいまいよくわかっていない。
何事もやってみないとわからないから。
今回が初めてだから
自己理解を試みた事が少ないため
地域共生のため

【あまり期待していない】

友達に誘われたから

【ぜんぜん期待していない】

資格取得のたまに必要なものだから

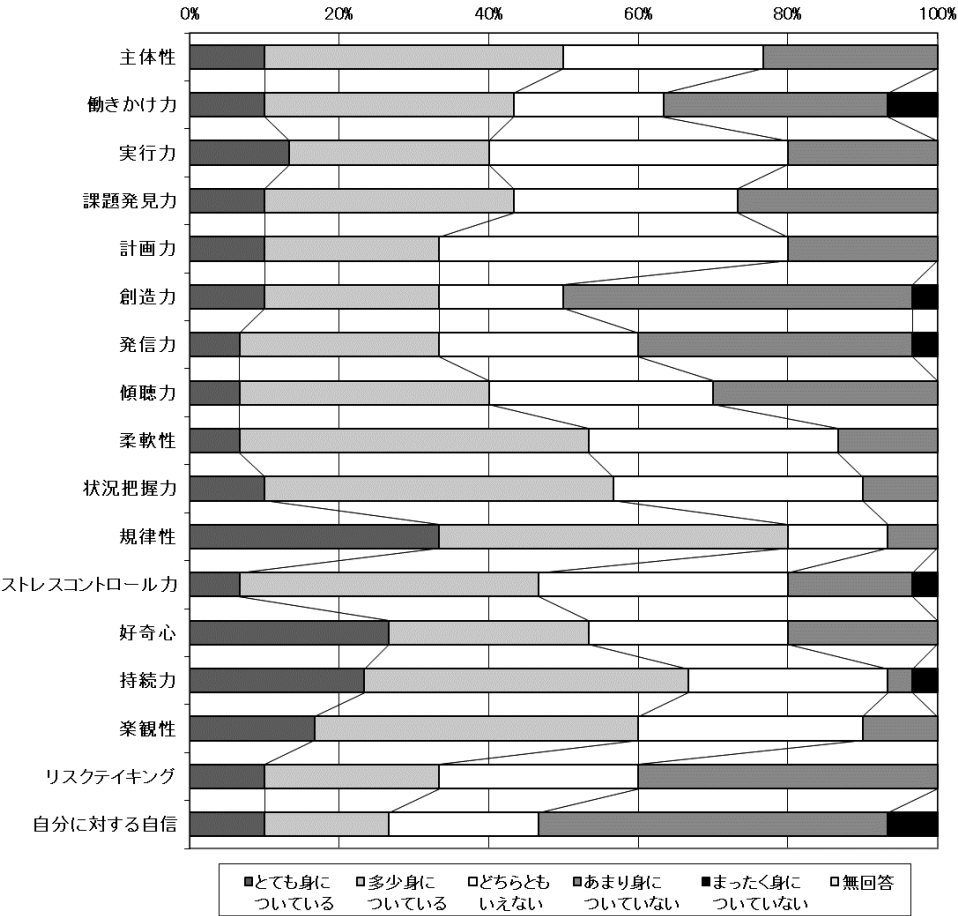
Q2.PBL ゼミに参加を決めた理由をお聞かせください

フリーコメント

ガクチカ
キャンパスプラザの宣伝をみて面白そうと思ったから
グループワークが好きだから。
コミュニケーション能力をあげるため
コミュニケーション能力をつけたかったから
コミュニケーション能力を上げたいと思ったから
コミュニケーション力を養うため
せっかく取得が受けられる機会だと思ったから
プログラムを見て興味があったから
夏休みに自己分析したいなと思ったから
学科の先生からの勧め
広告が目止まったから
資格が取れるため
資格が取得できるため。
資格取得
資格取得のため
自主活動の一環
自分がどんな人なのかが分かっていないためこのゼミを通して自分を知って就職活動に生かしていけたらいいと思った。
自分の可能性を広げるというスローガンに惹かれた
先生に誘われたから
前年に参加した人に話をきいて決めた
地域強制メディエーターの資格要件を満たすため
地域創成メディエーターの資格をとるため
地域創成メディエーターの資格取得のため
地域創生メディエーター
地域創生メディエーターの資格を取ろうと思ったから
地域創生メディエーターを取得したいため。
友人の誘い
友達に参加するので一緒に参加してみようと思ったから。
友達に誘われたから

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

Q3それぞれの力や姿勢について、現在の自分どの程度身についていると思いますか？



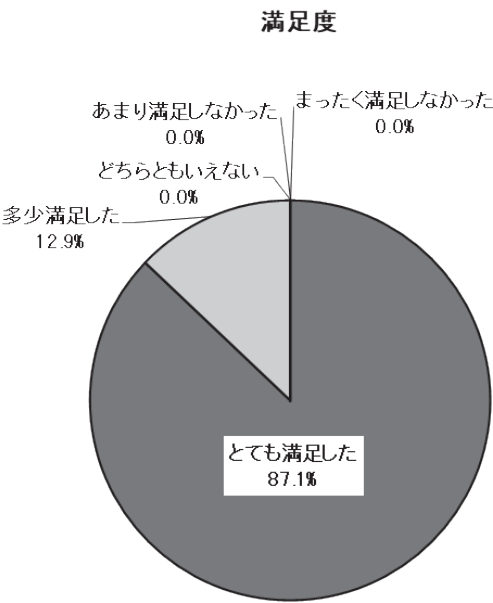
	サンプル数	とても身についている	多少身についている	どちらともいえない	あまり身についていない	まったく身についていない	無回答
主体性	30	10.0	40.0	26.7	23.3	0.0	0.0
働きかけ力	30	10.0	33.3	20.0	30.0	6.7	0.0
実行力	30	13.3	26.7	40.0	20.0	0.0	0.0
課題発見力	30	10.0	33.3	30.0	26.7	0.0	0.0
計画力	30	10.0	23.3	46.7	20.0	0.0	0.0
創造力	30	10.0	23.3	16.7	46.7	3.3	0.0
発信力	30	6.7	26.7	26.7	36.7	3.3	0.0
傾聴力	30	6.7	33.3	30.0	30.0	0.0	0.0
柔軟性	30	6.7	46.7	33.3	13.3	0.0	0.0
状況把握力	30	10.0	46.7	33.3	10.0	0.0	0.0
規律性	30	33.3	46.7	13.3	6.7	0.0	0.0
ストレスコントロール力	30	6.7	40.0	33.3	16.7	3.3	0.0
好奇心	30	26.7	26.7	26.7	20.0	0.0	0.0
持続力	30	23.3	43.3	26.7	3.3	3.3	0.0
楽観性	30	16.7	43.3	30.0	10.0	0.0	0.0
リスクテイキング	30	10.0	23.3	26.7	40.0	0.0	0.0
自分に対する自信	30	10.0	16.7	20.0	46.7	6.7	0.0



受講後アンケート

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

Q1. このプログラムに満足しましたか？



満足度		とても満足した	多少満足した	どちらともいえない	あまり満足しなかった	まったく満足しなかった	無回答
全体	31	27	4	0	0	0	0
		87.1	12.9	0.0	0.0	0.0	0.0

(上段:人, 下段:%)

フリーコメント／それはどうしてですか？

【とても満足した】

グループみんな初対面だったけど楽しく話せていい経験ができたから
コミュニケーション能力が上がったと感じたからです
コミュニケーション能力があがった
コミュニケーション能力が上がったから、新しく喋れるようになった人ができたから。
楽しかった、他の人と沢山関われた
楽しかったから
楽しんで行うことが出来たから
後輩の友達ができた。
交流関係や、コミュニケーション能力が上がりました
今回のプログラムで学べたことも少なくないから
最初は、初対面で学部、学年が違う人たちとグループワークをやるのはどうだろうと不安がありましたが、誰一人足を引っ張らずみんな意見を出し合ってグループの団結力というのが見られた。
私はサークルに入っていないので他学部他学年の人と関わることがないけど、この PBL ゼミで関わることができて6人全員が違う価値観や考えを持ってその違いを楽しむことができたから。
視野が広くなりました
自分のコミュカを一段上に上がった気がするから。
初めて話す人で最初は本当に不安でいっぱいでした。2日間終わってから振り返るとほんとに楽しくていい思い出になりました。 喋ることでどんな人なのか理解することもできるため、コミュニケーションは大切であると感じました。 このような機会がないと他学科や後輩と話す機会がないのでとてもいい経験になりました。 ありがとうございました。
初対面で緊張したけれど話し合いのテーマが簡単なものや協力して一つのものを決めるテーマだったため話し合いやすかったから。また、自分に話す自信がついたから。
初対面のメンバーと打ち解けることができて、自分を出すことができたから。
初対面の人と PBL ゼミを通してたくさんコミュニケーションをとることができたから。
新しい自分を知ることができ、新しい友達もできてとても楽しくできたから。
人との交流がとても楽しかった
他学科の友人を作る事ができたし、コミュニケーション能力も身につけることができた
他学部他学年の方と交流して、価値観の違いを学ぶことができた。また人としての良さを感じることができ、新たな目標を持てたから。
仲間とたくさんお話できたから
友だちできたから
友達が出来たから

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

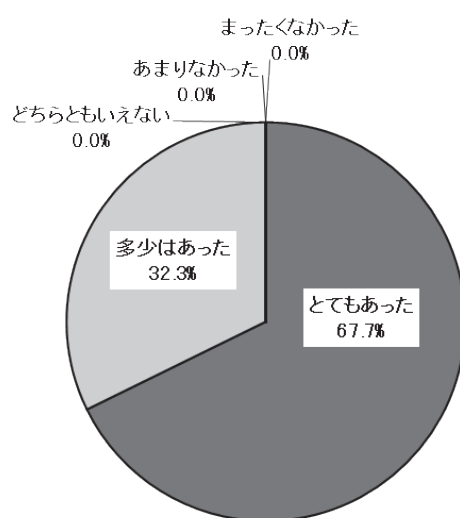


【多少満足した】

休憩が楽しかった
休憩が楽しかった
最初の時から良くなったから
初対面の人とたくさん話せて良い経験になった

Q2. このプログラムを受け、自分自身に対して、新たな発見がありましたか？

自分自身への新たな発見



自分自身への新たな発見		とてもあった	多少はあった	どちらともいえない	あまりなかった	まったくなかった	無回答
全体	31	21	10	0	0	0	0
		67.7	32.3	0.0	0.0	0.0	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／それはどのような点ですか？

【とてもあった】

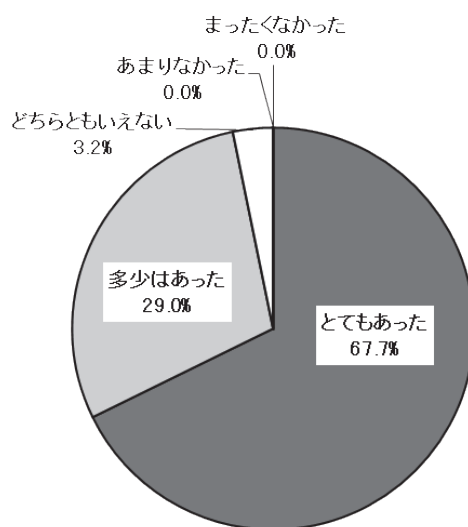
コミュニケーションにおいて自分も初対面の人の中で発言できたり、積極的に取り組むことができるのだと気づくことができた。
リーダーに向いていた点です
意見を引き出す力がある点
意見を聞くのも大切だから自分の意見も譲らずいうことは大切である。 話を途中で遮らない！ 後輩との関わり方！
価値観の違いからの意見の一致が意外と楽に行ける
私自身が初対面の人と話すのが苦手ではありましたが、ここで出会った人達は優しく接して下さって、自分も話がしやすいと感じました。
自己主張をもっとしてもいいということ
自分なんて、、とってしまったたりすることもあるけど、他の人が自分を受け入れてくれるような環境では自分を出せる 自信がない
自分にもいいところはあると思えた。
自分の意見を押し通さないこと
自分の性格
自分の目指したい性格が定まった。
自分は内気だと思っていたけど話してて楽しかったと言ってくれて嬉しかったです。
集団の中でも自分の意見が言えたこと。
初対面の人でも話せた点
人の話を引き出す能力の需要
聞く力があることを人に聞かされて気付くことができた
話しやすいって思ってもらえた点。
話を積極的にする点

【多少はあった】

グループワークでの自身の行動指針
すこし人見知り克服
意外と喋れるじゃん
思ったよりしっかりしているように見えるのかなって、
自分の客観的な面が知れた
人と話すことは得意と気づいた
他者から見た自分の見え方を最後に知ることができたから。
多くの仲間と関わることで知識
発言の仕方、人の見方。

Q3. このプログラムを受け、「相手のことを知る」ことに変化がありましたか？

他者理解に変化はあったか



他者理解に変化		とてもあった	多少はあった	どちらともいえない	あまりなかった	まったくなかった	無回答
全体	31	21	9	1	0	0	0
		67.7	29.0	3.2	0.0	0.0	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／それはどのような点ですか？

【とてもあった】

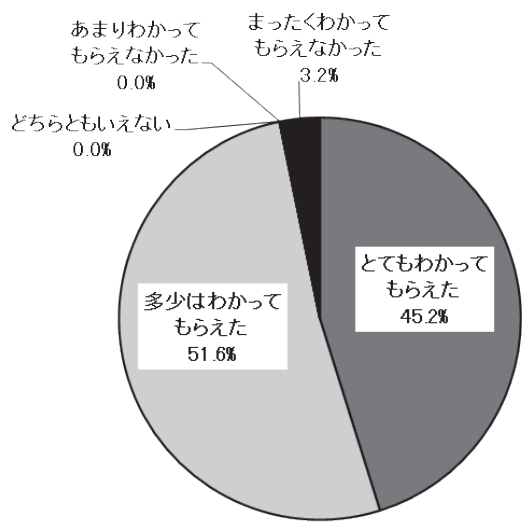
みんないろいろな価値観を持っていること
より相手の意見を聞こうと思えた。
価値観を知って相手の理解を深めれた
結構自分の意見に自信を持っていて伝える能力もあるため今まではほとんど自分の意見になってしまうこと多かったが話すより聴くことに注力すると自分が納得できる形で他の人の意見を選ぶことができた。
見た目や最初の印象で相手の感じを確定するのではなく、話すことで、色々な一面を知ることができ、仲良くすることができた！
考えが違うのは当たり前ですが価値も違っても仲良くなれるという考えになりました
考え方の違う人とも話し合う事で相手の事を理解することができた点
自分とは違った価値観の人と関わることで様々な考え方あるのだと知ることができた。
初めはこんな人かなと思っていたのが、話していくうちにこんな面もあるのかと新たな発見がいくつもあった。
初対面の方だったため、どのように接するか悩みましたが、とても良い経験になりました
色々な人がいて、話を自分から振ることによって知れる方と聴くことに注力すれば知れる方がいた
相手のことを知るための質問をかんがえれたから。
相手を知ることでより話しが進みやすいと思った
総当たりインタビューでは、緊張もありましたが、質問していくことに相手も楽しく話してくださって、楽しく会話が出来たと思います。
総当たり面接をしたことで、一対一で詳しく知ることができたから。
第一印象だけではなく本来のその人について考えながら話す、聴けた
話していくことで色々な話が聞けてとても楽しかったのもっと色々な人と話して知っていきたいなと思いました。

【多少はあった】

一対一で話すというのは、少し疲れるが案外話し続けることができるのだとわかった。
価値観や話し方には人それぞれあるということ。
気づかないことに気づける能力がついた
積極的に人と話そうと思えるようになった。
相手の話を聞き、整理することの大切さを学べた
仲良くなれた
明るくて話しやすかったりや、きりかえとか
話し合い

Q4.このプログラムで、グループのメンバーに自分のことをわかってもらえましたか？

自分のことをわかってもらえたか



自分のことをわかってもらえたか		とてもわかってもらえた	多少はわかってもらえた	どちらともいえない	あまりわかってもらえなかった	まったくわかってもらえなかった	無回答
全体	31	14	16	0	0	1	0
		45.2	51.6	0.0	0.0	3.2	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／それはどのような点ですか？

【とてもわかってもらえた】

それぞれの感想で、自分の長所を多く言ってくれて分かってもらえたなと感じることができた。
楽しい
空いた時間の会話
最後の他人評価で自分が思ってる性格通りのことを書いてくれた。
自分の持ち味
自分より後輩の人たちが多く、グループが盛り上がるように、話しやすい環境作りをできたから
手紙の内容を聞くと自分の弱点を見つけてくださって、アドバイスを貰うことが出来て、自分を見つめ直すことができました。
性格とか
明るく率先的と言って貰えた点です。
話すのが好きというところ
話を聞く時に目を見る点

【多少はわかってもらえた】

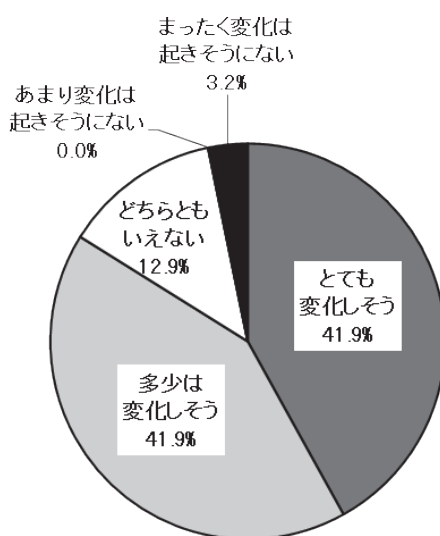
お手紙で色々書いてあった点です
こだわりとか、好きなものとか
リーダーシップをとりたがる点
最後のメッセージカードで自分の思ってる自分と同じところがあったから。
最後の手紙で書いてもらった内容が自分が持っている自分のイメージと似ていた。
持ち味とか教えてもらえた
自分の性格など
趣味
少し変わった考え方をすることがある点
心の中では考えている点
独特な視点から現実感のある指摘をしていた事
理論的に話すと言見を聞いて貰えた

【まったくわかってもらえなかった】

自分は猫を被ってしまうため、演技をしてしまった

Q 5. このプログラムを受け、授業への取り組み姿勢に変化がおきそうですか？

授業への取り組み姿勢の変化



授業への取り組み姿勢の変化		とても変化する	多少は変化する	どちらともいえない	あまり変化は起きそうにない	まったく変化は起きそうにない	無回答
全体	31	13	13	4	0	1	0
		41.9	41.9	12.9	0.0	3.2	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／どんな変化ですか？

【とても変化しそう】

グループでより積極的になりそうです
グループワークで話を切り出せそうです
より積極的にグループワークに参加しようと思う
意外と喋れるじゃん
私は、グループ活動で自分の意見を言える方では無いので、今回のゼミでは、自分の意見を言うことで他人が反応してくれることが分かりました。
積極的にがんばろー
積極的にグループワークを行うことができそう
積極的にコミュニケーションを取ろうと思いました。
話すことは大切！

【多少は変化しそう】

グループワークの時に前よりも積極的に取り組むことができそう。
グループワークに対する苦手意識を減らすことができた
コミュニケーションを大切にしたいと思った。
もっと自分の考えを他の人に伝えようとする。
学習スタイルの仕方
自己主張頑張ってみようと思う
自分と向き合うこと
授業は一方通行だけど、もっと意見を交換する授業が増えたら楽しいと思った。
色々な視点で物事を見ること
人との繋がりの大切さを再確認でき、色々な人と話して自分の経験にする。
人見知り克服

【どちらともいえない】

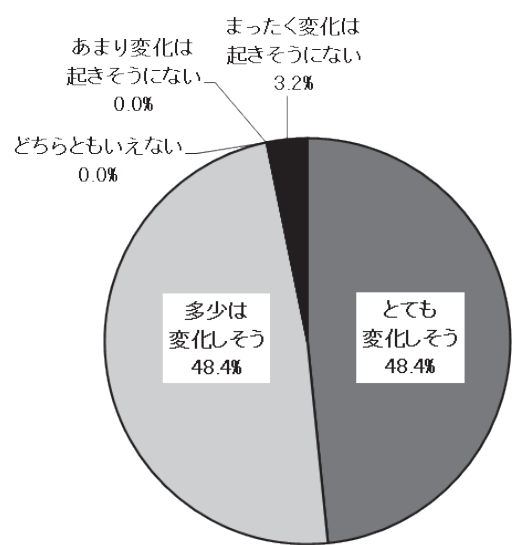
グループワークの授業についてはうまく取り組めるようになりそう
これ以上高くないと思った。
講義内容によるから。
遅刻せず、人の意見を聞きながら講義を受講する姿勢

【まったく変化は起きそうにない】

学びと人の関わりは関係ないから

Q6. このプログラムを受け、今後の学生生活に変化がおきそうですか？

今後の学生生活の変化



今後の学生生活の変化		とても変化しそう	多少は変化しそう	どちらともいえない	あまり変化は起きそうにない	まったく変化は起きそうにない	無回答
全体	31	15	15	0	0	1	0
		48.4	48.4	0.0	0.0	3.2	0.0

(上段:人, 下段:%)

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

フリーコメント／どんな変化ですか？

【とても変化しそう】

もっといろんな人と話してみたいと思った。
もっと色々な人と関わっていきたいと思います。
学部外に学年が違う友だちができたから
色々な人と会話ができるようになりそう
色々な人とこれから触れ合っていきたいと思いました。
人との話し方が変化しそう
人と話すことがすきになった
人と話すことが苦手だったのですが、話すことも楽しいと感じることが出来た。
他学部の友達が増えそう
友人が増えそうです
友達がたくさんできる
友達増えた

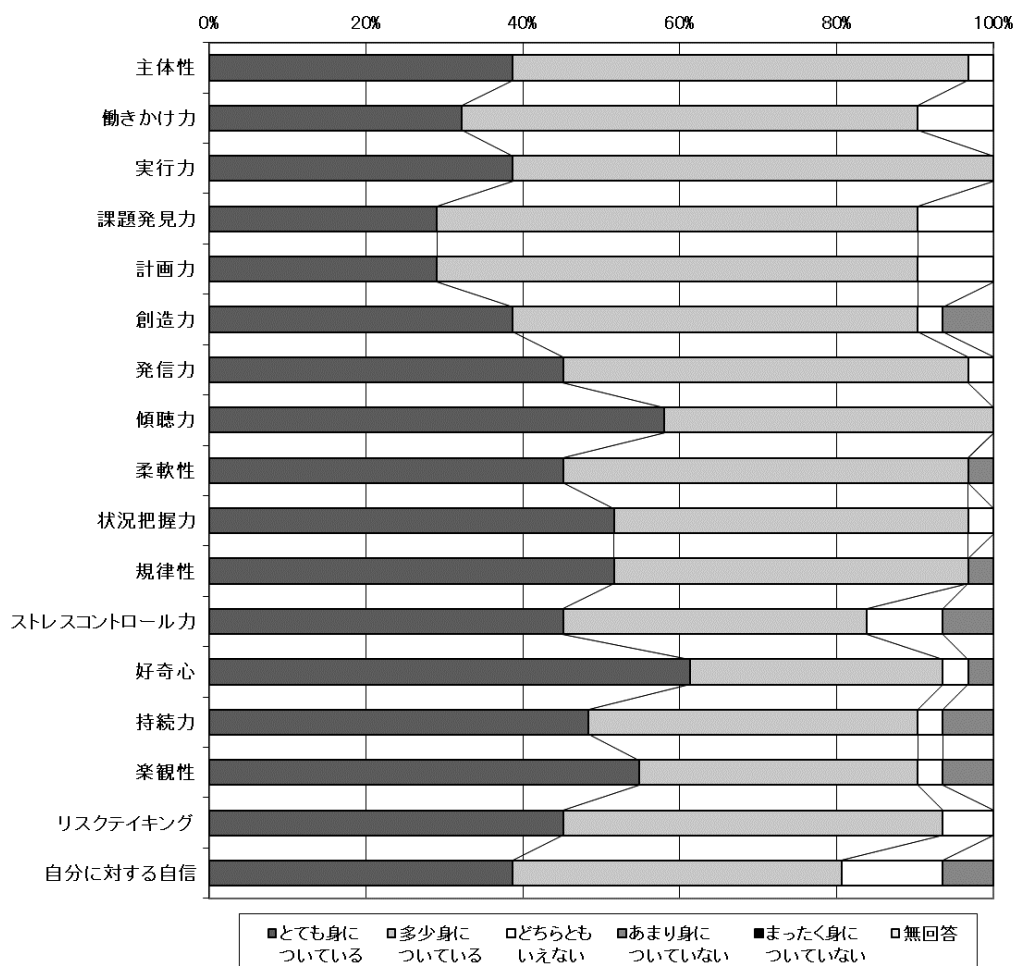
【多少は変化しそう】

まず行動する前に考える
もっと積極的に人と関わろうと思えた。
何を大切にしているか、再確認できた
苦手意識が減った事で少しでも活動的になれると思います
視野を広くする
自分の意見をはっきり言うことを意識したい
自分の性格を受け止めてありのまま発言すること。
就活で必要なスキルを身につけた。
人見知り克服
大学主催のイベントにもっと参加しようかと考えた。
明るく声量あげていきたいなって
目上の人への苦手意識が少し減りそう
話し方とかの変化

【まったく変化は起きそうにない】

私が変わっても、友達が受けてなかったら、関わる際の難しさはそんなに変わらない
--

Q7.それぞれの力や姿勢について、現在の自分どの程度身についていると思いますか？

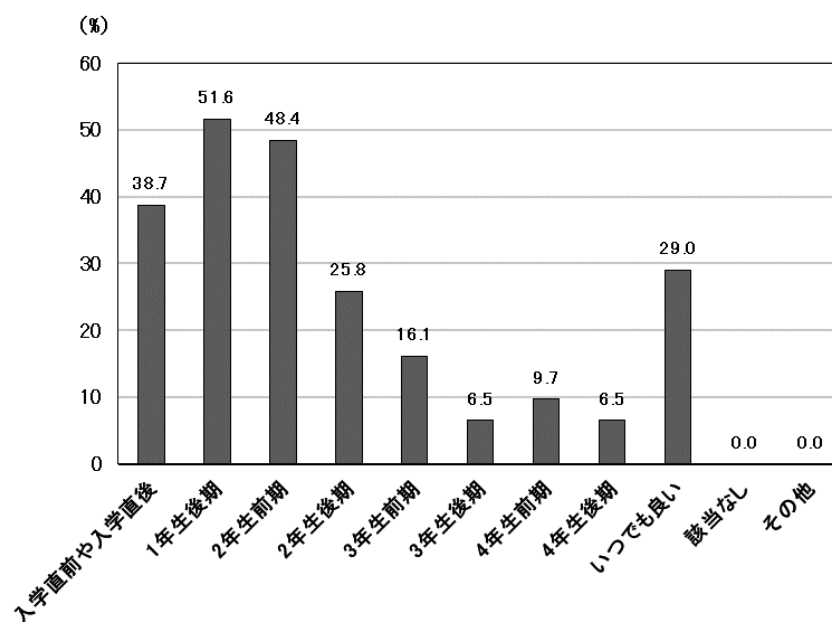


(%)

	サンプル数	とても身についている	多少身についている	どちらともいえない	あまり身についていない	まったく身についていない	無回答
主体性	31	38.7	58.1	3.2	0.0	0.0	0.0
働きかけ力	31	32.3	58.1	9.7	0.0	0.0	0.0
実行力	31	38.7	61.3	0.0	0.0	0.0	0.0
課題発見力	31	29.0	61.3	9.7	0.0	0.0	0.0
計画力	31	29.0	61.3	9.7	0.0	0.0	0.0
創造力	31	38.7	51.6	3.2	6.5	0.0	0.0
発信力	31	45.2	51.6	3.2	0.0	0.0	0.0
傾聴力	31	58.1	41.9	0.0	0.0	0.0	0.0
柔軟性	31	45.2	51.6	0.0	3.2	0.0	0.0
状況把握力	31	51.6	45.2	3.2	0.0	0.0	0.0
規律性	31	51.6	45.2	0.0	3.2	0.0	0.0
ストレスコントロール力	31	45.2	38.7	9.7	6.5	0.0	0.0
好奇心	31	61.3	32.3	3.2	3.2	0.0	0.0
持続力	31	48.4	41.9	3.2	6.5	0.0	0.0
楽観性	31	54.8	35.5	3.2	6.5	0.0	0.0
リスクテイキング	31	45.2	48.4	6.5	0.0	0.0	0.0
自分に対する自信	31	38.7	41.9	12.9	6.5	0.0	0.0

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

Q8. 今回のようなプログラムはどんなタイミングで受講するのが良いと思いますか？
(複数選択可)



受講時期	件数	%
入学直前や入学直後(1年生前期)	12	38.7
1年生後期	16	51.6
2年生前期	15	48.4
2年生後期	8	25.8
3年生前期	5	16.1
3年生後期	2	6.5
4年生前期	3	9.7
4年生後期	2	6.5
いつでも良い	9	29.0
該当なし	0	0.0
その他	0	0.0
サンプル数(%ベース)	31	100.0

Q 9. このプログラムの講師について感じたことを自由にお書きください

フリーコメント(Q1の満足度別)

【とても満足した】

いろんな考えを聞けて面白かった
すごく明るく楽しくやれました
とてもわかりやすかったです
とても楽しく活動ができた。
とても最高でした！
とても優しく楽しくすることができた。
とても話がわかりやすく雰囲気作りがとても上手な方だと思いました。
楽しかったです
楽しく授業を行うことが出来るよう工夫していて話を聞いてとても楽しかった
活動内容や時間について、状況に合わせて計画から変更して下さりありがたかったです。
実習のやる順番が効率よくスキルを身につけれる順番だなと感じた
笑顔が素敵でした
真摯に向き合って進行していたと思います。
先生の話し方が上手でした。優しい先生でよかったです。また受けたいです。
分かりやすい進行で助かった。
優しく、楽しかった。
優しくて話しやすい先生だなと思いました。
話しやすかった

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

Q10. この授業について感じたこと、気づいた点などを自由にお書きください

フリーコメント(Q1の満足度別)

【とても満足した】

2 日間 9 時半から 17 時半まで長いようで短かったと感じました
いろんな人と話すことができ、参加して良かったなと思いました。
このような機会は、大学生活でほんとにやった方がいいと思います。 友達でも学校に馴染めなかった子たちがおり、こーゆう場を作ることによって、楽しい大学生活がおき、この先の人生でも良い経験になると思う。
コミュニケーション能力が上がりとても素敵な講義だと思います
すごくためになりました！！ ありがとうございました
とても楽しかったです
ポスターではどんなことをするのかあまりわからなかったの、記載内容をもう少し追加してもいいと思います。
学部学科で離すのはめちゃくちゃいい案だなと思いました。
楽しかったです
楽しかったです遅刻してすみません！
楽しく受講できました。 ありがとうございました
参加して良かったと思いました。
自分のことを伝える大切さとか人のことを受け入れる大切さを感じれて良かったです。
自分の新しい 1 面を見つけることが出来た。 楽しかったです。
新しい自分を知ることができ、様々な価値観に触れることができて良かった。新しい友達ができ、とても楽しくやることが出来て良かった。
人との繋がりの大切さや議論することの大切さに気づいた。
人との交流、話し方、聴き方、どれも自分のかてになったと思います。二日間ありがとうございました。

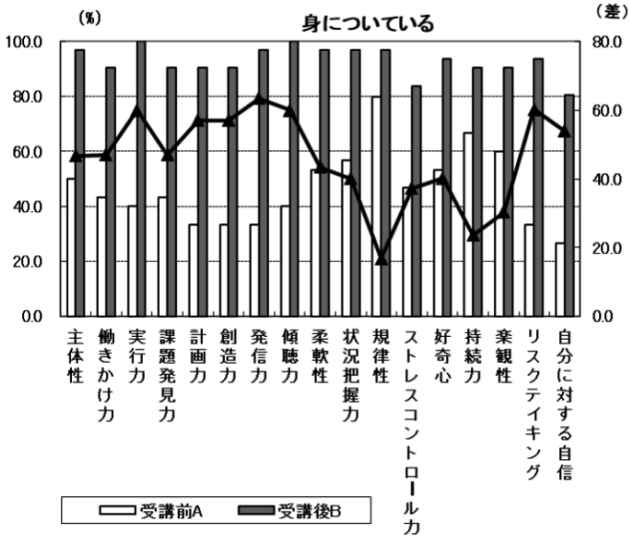


受講前・受講後比較

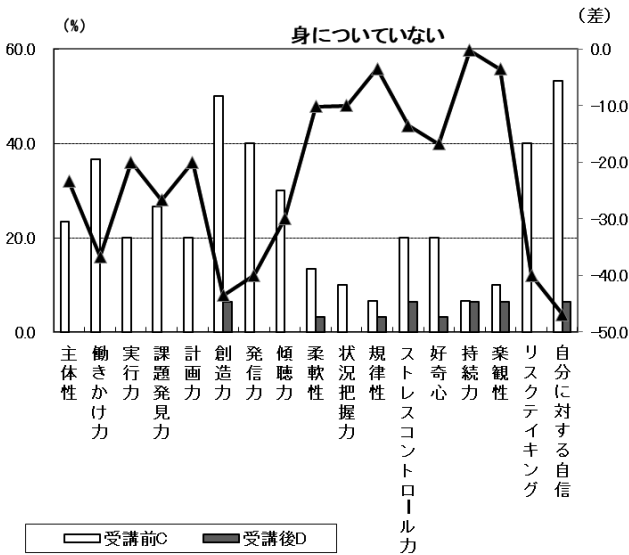
<社会人基礎力>

『PBL ゼミ 2024』アンケート集計

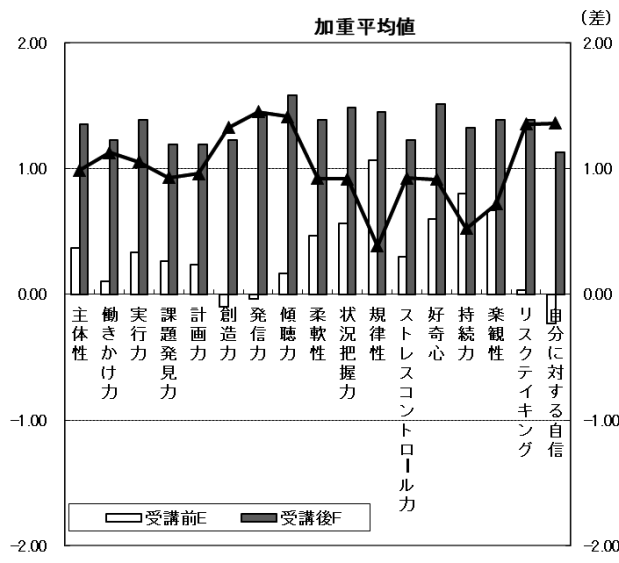
Qそれぞれの力や姿勢について、現在の自分どの程度身についていると思いますか？



	身についている		
	受講前A	受講後B	差 (B-A)
主体性	50.0	96.8	46.8
働きかけ力	43.3	90.3	47.0
実行力	40.0	100.0	60.0
課題発見力	43.3	90.3	47.0
計画力	33.3	90.3	57.0
創造力	33.3	90.3	57.0
発信力	33.3	96.8	63.4
傾聴力	40.0	100.0	60.0
柔軟性	53.3	96.8	43.4
状況把握力	56.7	96.8	40.1
規律性	80.0	96.8	16.8
ストレスコントロール力	46.7	83.9	37.2
好奇心	53.3	93.5	40.2
持続力	66.7	90.3	23.7
楽観性	60.0	90.3	30.3
リスクテイキング	33.3	93.5	60.2
自分に対する自信	26.7	80.6	54.0



	身についていない		
	受講前C	受講後D	差 (D-C)
主体性	23.3	0.0	-23.3
働きかけ力	36.7	0.0	-36.7
実行力	20.0	0.0	-20.0
課題発見力	26.7	0.0	-26.7
計画力	20.0	0.0	-20.0
創造力	50.0	6.5	-43.5
発信力	40.0	0.0	-40.0
傾聴力	30.0	0.0	-30.0
柔軟性	13.3	3.2	-10.1
状況把握力	10.0	0.0	-10.0
規律性	6.7	3.2	-3.4
ストレスコントロール力	20.0	6.5	-13.5
好奇心	20.0	3.2	-16.8
持続力	6.7	6.5	-0.2
楽観性	10.0	6.5	-3.5
リスクテイキング	40.0	0.0	-40.0
自分に対する自信	53.3	6.5	-46.9



	加重平均値		
	受講前E	受講後F	差 (F-E)
主体性	0.37	1.35	0.99
働きかけ力	0.10	1.23	1.13
実行力	0.33	1.39	1.05
課題発見力	0.27	1.19	0.93
計画力	0.23	1.19	0.96
創造力	-0.10	1.23	1.33
発信力	-0.03	1.42	1.45
傾聴力	0.17	1.58	1.41
柔軟性	0.47	1.39	0.92
状況把握力	0.57	1.48	0.92
規律性	1.07	1.45	0.38
ストレスコントロール力	0.30	1.23	0.93
好奇心	0.60	1.52	0.92
持続力	0.80	1.32	0.52
楽観性	0.67	1.39	0.72
リスクテイキング	0.03	1.39	1.35
自分に対する自信	-0.23	1.13	1.36

② サマースクール 2024 in 各務原

ぎふCOC+事業推進コンソーシアム参加大学共通プログラム

全学年対象
先着順
参加費無料

サマースクール2024

航空宇宙のまち各務原市の イメージ戦略を考える



2024

8/28 8/29 9/4

集合 8 : 30
(JR岐阜駅)

実施 9 : 30 ~ 17 : 30

岐阜県各務原市は歴史的に航空宇宙産業を基盤に県内の有数の工業市として栄えている一方で、航空宇宙の街として認知度が高いとは言えず、ブランディングが課題となっている。

航空宇宙の認知度を高め、市内外の人たちにとって住みやすい街、働きたい街となるためのイメージ戦略を提案します。

1 日目

オリエンテーション
現地見学
グループワーク

2 日目

企業交流
グループワーク
中間発表

3 日目

グループワーク
成果発表会
まとめ



中部大学

中部学院大学
大学院 / 大学 / 短期大学部

名古屋学院大学



日本福祉大学

【サマースクールとは】

ぎふCOC+事業推進コンソーシアムは、岐阜県における若者の地元定着率を上げることを目的として、岐阜県内の企業と大学生との接点増加を試み、産業界ニーズにより適合した人材を育成する教育プログラムを各大学において実施しております。その一環として、大学間共通のサマースクールを岐阜県各務原市で開催します。このプログラムでは、地域を支えている方々や他大学の学生と一緒に地域の「将来」を考えていきます。地域の現状や地元企業の理解を深め、自分の能力を磨いて、今後のキャリアの選択肢を広げましょう。

参加費

0円

ただし食費、集合場所までの交通費は自己負担。
プログラム都合により、昼食が提供になった場合は
昼食代（1食1,000円未満）を当日徴収します。

行程表

詳細は決定後に連絡しますが、活動は岐阜県各務原内で実施します。
すべてのプログラムを対面で実施します。
3日間ともJR岐阜駅集合・解散で、バスで移動します。

参加人数

30名程度

申込締切

2024年7月10日(水)

【申込方法】

7月10日申し込み締切

QRコードから申込みフォームに登録してください。
申込書を提出の場合は地域連携教育センターまで（キャンパスプラザ2階）。



氏名		学年	
学籍番号		学部	
携帯電話		メールアドレス	
集合場所	現地集合 ・ JR岐阜駅前 JR岐阜駅前からはバスで移動します。 ※状況によりフィールドワーク（現地実習）ができない場合は日程を延期する可能性があります。		
その他 （配慮事項など）			

記載いただいた情報は、サマースクール2024以外の目的に使用しません。

問い合わせ先 | 中部大学地域連携教育センター（キャンパスプラザ2階）
TEL: 0568-51-9872 E-mail: chiiki@office.chubu.ac.jp

サマースクール 2024in 各務原について（報告）

1. 概要

全体テーマ：「航空宇宙のまち、各務原市のイメージ戦略を考える」

実施日：2024 年 8 月 28 日（水）、29 日（木）、9 月 4 日（水）

見学先企業 3 社

共通：川崎重工業㈱ A コース：榎本ビーエー㈱ B コース：ウイングフィールド㈱

参加者学生：20 人

【内訳】岐阜大学 5 人、中部学院大学 1 人、中部大学 4 人、日本福祉大学 10 人、名古屋学院大学 0 人
表彰：

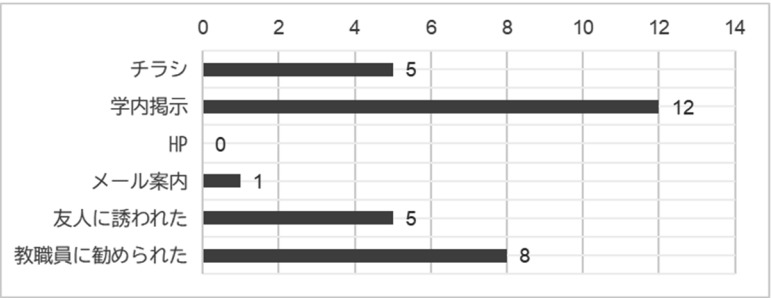
- 参加学生全員に修了証（成原統括事業推進コーディネーター名）を授与。
- 市長賞には、副賞を授与。

2. 学生アンケート結果（回答数 19（回収率 95% ※最終日は 1 名欠席だったためその場の全員が回答した））

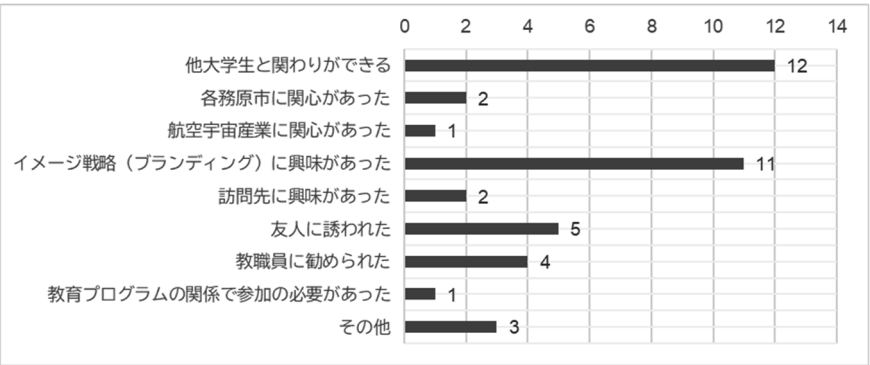
1. 回答者について

- (1) 所属大学：岐阜大学 5、中部学院大学 1、中部大学 4、日本福祉大学 10、名古屋学院大学 0
- (2) 参加コース：A コース 9、B コース 9

2. どのようにしてサマースクールを知りましたか（複数回答可）



3. 参加しようと思った理由は何ですか。（複数回答可）



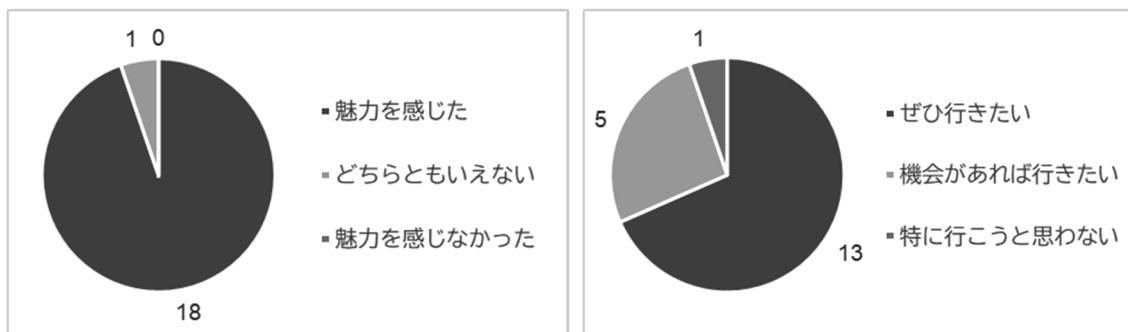
【その他の記述内容】

- ・ガクチカにできると思った（2 名）
- ・行政の方と関わりたいと思った

2 活動報告

4. 各務原市について

(1) プログラムを通して各務原の魅力を感じましたか？ (2) また各務原を訪れたいと思いますか？

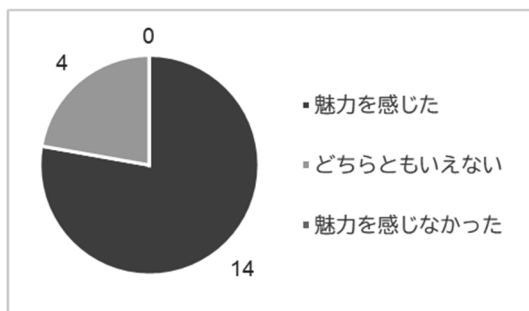


(3) 特に印象に残った各務原の魅力があれば教えてください (回答 15 件)

1	ひこーき
2	岐阜基地
3	飛行機を間近に感じることができる
4	自然が豊かで田舎すぎず都会すぎないところ！
5	大きなイオンと桜祭り
6	学びの森
7	航空の町
8	航空機を通して街を活性化させるために、イベントや工場見学などを多く行なっているところが魅力だと感じた。
9	日本の航空産業を牽引する川崎重工があること
10	自然もあり、買い物に困らない程度の都会さもある点。長く住むのにちょうど良いと感じた。
11	人情に厚く、もし引越しをするならここの各務原を選びたいくらい、環境も整っている。
12	交通の便がいいことと自然が共存していること
13	航空宇宙博物館が日本で1番大きな航空に関する博物館であること 住みやすい町であること イオンを訪れる人が年間1000万人以上もあり、日本一であること
14	航空産業の工場
15	航空機を凄い近くで見られるところ

5. 各務原市の企業について

(1) 今回のプログラムを通して各務原市の企業の魅力を感じましたか？



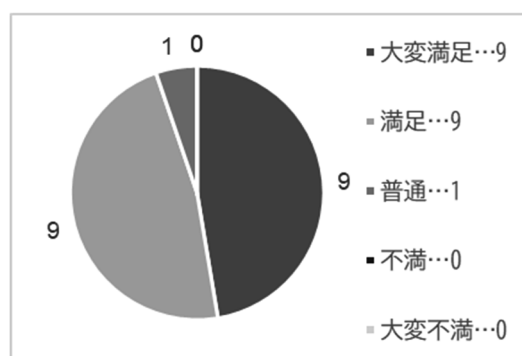
(2) 特に印象に残ったことがあれば教えてください。(回答 14 件)

1	中小は自動化が進んでいる
2	機械化が進む中でも手作業でやっている
3	作業を手作業でやっているところ！
4	工場内も結構涼しかったこと。なかなか機会のない航空宇宙産業の現場を見学できたこと
5	会社理念
6	どの企業も航空機産業を誇りを持っていることが、すごく伝わった。
7	教育体制がしっかりしているという印象を受けた。
8	人の手で作業を行っていた
9	人材育成がしっかりしていて、憧れる方々でありました。
10	飛行機の部品を作るところを見れたことが、いい経験になったと感じています。
11	航空機の部品を作るところから組み立て・整備まで幅広い企業があることに驚いた
12	航空宇宙産業においては、それぞれの会社が分業さぎょうのように、得意分野が特化していること
13	工場のイメージはあまり良くなかったが、きれいで先端技術を使っておりイメージが変わった
14	各務原市の企業は工場に遊び心を加えて、工場のどんよりしたイメージを払拭しようと努力しているところが印象に残った。

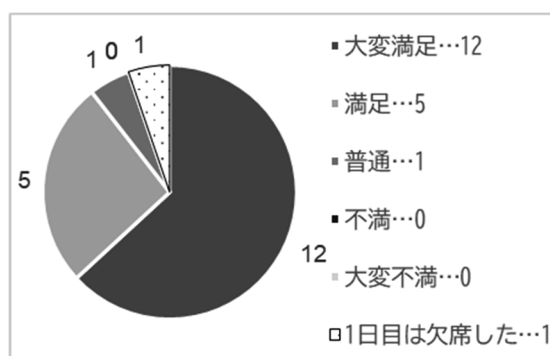
6. プログラム満足度を教えてください。

【全体プログラムについて】

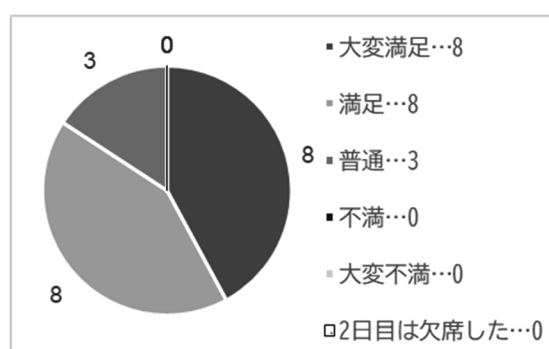
(1) 全体



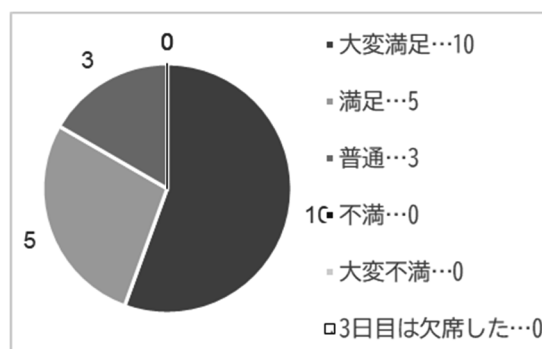
(2) 1 日目



(3) 2 日目

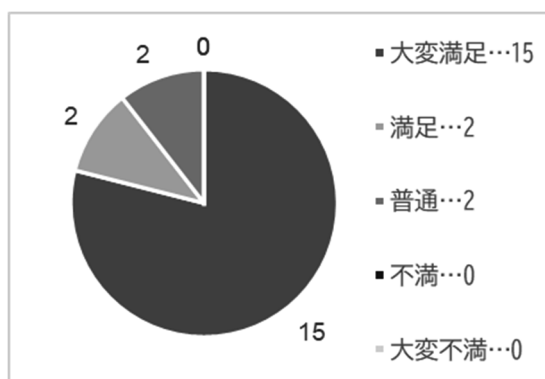


(4) 3 日目



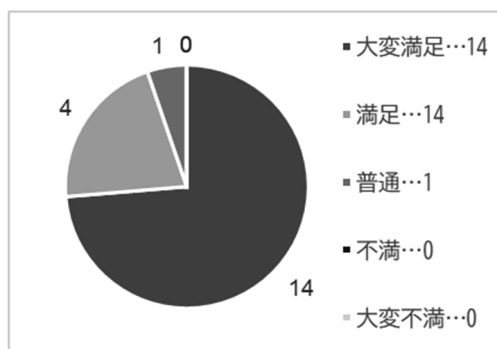
2 活動報告

(5) 教職員の関わり

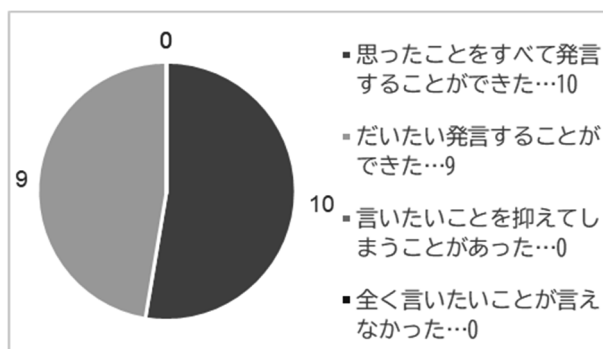


【グループワークについて】

(6) チームの雰囲気



(7) グループワークでは十分に発言できましたか



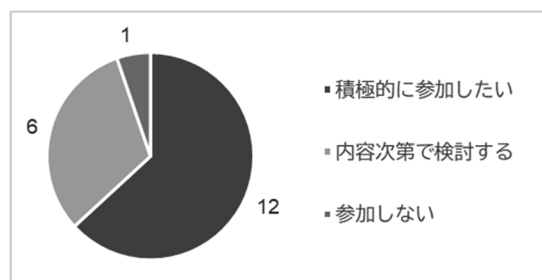
(8) 自チームの提案について、自分ではどう評価しますか？（100 点満点で何点をつけますか？）

点数	評価コメント
100	1 位だったから
100	自分の班のベストだった
70	もう少し詳しくできたらよかったと思う、発表の練習不足
70	良くも悪くもまだ後世に伝える意見がまとまっていなかったから。
90	もう少し具体的に出来たかもしれないと思ったから
90	自分の言いたいことを言えたから
70	いい提案ではあったけどまだ物足りないため
100	元々ある各務原市の魅力を盛り込みながら、新しい提案をできたから。
60	十分な準備をすることができず、あたふたしてしまったため。
90	多様な視点から練り上げたアイデアだったが、まだまだ視点が不足していた。
80	全体を通してメンバー間の意見・提案の共有が満足ではなかったため。
50	新しいイメージ戦略を考える点で視野を広げた視点を考えることができたが全体で見た際にまとまりがなく全てが中途半端になっていると感じたから。
77	程よく手伝えることが出来ました。
80	3 日間以外での、活動の時に、中々参加できなかった部分があるから

80	細かいところで調整や改善が必要であると質疑応答で感じたため
75	航空宇宙が好きな人がイベントを通して繋がれることを魅力として考えたので、ツアーの中で参加者同士が繋がれる機会をもう少し考えられたらよかった。ツアー→就職の間の部分をもう少し具体的に現実的に考えられるとよかったと考える。
100	短い期間だったが最後まで修正を重ね、限られた時間の中では満足のいくものができた
90	良い発表だと思ったがもう少し練れるところもあったと感じた。
78	ある程度手伝えることが出来ました。

(平均自己評価：81.6 点)

7. 今後も同様の企画があれば参加したいですか



8. その他気づいたことや感想、意見等、ご自由にお書きください。(回答 12 件)

1	貴重な機会をありがとうございました。この経験を自分のキャリアや大学生活に生かしていきます。
3	前年度のように宿泊の方が睡眠時間が多くとれて集中出来るかもと感じた。
4	岐阜大学さんの教員が最初におっしゃった他人の意見を否定しないことが特に印象に残っています。自分自身、何か物事を進める時にこれから役立てたいと感じました。貴重なお時間をありがとうございました。
5	各務原市に少し興味が沸いたので航空祭に行ってみたいと思う。
6	2 日目に受講したマーケティングのレクチャーがとても面白く、積極的に受講できた。他大学の学生とのかかわりは、新鮮味や新たな気づきを得ることができた。
7	他大学の違う学部の人と関わることで違う視点や学校生活の話を知ることができて楽しかった。
8	また各務原にご縁がありましたら、こちらから話そうと思いますので、よろしくお願いします。
9	講義で、地域活性化の仕方について学びましたが、実際に市の魅力を考えて、提案するというのはとても難しいことで、色々な面から考えることであったりの問題もあるので、そこがいちばん大変でした。しかし、他大学の学生とのコミュニケーションをとることで、自身の成長にも繋がったと感じています。
11	各務原市の魅力を多く知ることができ、プライベートでも長期休みを利用して訪れたいと感じました。
12	様々な大学の方とのグループワークはいい経験となる。

3. 新聞記事



地域の課題どう解決

中部大生5人が活動報告

春日井市の中部大の学生が、地域の課題解決に取り組む人材育成プログラム「地域創成メディアーター」の発表会が15日、同大で開かれた。

メディアーターは仲介者の意味。5人の学生が登壇し、各自が取り組んだ美濃和紙をすく伝統工芸の体験や、自治体のイベントの企画、発展途上国の衛生環境の向上を目指す団体での活動などを紹介。それぞれの

地域の課題解決のため、学んできた講義や取り組んできた活動を紹介する学生＝春日井市の中部大で

活動の中で、地域が抱える課題の解決に向き合い、学んだことを自己分析を絡めて発表した。

学生たちは、「地域に寄り添う大切さを身に染みて感じた」「コミュニケーション力が上がった」などと報告していた。

発表した国際関係学部3年の磯部彩香さん(20)は「どうしたら人のためになるのかを考えることができた。いろんなところで活躍できる人になりたいという思いに自信がついた」と話した。

(長谷川和華)

2024年2月16日(金) 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

支援深く 途切れなく

中部大、気仙沼と連携協定

中部大（愛知県春日井市）の学内組織「ボランティア・NPOセンター」に所属する学生たちが、東日本大震災の被災地、宮城県気仙沼市の被災者との交流を13年にわたって続けている。支援物資の配布や被災体験の傾聴から始まった活動は、時間がたつにつれて、気仙沼の地域おこしや春日井市での防災講演会開催などにも広がった。今年2月にはさらに関係を深めようと、センターと気仙沼市が連携協定を結んだ。

（目下部弘太）



連携協定締結に合わせて、これまでの活動について話す松井千紘さん＝いずれも宮城県気仙沼市で（中部大提供）



2016年 仮設住宅の住民（手前）と交流する中部大の学生たち



2014年 仮設住宅の住民と交流する中部大の学生



2013年 被災者宅に物資を配布する中部大の学生

学生らのボランティア活動結実

センターは五つの「プロジェクト」で活動しており、気仙沼市への支援は「災害対策プロジェクト」が担ってきた。学生たちが気仙沼に最初に入ったのは、震災発生から半年後の2011年9月。津波の被害が大きかった同市本吉地区の仮設住宅に物資を届け、住民の話を傾けた。その後も年に2回ずつ通い、子どもや高齢者らと交流した。

17年ごろには集団移転先が整備され、通っていた仮設住宅がなくなることに。センター側は「そろそろ区切りでは」と交流の終了も考えたが、現地で意向を尋ねると「今後も来てほしい」との声が寄せられた。そこで、翌年からは集団移転先を訪ねるなどして、支援を続けてきた。

時間の経過とともに、活動の内容は少しずつ変化してきた。18年からは中部大の大学祭で、同市の物産展を開催。気仙沼を紹介するパンフレットを作成したほか、同市の伝承施設の館長を大学に招いて防災講演会も催した。

20年度からはコロナ禍でしばらく現地に行けなくなったが、その間にコロナ後を見据えて新たな企画を練った。それは、先輩メンバーがガイドとなって、後輩の学生と一緒に気仙沼の震災遺構や伝承施設を巡るツアー。震災の教訓をメンバー間で受け継いでいく狙いで、22年に実現させた。

23年度の災害対策プロジェクトリーダーで、工学部島地震の被災地への支援も検討しているという。

**東日本大震災
13年**

「現地の人が喜んでくれると、行って良かったと感じる」と笑顔。卒業後、防災に関わる職業に就くOBもいるといい、松井さん自身も「防災関連の仕事をしたという志望が、より具体的に変わった」と語る。行政の土木職を目指しており、ハード面だけでなくソフト面の防災対策も進めたいと考えている。

防災や地域活性化を目的とした今年2月の連携協定締結を受け、最初の訪問に学生課長として同行した垣立昌寛・事務統括本部長は「学生たちがつないできた活動が、協定にまで結実した。学生たちを誇りに思う」と感慨深げに話した。学生たちは24年度、能登半島地震の被災地への支援も検討しているという。

2024年3月9日（土） 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

高蔵寺NTに住んで 自主企画で地域貢献



春日井市 中部大生7人に優秀者認定証
地域貢献活動を行う中部大（春日井市）の学生を対象に、同市の高蔵寺ニュータウン（NT）内の都市再

優秀者認定証を手にする中部大の学生たち。春日井市役所で

生機構（UR）賃貸住宅を安価に提供する制度で、市は17日、過去2年間で顕著な実績を残した学生7人に初の優秀者認定証を交付した。

中部大とUR中部支社、市が、NT周辺の活性化や空き家問題の解消、学生の経済負担軽減などを目的に2013年度からスタートした「地域連携住居制度」。現在、27人が利用している。学生のモチベーションを高め、利用者数を増やそうと、3者が協議して覚書の内容を見直した。これまで一つだったコースを

「アドバンスドコース」（年度ごとの定員10人）とスタンダードコース（同5人）に分けた。

高度な活動を期待されるアドバンスドは、入居学生自らが企画立案した地域活動を春と秋の各学期ごとに

1回以上行うことなどが条件。条件を満たせば6万円の支援金が受けられるほか、2年間継続すると「地域貢献活動 優秀者認定証」が市から交付される。

両コースとも従来通り家賃20%引きなどを受けられ

る。市役所で行われた交付式では、石黒直樹市長がNTの岩成台と藤山台に暮らす学生らに認定証を渡した。代表2人が紙飛行機教室や花壇清掃などの自主企画の成果を報告。「大

学では得がたい経験ができた」など感想を述べた。

認定証を交付されたのは次の皆さん。（牧真一郎）

新谷浩士（工学部ロボット理工学科3年）▽油上滯矢（人文学部心理学科4年）▽都築栄詞（工学部宇宙航空理工学科3年）▽山崎伸明（人文学部コミュニケーション学科3年）▽安岡涼介（同学部歴史地理学科3年）▽竹内陽加姿（心理学科3年）▽高橋杏汰（国際関係学部国際学科4年）

2024年4月18日（木） 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中部大生が七尾で 家具運搬や片付け 災害ボランティア

中部大(春日井市)の学生が25日、能登半島地震で被災した石川県七尾市で、災害ボランティアに参加し、住宅から破損した家具を運び出したり、崩れた外壁を片付けたりした。写真。

同大の団体「中部大学ボランティア・NPOセンター」から10人が参加。2年の稲垣希菜さん(19)は「倒壊した住宅や隆起した道路などを見て、地震の恐ろし

さを改めて知った。協力できることはわずかもしれないが、今後も参加したい」と話した。



2024年5月30日(木) 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

3.11東北で学びと慰霊

中部大生 被災者と交流 海岸清掃

中部大（春日井市）ボラ
ンティア・NPOセンタ
ーに所属する学生10人は3
月5日、東日本大震災の被
災地支援・交流のため、
岩手県と宮城県を訪れた。

海岸や慰霊碑の清掃活動
や震災伝承施設を視察し
た。

学生らは東日本大震災津
波伝承館（岩手県陸前高田
市）を訪れたり、東日本大

震災遺構・伝承館（宮城県
気仙沼市）の語り部に当時
の様子を聞いた。同
市の慰霊碑の清掃も行っ
た。

同センターは2011年
から毎年、東日本大震災の
被災地支援をしており、
今年2月には、防災や地域
活性化を目的に同市と連携
協定を締結。「同市の地域
活性化のためにできるこ

と」を学生たちで話し合
い、今回から、お伊勢浜で
の海岸清掃活動を始めた。
参加した「災害対策プロジ
ェクト」リーダーの同大2
年稲垣希菜さん（19）は「被
災者の方と交流する中で、
お伊勢浜がいかに住民に
愛されているか知った。き
れいになった海岸をみて喜
んでもらえれば」と話し
た。

同センターは、能登半島
地震や昨年の台風13号の被
災地にも災害ボランティア
として学生を派遣した。

（伊藤純平）



お伊勢浜の清掃活動を行う学生たち
（宮城県気仙沼市で（中部大提供）

2024年9月10日（火） 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中部大生 森を守る力に

春日井市東部の「みろくの森」で21日、木々の生育を促すための除伐活動があった。市内で環境保全活動に取り組む市民団体「みどりのまちづくりグループ」の活動で、学生団体「中部大学ボランティア・NPOセンター」の学生が参加した。

(長谷川和華)



除伐作業をする学生＝春日井市のみろくの森で

春日井 市民団体と除伐活動

参加者たちはヒノキが植えてある区域で除伐作業した。急斜面で足元が悪い中、ヒノキの生育を妨げるような細い木や草を除去。ひんやりとした新鮮な空気がたたよう中、汗を流しながら鎌やのこぎりを巧みに使い作業を進めていた。

同大工学部応用化学科3年の佐藤優成さん(20)は「環境を良くしたいと思い、参加した。慣れるまでは力の入れ方が難しかった。根がしっかり張って自然のすこさを感じる」と話した。

みどりのまちづくりグループでは植樹や間伐、ごみ拾いなどしており、活動に協力する企業や個人、学生の会員を募集している。副代表の長谷川昇さん(73)は「森の良さや大切さは五感で実感しないと分からない。活動に参加して、ぜひ体験してほしい」と呼びかけている。◎高橋勇夫代表 〓〓090(8546)5559、メールtakaisao@recommufa.jp

2024年9月25日(水) 中日新聞

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(平成25年度～平成29年度)
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(平成27年度～令和元年度)
『岐阜でステップ×岐阜にプラス 地域志向産業リーダーの協働育成』

2024(令和6)年度
「地(知)の拠点継続事業」成果報告書

発 行 日 2025(令和7)年3月

編集発行 中部大学 国際・地域推進部
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地
電話：0568-51-9872 FAX：0568-51-1172
<https://www.chubu.ac.jp/community-extension/>

印 刷 木野瀬印刷株式会社
〒486-0958 愛知県春日井市西本町三丁目 235番地

